
日本地球化学会ニュース

No.182

2005. 8. 15

主な記事

●学会記事

- 2005年度日本地球化学会年会のお知らせ(3)
- 2005年度地球化学若手会開催のお知らせ
- 評議員会，研連議事録
- 沖縄研究奨励賞・猿橋賞候補者募集

●その他のシンポジウム，人事公募等の各種情報のお知らせ

- 書評
- 訃報

★☆☆日本地球化学会のホームページが新しくなりました★☆☆

URL アドレスは，<http://www.geochem.jp/>です。

より見やすく分かりやすくを目指しております。

研究助成，シンポジウム，人事公募等の各種情報は随時更新しておりますのでそちらもご覧ください。

会員の皆さまのご意見をお待ちしております。

2005年度(第52回) 日本地球化学学会年会のお知らせ⁽³⁾

主催：日本地球化学学会

共催：日本化学会

後援：琉球大学、沖縄県教育委員会

会期：2005年9月26日(月)～9月28日(水)

会場：琉球大学千原キャンパス共通教育棟、大学会館、法文学部棟(総会・学会賞受賞講演会)
(西原町千原1)

那覇空港から北東へ約15 km にあります。バスで約1時間、モノレール(ゆいレール)からタクシーに乗り継いで、約1時間です。(地図を参照してください)

内容：課題討論、一般講演(口頭発表とポスターセッション)、総会、学会賞受賞講演、懇親会

日本地球化学学会公開講演会：サンゴ礁が語る地球環境
日時：10月1日(土) 14:00～16:00

場所：自治会館1階ホール 那覇市外バスターミナルすぐ

課題講演－1 海底熱水系と熱水プルームの地球化学

課題講演－2 緑辺海の大気・河川・海洋間の物質循環

課題講演－3 炭酸塩の地球化学－炭酸塩を用いて過去から未来への地球環境変動を解説する－

課題講演－4 地殻－マントル－核の物質循環と固体地球の化学進化

一般講演会発表分野：大気／降水、岩石／地殻、鉱床、有機物、生物、陸水、温泉／熱水、地球外物質、海洋、堆積物、環境、その他

一般講演会発表形式：

口頭発表：討論を含め15分。多くの人が発表できるように、1人1件といたします。2件目からは、ポスターセッションに申し込み願います。

口頭発表では、PC プロジェクタ1台と OHP 1台が使用可能です。口頭発表で、PC プロジェクタを使用する方は、ご自分のコンピューターを持参してください。なお、事前に正常に作動するかどうかを試写室でお試してください。

ポスターセッション：ポスターの面積は、横85 cm×縦175 cm、9時～16時、コアタイムは、13時～14

時。

総会：9月27日(火) 14:30～16:00

学会賞受賞・特別講演：9月27日(火) 16:00～18:00

懇親会：9月27日(火) 18:00～20:00

場所：琉球大学 中央食堂

参加登録費、懇親会参加費等

1. 参加登録費(講演要旨集1部と送料を含む) 予約申込は2005年9月7日まで。

会員：5,000円、学生会員：3,000円、会員外：7,000円、会員外学生：4,000円

当日受付：会員：6,000円、学生会員：4,000円、会員外：8,000円、会員外学生：5,000円

2. 懇親会参加費：予約申込は2005年9月7日まで
会員／会員外：5,000円、学生会員／会員外：3,000円

当日：会員／会員外：6,000円、学生会員／会員外：4,000円

3. 講演要旨集(当日販売)：3,000円／部(郵送の場合：3,500円／部)

4. 参加登録費、懇親会参加費、講演要旨集代金の支払い方法

参加申し込みをいただいた後、琉球大学生協から請求書と専用の郵便振り替え用紙をお送りいたします。所定の日時までに郵便振替にて送金してください。(郵便振替受領書をもって領収書といたします。別途領収書を必要とする場合、大会当日に受付に申し出てください)

郵便振替口座：02010-9-27451

加入者名：琉球大学生生活協同組合

参加申込等の締切等

講演申込締切：2005年7月6日(水) 14:00まで(終了)

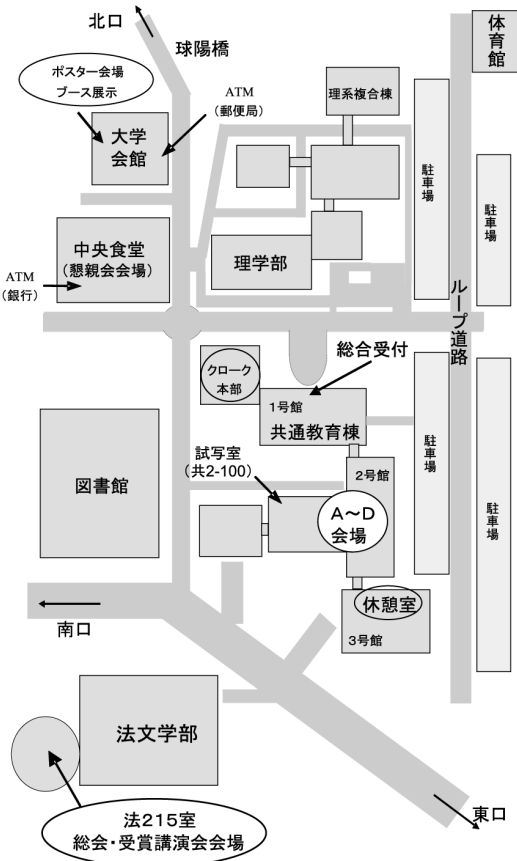
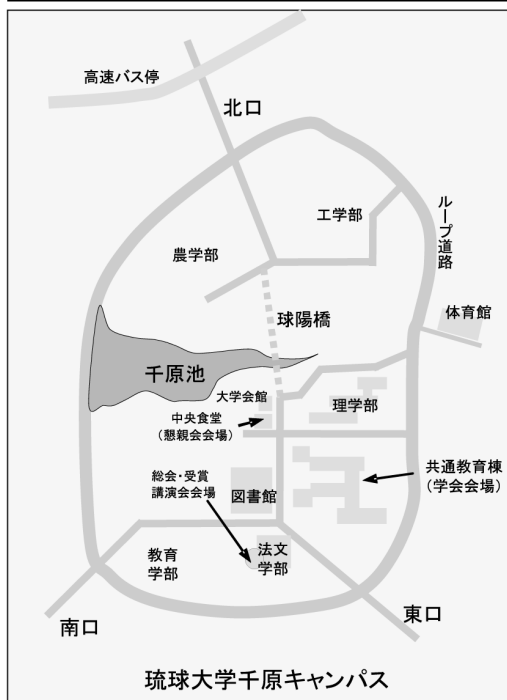
講演要旨の締切：2005年8月3日(水) 14:00まで(終了)

参加予約申込の締切：2005年9月7日(水) 14:00まで

参加申込方法：参加申込は、本ニュース添付の参加予約申込書を用いて、または、日本地球化学学会ホームページ(<http://www.geochem.jp>)あるいは、年会ホームページ(<http://w3.u-ryukyu.ac.jp/churasan/>)より、参加予約申込の仕方にアクセスして、参加予約申込書のファイルをダウンロードして、ファック

琉球大学千原キャンパス学会会場へのアクセス:

1. 空港から高速バス(最終時刻注意)で琉大口下車, 上に登って北口から徒歩15分。
2. 空港からモノレール(ゆいレール)で旭橋駅下車, 隣接のバスターミナルから98番バス(市内経由)または, 97番バス(市内・首里経由)利用。所要約60分。
3. 空港からモノレールで古島駅下車, 98番バスに乗り換え, もしくはタクシーで約15分(約1700円)。
4. 空港からモノレールで儀保駅下車, 97番バスに乗り換え。
5. 空港からモノレールで首里駅(終点), タクシーで約20分(約1300円)。



スで生協に申し込むか、又は E-mail (ryokou@fm2.seikyoku.ne.jp) で申し込んでください。

上記の申込書を使って、旅行・宿泊の手配を琉球大学生協に依頼をすることができます。設定されている日・便では、不都合という方は、生協までメールまたは Fax にてご相談下さい。可能な範囲で対応いたします。なお、お電話での即答は致し兼ねますのでご了承ください。

年会問い合わせ先

講演申込・講演要旨受付 米田成一・小林貴之

Tel : 03-3364-7142, Fax : 03-3364-7104

E-mail: nenkai2005@geochem.jp

年会連絡先

〒903-0213 西原町千原1

琉球大学理学部海洋自然科学科化学系

日本地球化学会2005年会実行委員会

渡久山 章 TOKUYAMA, Akira (実行委員長)

Tel : 098-895-8526, Fax : 098-895-8565

E-mail: atoku@sci.u-ryukyu.ac.jp

大出 茂 OHDE, Shigeru (経理担当)

Tel : 098-895-8559, Fax : 098-895-8565

E-mail: sohde@sci.u-ryukyu.ac.jp

棚原 朗 TANAHARA, Akira (情報担当)

Tel : 098-895-8530, Fax : 098-895-8565

E-mail: tanahara@lab.u-ryukyu.ac.jp

新垣 武 ARAKAKI, Takeshi (公開講演担当)

Tel : 098-893-2596

E-mail: takeshi@okiu.ac.jp

新垣雄光 ARAKAKI, Takemitsu (会場担当)

Tel : 098-895-8553, Fax : 098-895-8565

E-mail: arakakit@sci.u-ryukyu.ac.jp

琉球大学生生活協同組合 年会担当係 井樋口 豊

Tel : 098-895-6086, Fax : 098-895-7717

E-mail: ibiguchi@fm2.seikyoku.ne.jp

年会ホームページ

<http://w3.u-ryukyu.ac.jp/churasan/>

2005年度地球化学若手会開催のお知らせ

来る9月3日～5日に2005年度地球化学若手シンポジウムが開催されます。

本シンポジウムは「地球化学」に関心のある若手研究者同士の交流を目的とし、年一回開催されていま

す。

昨年・一昨年と首都圏での開催であったため、今年度は北海道での開催となりました。

北海道は有珠郡大滝村の大自然を満喫し、地球について語り合いましょう。

詳細については地球化学若手会 HP

<http://wakatekai.hp.infoseek.co.jp/>をご覧ください。

開催日時：2005年9月3日 午後～5日午前(土～月)

開催場所：北海道有珠郡大滝村(千歳空港から車で90分)

※千歳空港から会場までは貸切バスを用意する予定です。

参加資格：地球化学に携わる若手であること。(人間、死ぬまで若手です)

参加費：北海道内 1万円前後

北海道外 無料を予定

(千歳空港までの交通費は自己負担)

※社会人の方からは少し多めにいただくかもしれません、ご了承ください。

発表：招待レビュー講演・口頭発表・ポスター発表

詳細は <http://wakatekai.hp.infoseek.co.jp/> を参照ください。

日本地球化学会

2005年度第1回評議員会議事録

日時：2005年2月12日(土) 13:00～17:30

場所：東京大学・山上会館

出席者：田中剛会長・松田准一副会長・赤木右・蒲生俊敬・山本鋼志・鍵裕之・中井俊一・川幡穂高・米田成一(以上幹事)、北逸郎、千葉仁、南川雅男、和田秀樹、坂本尚義、奈良岡浩、宗林由樹、村江達士、横内陽子、河村公隆、清水洋、長尾敬介、渡久山章、植田千秋(以上評議員)

1. 2004年度第3回評議員会議事録の承認を行った。
2. 報告事項
 - 2.1 庶務(山本幹事)：【科学研究費補助金】(文部科学省)平成16年度科学研究費補助金特別研究促進費「データベース」交付内定通知の受領(2,500千円、日本地球化学会英文誌 Geochemical Journal データベース, 10.8)；平成16年度科学研究費補助金研究成果促進費研究成果公開促進費「研究成果公開発

表(B)」の実績報告書提出(10.13)；平成17年度科学研究費補助金研究成果促進費「研究成果公開発表(B)」の計画調書提出(11.12)(1,300千円、地球化学公開講演会・サンゴ礁の海が語る地球環境)(日本学術振興会)；平成17年度科学研究費補助金研究成果公開促進費「定期刊行物」(GJ)計画調書提出(6,932千円, 11.12)；平成16年度科学研究費補助金研究成果公開促進費「定期刊行物」の実績報告書提出(1.18)。【研究助成等】2004年代2回鳥居基金助成は、長島一秀・則末和宏・角野浩史各会員に交付決定；日産科学振興財団・日産科学賞(吉田尚弘会員を推薦, 9.30)；(財)とうきゅう環境浄化財団「首都圏における多摩川およびその流域の環境浄化に関する基礎研究・応用研究・環境改善計画のための研究・募集」(10.5)；(社)新化学発展協会「研究奨励金者募集」(10.5)；(財)日立環境財団・環境省・日立環境賞(産総研・地質情報研究部門・地球化学研究G(代表：今井登会員)を推薦, 1.5)。【後援・共催等】(共催)日本質量分析学会「第53回質量分析総合討論会」(H17.5.25~27)；(社)日本アイソトープ協会「第42回理工学における同位元素・放射線研究発表会(仮称)」(村松康行会員を運営委員として派遣)；日本粘土学会「第13回国際粘土学会」(H17.8.21~27)；日本学術会議核科学総合研究連絡委員会・エネルギー資源工学研究連絡委員会「第43回原子力総合シンポジウム」(村松康行会員を運営委員として派遣)(H17.5.26~27)。(後援)日韓合同陸水シンポジウム(H17.9.16~18)；日本地下水学会他「第11回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会」(H17.5.16~18)。【庶務その他】(株)国際文献印刷社との業務委託契約(10.1)；(財)日本学会事務センターの倒産に伴い、破産債権届出書を破産管財人竹村葉子弁護士へ提出(10.1)；日本学術会議・会員推薦管理事務室ならびに日本学術振興会・成果公開・普及係への事務局変更の届け出(10.1)；2004年10月新潟県中越地震等の災害に関連した特別措置の知らせを配布(11.24)；日本学術会議会員候補者に関する情報提供(松久幸敬・鍵裕之・富樫茂子・鹿園直建・川幡穂高の各会員ならびに山中高光氏, 12.13)；田中会長から、6名の選出の経緯の説明が行われた。清水評議員より、1,000を超える学術団体から約7,000名の会員候補者の推薦があり、その中から学術会員210名が、30名からなる選考委員会に91名の専門委

員を含めて選出が行われる予定であるとの説明が加えられた。(財)日本学会事務センターの倒産に伴う元理事らとの「和解交渉委員会」への参加申し込み(1.14)；1月末日を締め切りとし、「地球化学」への広告募集を行った(1.5)；学会賞各賞・鳥居基金への推薦・応募状況(柴田賞1名、学会賞6名、奨励賞4名、功労賞1グループ；鳥居基金(海外渡航5名、国内研究集会3件))。【幹事会】2005年2月5日13:00~第1回評議員会の議事内容について整理した。(出席：田中・松田・鍵・中井・川幡・蒲生・米田・山本の各幹事)

2.2 会計(鍵幹事)：2004年の会計が閉じられていない旨報告があった。

2.3 編集

2.3.1 GJ(赤木幹事)：Geochemical Journalの出版状況(Vol. 38 No. 5を10月上旬, No. 6を1月上旬に出版, Vol. 39 No. 1を2月中に出版・単独発送予定)が説明された。なお、平成16年度には、95件の投稿があり、そのうち23件受理、30件却下、42件が審査中であること、平成17年には8件の投稿があった旨報告された。編集委員の交代(Fernandez, 野尻両氏が降板, Evans, Godderis, Gruau, Miller, Wehrliの5氏が新規担当)により、42名の編集委員の体制となった。

2.3.2 地球化学(蒲生幹事)：地球化学の出版状況(38巻4号「サンゴ年輪と低緯度の海洋環境」特集号を12月27日に出版, 39巻1号は原著論文2編、受賞記念論文2編の内容で3月発行予定)が説明された。38巻4号には会長声明(国際文献印刷社の事務局の開設/連絡会費振込先/学会事務センター倒産による正確な損害額)を掲載、併せて役員リストの更新を行った。平成16年度には、29編の投稿(原著論文15編、受賞論文5編、総説7編、対外報告1編、特別寄稿1編)があり、そのうち原著論文2件却下した。原稿総数は昨年と一昨年の13編および19編に比べると多い。これは二つの特集号(「サンゴ年輪と低緯度の海洋環境」(印刷済み)と「沿岸海底湧水の地球科学」(第39巻, 第2号の予定))を企画したことによる。また、博士論文抄録は3篇の投稿があり、その都度掲載した。2004年に発行した第38巻1~4号の総印刷ページ数は302ページで、内容は原著論文6編、総説7篇、受賞記念論文5篇、対外報告1編、特別寄稿1篇、博士論文抄録3篇である。総ページ数は、37巻(2003年)の183ページ、

36巻(2002年)の189ページより多い。

2.3.3 ニュース・HP(米田幹事):ニュースの出版状況(No.179は地球化学 Vol.38 No.4に綴じ込みで、12月末に発行済み。No.180は1月末原稿締切、3月発行の予定)が説明された。連絡会ニュース No.31はNo.179に添付した(合同大会投稿締切2/21)。ニュース電子メール版は、随時送信した(前回の評議員会後、No.40~62の23回送信)。2003年会の講演要旨のJ-STAGEでの公開について、タイトル変更などの校正を終え、もうすぐ公開予定。2004年会については現在編集途中である。ホームページの英文化について、古川委員に「地球化学会とは」(What's GSJ?)の英訳をお願いした。現在、この中の「学会の沿革」部分の英訳が終わっている。メーリングリスト(電子メール版ニュース)の登録アドレスの更新のため、国際文献印刷社からデータの提供を受けた。新しいリストを立ち上げる予定である。

2.4 行事(川幡幹事):1)本年の地球惑星科学関連合同学会は5月22~26日に行われ、プログラム委員として、鈴木・角皆・下田各会員を推薦したこと、2)2006年度は日本大学・文理学部(実行委員長永井尚生会員)にて開催、事務局として東京大学海洋研究所が全面協力をして行うこと、3)日本地球惑星科学連合開設準備会(第2回から第4回)で文部科学省からの受け口としての連合会を作るための会議経過について報告があった。連合会の組織は評議員会(各学会長)、運営委員会(会議議長+副議長+7名の委員会の長)ならびに各種委員会よりなること、経費は合同大会の参加費を引き上げることで賄うことが補足された。【2005年学会について】(渡久山評議員)2005年地球化学会年会は9月28~30日の予定、10月1日に市民講演会の予定であり、教室使用料(約55万円)を琉球大学側に補助申請中である旨報告された。【Goldschmidt 2005】(田中会長)松田副会長が参加し、GJ賞の授与を行う。また、日本地球化学会のブースを設置し、広く宣伝を行う予定であることが報告された。【2004年学会について】(和田評議員)講演数284、口頭発表165、ポスター113件、参加者337名があり、J-stageを含めて特に大きな問題なく終了した旨報告があった。

2.5 各種委員会:【将来計画委員会】(松田副会長)
1)パンフレット作成について、2)HPの充実な

らびに国外会員の権利について、3)若手会員・シニア会員の特典について、4)アジア地域の連携について、活発な議論が行われたことが報告された。将来計画委員会からの提案事項をまとめて、次回の評議員会において議論することとした。

2.6 【研連報告】第19期第4回地球化学・宇宙科学研連議事録(案)の報告(清水評議員)「アジア地域における地球化学・宇宙化学の連携」および「地球化学における環境学」に関するアンケートを集計中であること、集計結果について地球化学のニュースに掲載の予定であること、の報告があった。第19期第5回海洋科学研連議事録(案)の報告(蒲生評議員)地球化学の関わる大きなプロジェクト(SOLAS 大気海洋間の物質交換; Geotraces 海水中の微量元素・同位体による海水・物質循環)が国際的な評価を受けつつあるとの報告があった。また、「時限つき分科細目の設定」の依頼を受けて細目「海洋環境学」を申請中である。第19期第3回惑星科学研連議事録(案)の報告(坂本評議員)科研費細目問題とSPRING-8課金について議論がなされた。第19期第3回陸水専門委員会の報告;第19期第4回鉱物学研連議事録(案)の報告(千葉評議員)IMA-Kobeの準備等が議論された。【その他】なし。

2.7 連絡会等【地学教育委員会】合同大会における「新しい地学教育の試み-2 学習指導要領を考える」において、瀧上・高江洲両委員が講演することが報告された。

3. 審議事項

3.1 地球化学講座の割引販売について

培風館では、地球化学講座既刊の第3巻と新刊の第4巻、第6巻をあわせて、会員2割引販売を企画している。一括して郵送すると割安になるが、冊子により重さが異なるので、あらかじめ郵送料を設定する事ができない。郵パックの着払いか、最軽量の冊子の郵送料に設定し、発送差額分を地球化学会が補填するか、どちらかの方策が考えられる。後者の場合には学会が差額を培風館に補填することを了承した。

3.2 平成16年7~12月の会員の異動について(7月1日~12月31日)

以下の会員の異動を承認した。

【入会】

正会員

9282333 西岡 純 ニシオカジュン

(財)電力中央研究所

学生会員

2282329	石村豊穂	イシムラトヨホ
	北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学	
	専攻	
9282331	早津岳宏	ハヤツタケヒロ
	上智大学大学院理工学研究科化学専攻無機	
	化学研究室	
6282332	入澤啓太	イリサワケイタ
	東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星	
	科学専攻	
9282332	石飛智稔	イシトビミノル
	奈良教育大学大学院教育学研究科	

【退会】

正会員

1281479	熊谷 哲	3281947	緑川 貴
6281463	細江守一	0280477	佐野方昂
0281034	倉田隆喜	9280139	池田長生
1280908	櫻本勇治	3281185	玉利祐三
4280532	正路徹也	4281898	大場忠道
6281032	河原利幸	2281160	田中久雄
3280197	金森暢子	6280196	金森 悟
6280419	大沢眞澄	0280336	村山治太

現在シニア会員の資格を検討中であるので、シニア会員の新規規定に当てはまる上記退会会員の復帰は特例として復帰を認める可能性を残すこととした。

在外会員

2281847 DRAGUSANU, CRISTIAN

シニア会員

9280452 岡部史郎

賛助会員

8280954 東京電力(株) 総務課

【変更】

9281989	八十島光子	学生会員から一般会員
2280547	杉崎隆一	一般会員からシニア会員
9282104	山口善敬	学生会員から一般会員
8281500	木多紀子	一般会員から在外一般会員
5281943	Michiyo Kawai (川合美千代)	学生会員から在外一般会員

2004年12月31日現在の会員数

	正会員	(一般正会員)	(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
2004. 6. 30	965	(847)	(122)	(11)	13	13	1006	41
入会		(1)	(4)				5	
退会		(-17)		(-1)	-1		-19	-1
除名		(-17)	(-8)				-25	-9
変更		(2)	(-3)	(1)				2
2004. 12. 31	942	(816)	(115)	(11)	13	13	967	33

3.3 地球化学の販売価格について

山本庶務幹事から一冊2,000円で販売するとの提案を受け、議論を行ったが、テラ出版がセット6,000円で販売しているため一冊1,500円で販売とすることに決定した。

3.4 地球化学・Geochemical Journal 製本保管について

山本庶務幹事から「Geochemical Journal のバックナンバーの製本は1冊を国際文献印刷に、No. 150までのニュースは3冊を作り国際文献・ニュース幹事・庶務幹事が保管、合冊前の地球化学は2セットを国際文献と地球化学編集幹事が保管、合冊後の地球化学は4セットを国際文献・ニュース幹事・庶務幹事ならびに地球化学編集委員長が保管する。」との提案を受け、承認した。

3.5 パンフレット作成について

将来計画委員会において議論された「日本語・英語版パンフレット」作成に関して議論を行い、10万円程度を上限として、作成を承認した。さらに費用がかかる場合には、改めて評議員会にて議論を行うこととした。

3.6 選挙管理委員会について

選挙管理委員長には鍵評議員、委員として米田・長尾評議員にお願いすることとした。投票の締め切りは8月末、投票用紙の発送は7月、評議員推薦依頼は地球化学 No. 2 に掲載し6月末を締め切りとする。この締め切りに間に合わせるために、5月末には名簿号の発行をめざすこととした。在外会員の選挙権については、現在見直し中であるため次回までに明文化することとし、今回は従来同様に被選挙権・選挙権を認めないこととして実施することにした。

3.7 日本地球惑星科学連合への参加について

日本地球惑星科学連合規約について議論を行った。地球化学会選出委員として、川幡穂高・清水洋・海老原充評議員を推薦することとした。

3.8 科研費審査員候補者推薦選挙

投票の結果、【固体地球化学】鍵裕之(9票)、松

田准一（8票）、長尾敬介・中井俊一（7票）、清水洋・海老原克（6票）、山本鋼志・田中剛（5票）。

【大気水圏生物圏地球化学】河村公隆（10票）、蒲生俊敬（7票）、植松光夫（6票）、南川雅男（5票）、千葉仁・川幡穂高・角皆潤（3票）、佐野有司・田上英一郎・増澤敏行・坂田将・山本鋼志（2票）という結果になった（敬称略）。得票数が同数の場合には若い人から推薦を行うこととした。固体地球化学で、上記の人で既に推薦されている人が多く5名に達しない場合には、両分野で得票している高橋嘉夫・和田秀樹会員を推薦することとした。

3.9 GJ 賞について

赤木 GJ 編集委員長から、GJ 賞候補として「Oxygen and carbon isotopic ratios of tree-ring cellulose in a conifer-hardwood mixed forest in northern Japan, pp. 77-88」の著者である Nakatsuka, Ohnishi, Hara, Sumida, Mitsuishi, Kurita & Uemura の提案があり承認した。本来、各賞選考委員会を経て提案されるべき議題であるが、2月末がゴールドシュミット2005のプログラムに載せるための報告期限であるため、本提案をもって承認した。

4. 今後の評議員会・幹事会の予定

- ・2005年度第2回幹事会：6月4日(土) 13時から山上海館
- ・2005年度第2回評議員会：6月11日(土) 13時から山上海館
- ・2005年度第3回評議員会：9月27日(火) 予定
- ・新旧合同評議員会：9月30日(金) 夕刻から 予定

第19期海洋科学研究連絡委員会（第6回） 議事録

日 時：平成17年2月21日(月) 14時～17時

出席者：谷口旭、蒲生俊敬、植松光夫、中田薫、山口征矢、伊藤絹子、前田明夫、松山優治、川辺正樹、灘岡和夫、友定彰、古谷研

欠席者：北村佳照、磯部稔、寺崎誠、高橋正征、松田治、徐垣、竹内謙介、新野宏、佐藤義夫、池田元美

場 所：日本学術会議 第6部会議室

前回議事録について

事前にメールで回覧し、必要な修正を施してあった、第5回海洋科学研究連絡委員会（平成16年11月8

日開催）の議事録案を承認した。

I. 報告事項

1. 日本学術会議の最近の動向について

日本学術会議の最近の動向について、以下に示す内容の報告があった。

(1) 日本学術会議会員候補者選考委員会関係（谷口委員長）

会員候補者の情報提供についての速報版が公表され、提供機関件数は1,058件提供人数は6,751人である。また、日本学術会議会員候補者選考委員会委員名簿（30名）と日本学術会議会員候補者選考委員会専門委員名簿（90名）もすでに公表されている。

(2) 日本学術会議の新しい体制のあり方に関する懇談会（谷口委員長）

ここにおいて検討されている項目は、1）政策提言機能発揮のあり方について、2）学術団体との連携のあり方について、3）国際交流活動のあり方について、4）連携会員の職務、任期等、選考方法など、5）常置及び臨時の委員会の役割、編成、構成など、6）幹事会への権限委任事項である。

(3) 事務局の再編について（谷口委員長）

基本的考えかたとしては、管理部門の体制を圧縮し、企画立案機能、審議支援機能、国際交流機能を充実することとしている。また、課題別委員会（仮称）の審議支援機能を強化するため、大学など研究機関、シンクタンクなどからの研究者（科学者）の登用も予定されている。

(4) 国際交流に関するアンケートについて（川辺委員）

国際学協会への対応を行っている研連に対し、標記アンケートが昨年末に実施された。地球物理学研連では、国際対応・交流は研究活動の一部であり、分野ごとの対応のしかたにも特色があるので、全てを副会長所掌に集約するのは無理であり、現行のように個別の委員会で対応すべきであるという意見を提出した。なお、地球物理学研連とともに、国際学協会に対応している7つの傘下研連・専門委員会からもアンケートに回答した。

(5) 水関連拡大委員会について（川辺委員）

第20期学術会議での水に関する課題別委員会の設置をめざし、標記委員会では8つの課題を学術会議に提出することにした。4月末までに説明の文案を作成し、その後学術会議事務局に提出する予定であ

る。

2. 内外の関連機関組織からの報告について

(1) SCOR 関連（谷口委員長）

SCOR 関連の最近の動向について報告があった。

- 1) 今年のワーキンググループの提案受付について
毎年、2～3件が採択されているので、提案してほしい。締め切りは4月15日である。（後に4月末に延期された）

2) 第37回執行理事会の開催について

オーストラリアのケアンズにおいて開催予定であり、nominated members である池田委員、蒲生委員、谷口委員長以外の人の参加も可能である。なお、蒲生委員の代表派遣旅費の採択が内定している。

3) SCOR 分担金について

ICSU の方針により分担金の額が1%上がるが、カテゴリーⅠ、Ⅱ、Ⅲの額は据え置かれる。日本はカテゴリーⅤにあるので、分担増に見合った予算措置を日本学術会議に申請しなければならない（申請済み）。

(2) POGO について（谷口委員長）

POGO (Partnership for Observation of the Global Oceans) は国際的な海洋調査機関の連盟であるが、日本で加入しているのは JAMSTEC だけである。インド洋、南大西洋などはデータが少ないので、それに面した国の研究調査や研究者育成に力をいれる計画である。日本財団は POGO の事業に大きな資金援助をしており、高い評価を受けている。科学者個人も、POGO のホームページを参考にして、研究者育成などで貢献してほしい旨の報告があった。

(3) SOLAS 関連（植松委員）

今年8月にコルシカで SOLAS Summer School が開催される予定であること、1月20～21日に国内の SOLAS 小委員会が開催されて、わが国が実施すべき研究計画などについて検討したことが報告された。その際、SOLAS に限らず、わが国における国際共同および大型海洋科学研究計画立案を検討する委員会ないし組織の必要性が強く認識されたので、本研連のような委員会等を引き続き設けるよう新生学術会議へ文書によって引き継ぐことが提案され、それを承認した。

(4) GEOTRACES について（蒲生委員）

GEOTRACES（ジオトレイシス：海洋の微量元

素・同位体による生物地球化学研究）計画が、SCOR の国際大型プログラムとしてスタートし、サイエンスプラン立案の最終段階に至った。それは、1) 海洋環境のインターフェースにおける化学過程、2) 海の中でおきている化学過程（生物ポンプなど）、3) それらに時間軸を加えての解析（古環境 proxy など）という3本にそって進められる予定であることが報告された。なお、国内における GEOTRACES 計画の進め方と国際連携のあり方を議論するために、本研究連絡委員会の下に「GEOTRACES 小委員会」を招集申請することが提案され、了承された。

(5) 東京大学海洋研究所研究船共同利用運営委員会関連（山口委員）

- 1) 学術研究船白鳳丸・淡青丸の共同利用研究応募・採択状況の報告、および両船の平成

17年度運航予定について提案があり了承された。

- 2) 淡青丸の代船建造について基本構想の説明があった。代船は2,000t 規模が想定されており、今後 WG で検討を進めていくことになった。

(6) 長崎大学の新船について（松山委員）

長崎大学では鶴洋丸、鶴水の2船を廃船し、新たに約170t の新船が2月に竣工式を終えたこと、広島大学の代船建造の概算要求が認められたことの報告があった。しかし、練習船の代船建造関連の予算が厳しい状況にあると紹介された。

(7) 海洋観測士と JABEE について（山口委員、松山委員）

東京海洋大学では、17年度卒業生から海洋観測士の称号認定単位（大学認定）を設けることが報告された。JABEE はすでに海洋大海洋科学部（旧東京水産大学プログラム）、長崎大で始まっており、教育改善という意味でよい効果を生んでいるので、海洋観測士の認証制度もよい効果をもたらすと期待されている。

以上の審議終了後、海洋科学関係の研究のあり方についての自由に意見交換を行った。

次回委員会開催の予定は6月13日である。

第19期第6回地球化学・ 宇宙化学研究連絡委員会議事録

日 時：2005年6月10日(金) 13:30~16:00

場 所：日本学術会議第6部会議室（6階）

出席者：山中高光（会員）、海老原充（地球化学）、佐野有司（地球化学）、清水洋（地球化学）、下山晃（化学）、鈴木徳行（地質）、長尾敬介（地球化学）、中村栄三（岩鉱）

欠席者：蒲生俊敬（地球化学）、留岡和重（鉱物）、平原和朗（地球物理研連）

報告事項

1. 学術会議関係

- (1) 第144回総会報告（平成17年4月18~20日開催）（山中会員）
 - (i) 学術会議声明「日本の科学技術政策の要諦」
 - (ii) 対外報告「科学技術基本計画における重要課題に冠する提言」の科学技術政策担当大臣への手交
 - (iii) 部・委員会報告の外部への発表（第4部報告「先端的大型研究施設での全国共同研究の在り方」（提言）を含む）
 - (iv) 国内・国際会議後援（地球惑星科学関連学会合同大会を含む）
 - (v) 運営審議会付置各種委員会報告（科学技術基本計画レビュー委員会報告を含む）
 - (vi) 常置委員会報告
 - (vii) 特別委員会報告
 - (viii) 各研連報告（179研連からの報告）
 - (2) 第4部会報告（平成17年4月18~20日開催）（山中会員）
 - (i) 8つの対外報告（案）が審議され、最終的に地球研連からの「21世紀の地球電磁気学」が推薦された。
 - (3) 第6回「日本学術会議の新しい体制の在り方に関する懇談会」（平成17年4月18日）（山中会員）

平成17年10月1日発足の新しい学術会議の体制についてこれまで6回議論され、平成17年8月下旬に開催される総会で最終的に決定される予定。
 - (4) 144回総会に向けて研連報告を本年3月末に提出した。清水委員長
- #### 2. その他
- (1) 「第3期科学技術基本計画の「5つの戦略」」について（山中会員）

平成18年度から向こう5カ年の基本方針として平成17年4月に文科省が発表した標記内容について資料をもとに説明があった。

(2) 国際学術団体との対応について（清水委員長）

- (i) 本年度の Goldschmidt Conference（米、アイダホ州）開催に対して、日本地球化学会から分担金が支払われた。来年度開催に関しても、同様の処置がとられる予定。

審議事項

1. 「アジア地域における地球化学・宇宙化学の連携」及び「地球化学における環境学」に関するアンケートの取り扱いについて
委員会の「審議経過」という形で公表する方向で、第4部部会長と協議する予定。また、日本地球化学会の会誌「地球化学」においても掲載予定。
2. 今期のまとめ
資料を基に、第19期の活動概況を確認した。

その他

1. 次回の委員会の日程について
次回の委員会は開催しないことで合意した。しかし、8月末に開催される予定の総会の内容によっては開催することもあり得ることを確認した。

平成17年度（第27回）沖縄研究奨励賞推薦

下記のように沖縄協会から「平成17年度（第27回）沖縄研究奨励賞」推薦依頼が学会宛に届いております。

応募されます方は、平成17年7月5日までに、庶務幹事・山本鋼志（shomu@geochem.jp）まで御連絡下さい。

応募用紙をお送り致します。

賞に関する詳細は、<http://homepage3.nifty.com/okinawakyoukai/>をご覧ください。

庶務幹事・山本鋼志

記

1. 推薦応募開始：平成17年7月15日（当日消印から有効）
2. 推薦応募締切：平成17年9月30日（当日消印まで有効）
3. 記者発表：平成17年12月9日
4. 贈呈式・受賞記念講演及び祝賀会

平成18年1月19日

パシフィックホテル沖縄（那覇市）で開催

[応募書類の送付先及びお問い合わせ]

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-6-15

グローリアビル 7F

(財)沖縄協会「沖縄研究奨励賞」担当：山岸貴生

Tel：03-3580-0641, Fax：03-3597-5854

HP: <http://homepage3.nifty.com/okinawakyoukai/>

E-mail: fvgm0090@mb.infoweb.ne.jp

2005年度女性科学者に明るい未来をの会 「猿橋賞」候補者募集

女性科学者に明るい未来をの会より、「猿橋賞」候補者の推薦を依頼します。下記の要領で応募して下さい。募集内容、応募用紙などは各学会事務局に送付してありますが、電子メールでお申出頂ければ、様式を添付ファイルでお送りします。また、<http://www.saruhashi.net/>からもダウンロードできます。

- 1) 対象：推薦締切日に50才未満で、自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者
- 2) 表彰内容：賞状、副賞として賞金30万円、毎年1件（1名）
- 3) 締切日：2005年11月30日
- 4) 応募方法：所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由（800字程度）、略歴、推薦者（個人・団体）、及び主な業績リストを記入して、主な論文別刷10編程度（2部ずつ、コピーも可）を添え、5)の送付先までお送り下さい。
- 5) 推薦書類送付先：

〒100-0005 千代田区丸の内1-4-3

UFJ 信託銀行リテール総括部

女性自然科学者研究支援基金 江川康治

（封筒には、「猿橋賞推薦書類」と明記して下さい。

書類は、猿橋賞選考のために選考委員会などで用いられます。書類は返却いたしませんのでご了承下さい）

- 6) 問合せ先：saruhashi2005@saruhashi.net

北海道大学大学院理学研究科 地球惑星科学専攻教員公募

1. 職種・人員・専攻分野

地球惑星物質圏科学講座 助手 1名

専攻分野：岩石学および火山学。地質学的、岩石

学的、地球化学的あるいは実験的手法で、火山・噴火およびマグマの研究・教育を行える人。

2. 応募資格：博士号を取得していること

3. 着任予定時期：採用決定後、できるだけはやく

4. 応募書類

イ) 履歴書（内外の学会活動、受賞歴、企画・参加した（進行中も含む）プロジェクト研究歴、各種研究費受領歴なども記載すること）

ロ) これまでの研究経過（2,000字程度）

ハ) 研究業績目録（和文のものは和文で表記すること）

A. 査読のある原著論文

B. 査読のない論文、総説など

C. 著書

D. 解説、報告などその他の出版物で特に参考になるもの

ニ) 主な原著論文の別刷または著書5篇以内（複写可）

ホ) 今後の教育・研究の計画・抱負（2,000字程度）

ヘ) 応募者について照会が可能な方2名の氏名と連絡先

5. 応募締め切り：2005年9月12日(日) 必着

封筒の表に「教員公募関係」と朱書き、簡易書留にて郵送すること。

また、公募書類中の第1ページに応募先講座名・職種を明記すること。

6. 書類の送付先及び問い合わせ先：

〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

北海道大学 大学院理学研究科地球惑星科学専攻
中川光弘

Tel：011-706-3520（ダイヤル・イン）

Fax：011-746-0394

E-mail: nakagawa@ep.sci.hokudai.ac.jp

地球惑星科学専攻教員構成（2005年5月27日現在）

地球惑星物質圏科学講座

教授：藤野清志、小笹隆司、中川光弘、坂本尚義
助教授：新井田清信、橋元明彦、角皆潤、永井隆哉

講師：三浦裕行

助手：中川書子（本公募）

地球惑星進化科学講座

教授：岡田尚武、鈴木德行、竹下徹

助教授：川村信人、西弘嗣、阿波根直一

講 師：沢田健，渡邊剛

助 手：岩田圭示，前田仁一郎

地球惑星流体科学講座

教 授：渡部重十，林祥介，見延庄士郎

助教授：知北和久，倉本圭

講 師：遊馬芳雄

助 手：小高正嗣

地球惑星物理科学講座

教 授：小山順二，蓬田清，池田隆司，日置幸介

助教授：森谷武男，笹谷努，前田亟

助 手：吉澤和範

地震火山研究観測センター（協力講座）

教 授：笠原稔，岡田弘，茂木透

助教授：高波鐵夫，大島弘光，谷岡勇市郎，橋本武志

助 手：勝俣啓，高橋浩晃，村井芳夫，森濟，西村裕一，青山裕

総合博物館（教育協力）

教 授：松枝大治

助 手：小林快次

なお，教育・研究にあたっては上記の講座制にかかわらず，研究室・グループ制で運営されており，その構成は変更が可能です。また全教官は，大学院教育のほか，全学教育・学部教育も担当しています。

理学研究科では平成18年度に改組を計画しており，地球惑星科学専攻もその対象となります。

岡山大学地球物質研究センター教員公募

1. 公募の職種及び人員

助教授または助手 2名

2. 研究分野

地球化学，宇宙化学，岩石学

地球・惑星の起源，進化及びダイナミクスを地球・宇宙化学的ならびに岩石学的な手法を用いて解析する。

当センターの研究者と協力して上記分野及び関連する分野における斬新な研究を行うとともに，大学院生の教育にも積極的に参加し，新しい研究領域を開拓する意欲的な方を歓迎する。

当センターは，基礎地球科学の全国共同利用研究機関であるだけでなく，本年4月1日から「地球物質科学研究センター」へ改組することにより，国際共同研究を実施しやすい体制を構築しつつある。また，平成15年度には21世紀 COE プログラムの実施

機関としてセンター単独で選定され，国際的教育研究拠点の形成を目指している。従って，当研究センターの研究者には，国内外の研究者と共同研究を行うための支援業務が要請されていると同時に，それに積極的に参加することも期待されている。

3. 資格及び応募条件

博士の学位を有すること。また，表面電離型質量分析計，安定同位体用質量分析計，誘導結合プラズマ質量分析計，二次イオン質量分析計，透過型電子顕微鏡，電子線プローブマイクロアナライザー等を用いた地球及び地球外物質の元素定量分析，高精度同位体分析，極微細組織解析等を経験し，研究目的にあった分析技術の開発を行う意欲を有することが望ましい。さらに，高精度分析の結果に基づいて，他分野の科学者と協力しつつ新しい地球宇宙化学の建設に意欲的な人を望んでいる。

4. 公募締切

平成17年8月31日(水) 必着

5. 着任時期

決定後なるべく早い時期を希望する。

6. 提出書類

(1) 応募の場合

- 履歴書
- 業績リスト及び主要論文の別刷（5編以内）
- これまでの研究内容及び今後の研究計画・抱負書（各2,000字程度）
- 応募者について意見を求めることのできる方2名の氏名，所属及び連絡先（事前に応募することに関して了承を得ていること）

(2) 推薦の場合

- 推薦書（推薦者以外の者による意見書1通を添付のこと）
- 履歴書
- 業績リスト及び主要論文の別刷（5編以内）

7. 問い合わせ先

岡山大学地球物質科学研究センター

分析地球化学部門 中村栄三

Tel：0858-43-3745（直通）

Fax：0858-43-2184（事務室）

E-mail: eizonak@misasa.okayama-u.ac.jp

ホームページ <http://www.misasa.okayama-u.ac.jp/>

8. 書類送付先

〒682-0193 鳥取県東伯郡三朝町山田827

岡山大学地球物質科学研究センター長

中村栄三 宛

「教員公募書類在中」と朱書きの上、書留で郵送のこと

Tel : 0858-43-1215 (代表)

E-mail: eee0502@adm.okayama-u.ac.jp

9. 選考方法

岡山大学地球物質科学研究センター教授会で審査し、同運営委員会の上の承認を得て決定する。

書 評

「放射化学」(Radiochemistry and Nuclear Chemistry, Third Edition)

ショパン・リルゼンツィン・リュードベリ

(Gregory R. Choppin, Jan-Olov Liljenzin, Jan Rydberg 著)

訳者代表 柴田誠一

A 5判, 804ページ, 上製

定価18,900円(本体18,000円)

発行 丸善株式会社 2005年1月

ISBN 4-621-07511-X C 3040

ウランの自然放射能の発見が、原子の内部構造を説明するきっかけとなり、隕石の宇宙元素存在度の概念が、宇宙における元素合成とその進化の研究に重要な役割を果たしたことで知られるように、地球宇宙科学と核科学とは密接に関係してきた。世界的な核関連研究の後退の中で、核科学はかつての輝きを失っているが、理工学の諸々の分野でその基礎の重要な一部を構成していることには変わりはない。本書を読むと、地球宇宙科学分野の基礎として核科学が深くかかわっているのがよくわかる。

本書の原版は1980年以来20数年にわたって放射化学、核化学の教科書として親しまれてきたショパンらによる“Radiochemistry and Nuclear Chemistry”の第三版の日本語版である。核科学を化学的な側面から研究するのが放射化学・核化学で、専門家間では区別されるが、日本語版では「放射化学」の名称で統一されている。本版は、全体を通して「放射化学」の基礎と応用を丁寧に解説した優れた教科書である。応用に関しても、それぞれ具体例を挙げて原理や仕組みが丁寧に書かれていて、知識より考え方を重視する内容となっている。また練習問題もテキストの内容をよく理解できるように工夫されている。訳者は柴田誠一氏を訳者代表とする、この分野を代表する研究者群で構

成され、それぞれの得意分野を担当することで、翻訳にありがちな専門用語の混乱を避けたという。実際に読んでみて、高度な内容を含みながらも難解さをあまり感じさせない文章となっている。

全体の内容は第1章の「核科学の起源」に始まり、22章にわたって放射化学の基礎と応用について纏められている。第2章以下は、「原子核・同位体・同位体分離」、「原子核の質量と安定性」、「不安定核と放射壊変」、「天然放射性核種」、「放射線の吸収」、「物質と放射線の相互作用」、「検出と測定の方法」、「放射性トレーサーの利用」、「宇宙線と素粒子」、「核構造」、「核反応のエネルギー論」、「粒子加速器」、「核反応の機構とモデル」、「放射性核種の製造」、「超ウラン元素」、「熱核反応：始まりと未来」、「放射線生物学と放射線防護」、「原子力の基礎」、「原子炉」、「核燃料サイクル」、「環境中における放射性核種の挙動」となっている。放射化学の教科書であるため各章のタイトルから地球化学のかかわり方を見出し難いが、以下に読者のために簡単な紹介をする。

第1章は、地球化学が20世紀の科学を先導した核科学の研究に密接に関わってきた経緯を読み取れるであろう。第2章では同位体地球科学の基礎となる同位体や同位体効果について、第5章では、宇宙線生成核種や年代測定のテーマを含む天然放射性核種について、第17章で宇宙における元素合成の問題が、第21章で核燃料サイクルと高レベル廃棄物最終処理、第22章で放射性核種と環境問題がそれぞれ主題として扱われている。また、第9章では、放射化分析や環境トレーサーなどへの利用が取り扱われている。以上の章では地球科学の内容に関連した応用問題も数多く採用され、内容をより深く理解するうえで有効であろう。

以上のように本書は放射化学の教科書ではあるが、地球科学に関わる事項を多く含んでいて、原子力に関わる学生・院生の教科書としてはもちろん、一般の地球科学に携わる学生や研究者が座右においてハンドブックや辞書代わりに用いるのに適した教科書である。またここに書かれた内容は、核科学全体を広く俯瞰し、我々の生活に関連した応用も幅広く取り上げているので、読み物、あるいは教養書としても楽しむこともできる。

(国立歴史民族博物館 今村峯雄)

「海と湖の化学—微量元素で探る」

監修：藤永太一郎 編集：宗林由樹・一色健司

560ページ 京都大学学術出版会
2005年3月25日発行 4,000円

評者は本書の24名に亘る京都大学理学部およびその学派（以下京都学派）に属する執筆者の内、9名と観測航海や同じ研究室で一緒に仕事をしてきた経験がある。そして、ことあるたびに彼らの海洋観測や分析に関するテクニックの高さに感嘆させられてきた。そのような彼らの研究成果の集大成とも言える本書は、期待に違わず大変興味深いものに仕上がっている。

本書は、地球に関する概要に関する序から始まり、微量元素をキーワードとした海と湖の化学のトピックスに関する第Ⅰ部（「海と湖の化学」）、そして第Ⅰ部の議論の土台となった微量元素のデータを得るために必要な分析手法に関する第Ⅱ部（「水圏微量元素の分析化学」）と続く。序に関しては、短いような印象も受けるがポイントはおさえており、教科書として用いることを十分意識していることを伺わせる。また、記号・略語のリストが序の前にあること、専門家にとってもわかりにくい或いは混同しやすい用語について脚注が全般的に充実していることは、高く評価されるべき点である。

第Ⅰ部は5章から構成されており、最初の4章が海洋に関するもので最終章が湖に関するものである。海洋に関する章は、オーソドックスに「1. 海水の化学」から始まり、次に「2. 海洋堆積物の化学」、「3. 海洋生物と微量元素」、最後に「4. 海底熱水と海底湧水の化学」という流れとなっている。

「1. 海水の化学」の導入部においては海洋化学の基礎が述べられているが、途中から京都学派のこれまでの研究成果がわかりやすく記されている。ただ、専門家以外には、両者の境界がいささか分かりにくく思われるので、構成に一工夫欲しいところである。この章には、世界に名だたる京都学派の海水中の鉄の研究に関する記述もあり興味深く読んだ。鉄に関しては、生物との関係で「3. 海洋生物と微量元素」にも取り上げられており、この二つを読めば海洋の鉄に関する研究の勘所が十分掴めるように思われる。また、海水中的ハフニウムとタンタルの濃度に関する最新の成果について述べられている点も、大変評価できる。

「4. 海底熱水と海底湧水の化学」については、その背景から丁寧に記述されており初心者への理解の助けとなるであろう。また、「5. 湖の化学」は京都学派のホームグラウンドともいえる琵琶湖に関する研究に紙

数の大半を割いている。

第Ⅱ部には分析化学に造詣に深い京都学派でなければ記すことの出来ない内容がふんだんに盛り込まれている。全体的に分析に関するかなり詳細な部分まで触れられており、専門家レベルでも参考になる内容である。

第Ⅱ部は12章からなっており、1. 共同沈殿法、2. 固相抽出法、3. 電気化学分析法、4. 比色法による現場簡易水質分析法、5. 蛍光光度法、6. 蛍光X線分析法、7. 放射化分析法、と並んだあとに、8. クリーン技術、を挟んで、以下9. 多元素同時分析法、10. 化学種別分析法、11. 船上分析法、12. テレケミストリー法、と続く。こうした章立てについて編者らは1から7は比較的早くから研究がなされていた手法を取り上げ、次に水圏分析化学に革新をもたらした8、そして最新且つ先端の研究について9から12で取り上げたと述べている。これは、これでバランス的に大変良いことは理解できるが、2において海水中の鉄やその他の微量元素の分析の際に大活躍したクリーンなキレート吸着剤（MAF-8HQ）を取り上げており、完全に時系列的にトピックスを並べている訳ではない。従って、クリーン技術を導入部におくような章立てでまとめた方が、教科書としては方向性が明確であったように思われる。

以上、多少批判めいたことも述べたが、内容の充実ぶりから考え本書は海洋や陸水の研究に従事する研究者や学生にとって必携のアイテムといえよう。ただ、教科書としては、ボリューム的にやや大きすぎる感は否めないように思われる。この内容をさらに絞り込み、最新の成果をコンパクトにまとめたものを読んでみたいというのは欲が深すぎるだろうか。

追記：この書評脱稿直前に、執筆者の一人である名古屋大学大学院増澤敏行教授が急逝された。慎んで御冥福をお祈りする。

（天川裕史）

「随想録 われらは星の子」

著者：松久幸敬

出版社：三恵社 B 5版211 p

定価：1,890円 税込み）

ISBN 4-88361-328-3

この本は、前に *Geochemical Journal* の編集長でもあり日本地球化学会の会長でもあった松久さんが定

年退職された後、2004年の夏から今年の春にかけて書かれた随筆を集めたものである。研究人生で知り合われた人々のエピソード、学会や研究で世界各地に行かれた時のこと、また身近な自然科学の話などについての54編の話題があり、付録に「創世記訳注」がついている。私は、松久さんから *Geochemical Journal* の編集長を引き継ぎ、倉敷でのゴールドシュミットコンファレンスでもお手伝いさせていただいたが、思えばこれまで仕事の関係だけで、あまり個人的なお話をしたことがなかった。美術や音楽に造詣が深いということはぼんやりとは感じていたが、この本を読んであらためてなるほどと納得するところがあった。

最初にあるのは、セガンティーニ美術館の話題である。倉敷の一年前、スイスのダボスでゴールドシュミットコンファレンスがあった時、松久さんがサンモリッツを訪れたことは聞いていたが、これを読むと松久さんがいかに彼の絵に思い入れがあったのかわかった。音楽の話題もよく出てくる。松久さんの趣味が山登りだったのも初めて知ったが、一緒によく山登りをされた亡くなった弟さんへの暖かい思いやりが感じられる。また、英語など語学の話もよく出てきて、松久さんはなるほどそれで英語が上手なのだと納得した。酒井先生やシカゴ大のクレイトン先生、マエダさんなど、これまで出会われた人々との交流の話も面白い。これらの研究者の研究に対する姿勢や普段の生活の様子などは若い人にも多に刺激になるのではないだろうか。シカゴ時代の話もよく出てくるが、同じくシカゴ大でポスドクをしていた私は、特に懐かしい思いがした。やはり若い時に外国で雑用に惑わされることなく研究に没頭できるという体験は、大変貴重であり、それだけ印象も深い。

この本は一般の社会の人を対象に書かれているが、地球化学会の会員が読んでも十分楽しい本だと思う。

本を読んでいて、不思議な感覚を持った。なぜだろ

うと考えると、文章だけで図が一枚もないのである。一般に、世界各地でのエピソードなど書いてあるこの種の本では、その時の写真などがはめ込まれていることが多い。ところが、写真は見事に一枚もなく文章だけの本である。これは、多分、松久さんが意識的にそうされたのだと思う。そのため、読者はかえって文章そのものをゆっくり読めて、「随想録」という雰囲気をも十分に味わえる。松久さんには多分その意図があり、それにうまく成功されていると思う。

松久さん自身は「私は気難しくて人付き合いがあまりよくないほうなので……」と文中書かれているが、物静かで落ち着いた人である。その静かな性格が、清謐で美しい文章によく表れている。美術や音楽を愛し、研究にいそしみ、学会や調査で世界を飛び回られている。この本には、そういった人生の味わいが十分に詰まっている。加波山東麓の八郷にログハウスを持たれているようであるが、ここでの生活を書かれた話も静かな奥深いもので、豊かな詩情があふれている。

「あとがき」は小学校時代の友達である大島勝彦さんが書かれている。読んだ感想として、「その状、あたかも、熟成の時を経たとびきり上等の赤ワインを味わう時の、アローマと適度のタニンの芳醇に酔いしれる至福に似る（原文のまま）」とあるが、まったく同感である。

なお、この本は、三恵社（〒462-0056 愛知県名古屋市中区中丸町2-24-1, Tel: 052-915-5211）に連絡すれば、郵便振込か代引きで購入できる（定価税込み1,890円+送料）が、松久さんに直接手紙か E-mail (y.matsuhisa@aist.go.jp) で連絡すれば料金後払いで送ってもらえるそうである（本の価格著者割引で1,500円+送料300円=1,800円）。また、amazon.comでも購入でき、この場合は送料はかからないはずである。

（大阪大学大学院理学研究科 松田准一）

訃報：増澤敏行さんの早世を悼む



名古屋大学大学院環境学研究科増澤敏行教授は、6月22日午前1時30分ご逝去されました。ここに謹んでお知らせいたします。6月21日は元気で勤務されておりました。その深夜、体調不良を感じて自ら救急車を呼び、病院に搬送された時には心肺停止の状態でした。

増澤敏行さんは、1947年長野県岡谷に生まれ、高校までそこで過ごされました。京都大学理学部を経て、1972年名古屋大学大学院理学研究科に入学し、水圏科学研究所の北野康研究室で研学されました。博士課程に入った1974年に研究所の助手に就かれ、日本海堆積物や海洋プランクトンの化学的研究に専念されました。1992年英国ケンブリッジ大学に在外研究員として派遣され、そこで一年余り研究生活を送られました。1993年に帰国され、改組された大気水圏科学研究所の助教授に昇任され、研究室を主宰して教育と研究にあたられました。さらに、2001年新設された大学院環境学研究科の地球環境科学の教授に就かれ、教育、研究、管理に多忙な毎日を送っておいりました。

増澤さんは、日本海堆積物の間隙水化学分析から初期続成作用や物質フラックスを、堆積物の化学形態分析から酸化還元環境変化を明らかにされ、この分野のパイオニアの一人となりました。この研究の

延長上にある相模湾初島沖冷水のシロウリガイ群集の化学生態研究は、メタンと硫酸還元の関係論じた興味ある論文です。また、海洋動植物プランクトンの化学組成の精力的な分析をおこない、その化学組成が海水組成より河川水組成に近い事を発見しました。これらの研究業績に対して、海洋化学学術賞が授与されました。最近、高感度元素分析法や高精度同位体組成分析法を海洋に適用して、親生物金属元素の動態研究に情熱を燃やしておりました。

増澤さんの研究は、慎重・入念がモットーでした。その慎重さは、“石橋を叩きすぎて壊してしまう”と称した人がいるほどです。しかし、その慎重さが、堅固で不動の研究成果に結びついたといえるでしょう。最近“伊勢湾・濃尾平野から地球環境を考える”という、吊り橋を架けて渡るような危険性のある研究にも挑戦されておりました。その成果を注視しておりました折、突然ご逝去なされました。しかし、彼の学問は教え子達が、また増澤さんのご遺志は、長男水土君、長女麻耶さんに受け継がれることと確信します。

増澤さんは、8年前に軽い心臓発作をおこされ、その後、定期的に診察をうけられ、節制した飲食生活を送っておいりました。それにもかかわらず、大きな発作で絶命され、まことに残念でなりません。増澤さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(松本英二)

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会，シンポジウムの案内，人材募集，書評，研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上，電子メール，フロッピー（マックもしくは Dos /V いずれでも結構です）での原稿を歓迎いたしますので，ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2005年12月頃を予定しています。ニュース原稿は10月中旬までにお送りいただくよう，お願いいたします。また，ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者

米田成一

〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1

国立科学博物館理工学研究部

Tel : 03-3364-7142, Fax : 03-3364-7104

E-mail:s-yoneda@kahaku.go.jp

高橋和也

〒351-0198 埼玉県和光市広沢2-1

理化学研究所加速器基盤研究部

小林貴之（ホームページ）

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部

2005年度 日本地球化学会 年会 参加申込書 兼 手配申込書

申込書はお一人につき一枚、ご記入下さい

所属	
氏名ふりがな	
氏名	
年齢	
性別	
会員種別	

↑ 正規会員・学生会員・非会員・非会員学生のいずれかを記入

電話番号	自宅
電話番号	所属先
FAX番号	
書類送付先住所	〒

年会参加	←参加・不参加を記入
要旨集の追加部数	←年会に参加なさる方には1部は宅配されます
懇親会参加	←参加・不参加を記入

航空券＋ホテル手配

羽田線は可能な限り8/15までにお申し込み下さい。その後のお申し込みは価格が3000円アップいたします。
お座席・お部屋には限りがございます。お早めにお申し込み下さい。

9/25	羽田→那覇	15:50-18:20	9/28	那覇→羽田	20:00-22:20	エコ/ミ-ホテル3	泊朝食付	¥55,500	スタンダードホテル3	泊朝食付	¥61,500
9/25	羽田→那覇	15:50-18:20	9/29	那覇→羽田	12:30-14:50	エコ/ミ-ホテル4	泊朝食付	¥64,000	スタンダードホテル4	泊朝食付	¥72,000
9/25	中部→那覇	15:30-17:40	9/29	那覇→中部	10:50-12:50	エコ/ミ-ホテル4	泊朝食付	¥67,000	スタンダードホテル4	泊朝食付	¥75,000
9/25	伊丹→那覇	14:40-16:45	9/29	那覇→伊丹	11:30-13:25	エコ/ミ-ホテル4	泊朝食付	¥59,800	スタンダードホテル4	泊朝食付※	¥71,800
9/25	福岡→那覇	16:20-17:55	9/28	那覇→福岡	19:15-20:50	エコ/ミ-ホテル3	泊朝食付	¥40,600	スタンダードホテル3	泊朝食付	¥47,900

↑ 申し込むものに「申込」と記入

ご注意：※伊丹往復のスタンダードホテル手配の場合は搭乗時刻が9/25 11:55-14:00 9/29 14:10-16:05になります。

ご予約後の変更は出来ませんのであらかじめご承知お下さいませ。

取消の場合は次の取消料がかかります。なお土日祝日は取消の受付ができませんのでご注意ください。

21日前迄は無料 20日～8日前まで 代金の20% 7日～2日前まで 代金の30% 旅行開始前日まで 代金の40%
当日出発時刻まで 代金の50% 当日出発時刻以降 代金の100%

沖縄県知事登録旅行業第3-87号 琉球大学生生活協同組合 TEL:098-895-6086 FAX:098-895-7717 ryokou@fm2.seikyoku.ne.jp

2005年度 日本地球化学会年会 スケジュール

会場		午後												
		8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
9/25 (日)	自治会館	評議委員会	評議委員会											
9/26 (月)	共通教育棟	A (共2-101)	課題講演 1	課題講演 1		生物								
		B (共2-104)	課題講演 2	海洋										
		C (共2-201)	課題講演 4	課題講演 4										
		D (共2-205)	地球外物質	地球外物質		夜間小集会*								
9/27 (火)	大学会館	ポスター	コアタイム											
	共通教育棟	A (共2-101)	大気・降水											
		B (共2-104)	堆積物											
		C (共2-201)	環境											
		D (共2-205)	課題講演 4											
	大学会館	ポスター	コアタイム											
	法215	総会・学会受賞講演												
中央食堂	懇親会	総会 学会受賞・特別講演 懇親会												
9/28 (水)	共通教育棟	A (共2-101)	課題講演 3	課題講演 3		岩石・地殻								
		B (共2-104)	岩石・地殻	岩石・地殻										
		C (共2-201)	温泉・熱水	鉱床										
		D (共2-205)	陸水	その他										
大学会館	ポスター	コアタイム												
10/1 (土)	自治会館	1Fホール	公開講演会											

*「日本地球化学会を取り巻く国内状況とアジアにおける地球化学の動向」

第1日（9月26日）口頭発表 午前

【A会場】

〔課題講演1〕

(9:30~10:50)座長:大森 保

- 1A01 南部マリアナ背弧拡大軸における熱水化学組成の経時変動
(1九大院・2筑波大院・3静岡大理・4九大院・5岡山大固体地球研究セ・6琉球大院・7東大海洋研・8米国大気海洋局太平洋海洋環境研究所)○石橋純一郎1・内海真生2・木村浩之3・山中寿朗4・宮部俊輔5・野口拓郎6・土岐知弘7・ローケビン8
- 1A02 沖縄トラフ第四与那国海丘における熱水の相分離と鉱化作用
(1九大学院・2岡山大理)○鈴木遼平1・石橋純一郎1・中島美和子1・千葉仁2・GenaKaul2
- 1A03 海底熱水噴出孔下の有機物活性度からみた地下生物圏
(1北大院理/産総研地質・2横国大院工・3産総研地質・4九大院社・5東大院理・6北大院理)○高野淑識・小林憲正・丸茂克美・山中寿朗・浦辺徹郎・鈴木德行
- 1A04 アミノ酸とホスファターゼ活性で探る海底熱水系地下生物圏
(1横浜国立大学・2北海道大学・3産業技術総合研究所・4東京大学)○小林憲正1・伊藤有希1・枝澤野衣1・師井茂倫1・栗原広成1・金子竹男1・高野淑識2・丸茂克美3・浦辺徹郎4

休憩10分

(11:00~12:20)座長:下島公紀

- 1A05 深海熱水地帯における化学及び生物活動に関する現場複合計測の試み
(1東京大学生産技術研究所・2広島大学・3海洋研究開発機構・4京都大学化学研究所・5電力中央研究所・6セレス)福場辰洋1・岡本拓土1・長沼毅2・金子亮2・林徹2・吉田尊雄3・許正憲3・岡村慶4・下島公紀5・前田義明6・小池祐一6・○藤井輝夫1
- 1A06 シンカイヒバリガイ中の微量元素組成
(1海洋研究所・2海洋研究開発機構)○白井厚太郎1・小俣珠乃2・山本啓之2・高畑直人1・佐野有司1
- 1A07 Scaly Foot貝のウロコにみられる硫化鉄硬皮の鉄同位体分析
(1東京工業大学大学院理工学研究科・2独立行政法人海洋研究開発機構極限環境生物圏研究センター)○平田岳史1・アビンヤータンヘン1・菅彰信1・鈴木庸平2
- 1A08 石西礁湖サンゴ礁生態系に与える竹富島海底温泉のインパクト
(1琉球大院・2琉球大理・3九大院・4九大院・5海洋研究開発機構)○野口拓郎1・大森保2・佐野伸哉1・伊藤道裕2・浜崎浩3・石橋純一郎4・山本啓之5・高井研5

【B会場】

〔課題講演2〕

(9:30~10:45)座長:皆川昌幸

- 1B01 オホーツク海の生物生産を支配する環境因子－河川・海水・中層水
(北海道大学低温科学研究所)○中塚武
- 1B02 西部北太平洋亜寒帯域および親潮海域における微量栄養塩(鉄)の供給過程－オホーツク海からの供給の可能性について－
(1北大低温科学研究所・2北海道区水産研究所・3東北区水産研究所・4北大院地球環境科学研究所・5東大院 農学生命)○西岡 純1・小笠恒夫2・齊藤宏明3・鈴木光次4・武田重信5
- 1B03 アムール川からオホーツク海へ流入する物質の動態
(1北大院地球環境科学研究所・2北大低温研究所・3北大院水産学研究所・4北大北方生物圏フィールド科学センター・5東京農工大学共生科学技術研究部)○長尾誠也1・西岡純2・中塚武2・久万健志3・柴田英昭4・楊宗興5
- 1B04 沿岸域における無機態窒素成分の沈着挙動
(1神奈川大学工学部・2東大海洋研・3北海道東海大学工学部)○松本潔1,2・南秀樹3・植松光夫2
- 1B05 希土類元素濃度からみた日本海の深層循環とその起源
(富山大学理学部)○八田真理子・張勁
- 休憩15分
- (11:00~12:00)座長:中塚 武
- 1B06 日本海盆深層で観測された沈降粒子中の²¹⁰Pbフラックス－その東西比較について－
(中央水産研究所)○皆川昌幸・森田貴己・藤本賢
- 1B07 東アジアから東シナ海・沖縄に輸送される大気汚染物質・エアロゾルの観測
(1国立環境研究所・2中国環境科学研究所)○畠山史郎1・高見昭憲1・三好猛雄1・王偉2
- 1B08 縁辺海を含む日本周辺海域における有機スズ濃度の変動
(1(財)環境科学技術研究所・2(独)水産総合研究センター)○高久雄一1・皆川昌幸2・大塚良仁1・森田貴己2・藤本賢2・久松俊一1
- 1B09 下北半島沖堆積物への最終氷期－Holocene期における多環芳香族炭化水素降下フラックスの変遷
(1東京薬科大学生命科学部・2海洋研究開発機構)○熊田英峰1・内田昌男2

総合討論(座長 植松光夫)

第1日（9月26日）口頭発表 午前

【C会場】

〔課題講演4〕

(9:30～10:30)座長:西尾嘉朗

1C01 四国・黒瀬川構造帯に産出する蛇紋岩の希ガス同位体組成

(1東大院附属地殻化学実験施設・2海洋研究開発機構地球内部変動研究センター)○清水綾1・角野浩史1・長尾敬介1・野津憲治1・木戸ゆかり2・藤岡換太郎2

1C02 四国・三波川帯に産するウェッジマントルカンラン岩の希ガス同位体組成

(1東大院・2名大院)○角野浩史1・水上知行1,2

1C03 Chalcophile elements in subduction zones: Re–Os isotopic constraints from the Southern Kermadec Arc (1IFREE, JAMSTEC, Yokosuka, Japan・2Department of Geology, University College Cork, Ireland・3National Institute of Water and Atmospheric Research, Wellington, New Zealand)○HandlerM. R.1・WysoczanskiR. J.1・GambleJ. A.2・WrightI. C.3・SuzukiK.1

休憩15分

(10:45～11:45)座長:角野浩史

1C04 超背弧地域に産する比較的大規模な玄武岩類の成因: パタゴニア北部, ソムンクラ台地を例に (1東大地震研究所・2リオデジャネイロ州立大学・3パタゴニア国立大学・4神奈川県立博物館生命の星・地球館・5東大地殻化学実験施設・6東大院)○折橋裕二1・元木昭寿2・ハラミゲール3・平田大二4・角野浩史5・岩森光6・三部賢治1・長尾敬介5

1C05 Spectroscopic FTIR imaging of water and carbon in geologic samples: an example from the Izu–Bonin arc and implications for models of silicic crustal growth (1Institute for Research on Earth Evolution (IFREE), Japan Agency for Marine–Earth Science and Technology (JAMSTEC))○WysoczanskiR. J. 1・TaniK.1

1C06 ハフニウム同位体からみた沈み込みと物質循環のプロセス (1海洋研究開発機構地球内部変動研究センター・2東京大学地震研究所)○羽生毅1・巽好幸1・中井俊一2

11:45～12:05

総合討論(座長:西尾嘉朗)

【D会場】

〔地球外物質〕

(9:30～10:30)座長:日下部 実

1D01 Allende隕石中の炭素窒化合物とオリビンの関係のラマンスペクトルによる検討

(九州大学)○村江達士・堀江賢一

1D02 火星のenriched reservoirに関する地球化学的モデリング (1産総研・2茨城大)○下田玄1・池田幸雄2

1D03 炭素質コンドライト隕石のバリウム同位体組成 (1広島大・2国立科学博物館)○日高洋1・米田成一2

1D04 バリウム同位体の精密分析と惑星物質への応用 (1岡山大理・2神戸大理・3神戸大院)岡野修1・○中村昇2,3

休憩15分

(10:45～12:00)座長:村江達士

1D05 Tafassasset隕石の希ガス組成・酸素同位体組成 (1東大地震研究所・2岡山地球物質科学研究センター)○三浦弥生1・日下部実2

1D06 SHRIMPによるVLT mare basalt隕石の局所U–Pb年代分析 (1広島大院・2広島大MIRAGEプロジェクト研究センター)○寺田健太郎・佐々木悠・佐野有司

1D07 親鉄元素存在度からみたメソシデライトの形成史 (1総合研究大学院大学・2国立極地研究所・3首都大学東京大学院)○玉置美奈子1・山口亮1,2・三澤啓司1,2・海老原充3

1D08 Allende隕石の年代学的研究 (1神戸大理・2アルバータ大学 地球大気科学科)○山下勝行1・中村昇1・LarryHeaman2

1D09 Cook 011隕石(L3–5)のI–Xe年代測定 (東大院附属地殻化学実験施設)○海老澤紀子・長尾敬介

第1日（9月26日）口頭発表 午後

【A会場】

【課題講演1】

(14:00～15:40)座長:石橋純一郎

- 1A09 熱水プルームの挙動を支配する海水流動の観測
(1株式会社 セレス・2電力中央研究所・3海洋研究開発機構・4東京大学)○前田義明1・古島靖夫3・小池祐一1・唐沢邦彦1・許正憲3・山本啓之3・藤井輝夫4・下島公紀2
- 1A10 ROVを用いた深海熱水プルームの空間マッピング観測
(1海洋研究開発機構・2セレス・3東大・4電中研)○許正憲1・小池祐一2・前田義明2・山本啓之1・藤井輝夫3・下島公紀4
- 1A11 熱水プルーム中の微量重金属元素の挙動
(1電力中央研究所)○下島公紀1
- 1A12 鳩間海丘熱水プルーム中の亜酸化窒素濃集とその起源
(1北大院理・地惑・2琉球大院・3電中研)○角皆潤1・前川健二1・今野祐多1・中川書子1・野口拓郎2・平良直人2・大森保2・下島公紀3
- 1A13 熱水プルーム中微生物群集構造と物質循環への影響
(1東大院 地惑・2産総研 生物機能・3筑波大 農生・4九大院 地惑)○砂村倫成1・東陽介2・内海真生3・石橋純一郎4・丸山明彦2

【B会場】

【海洋】

(14:00～15:45)座長:原田尚美

- 1B10 北太平洋亜寒帯域における生物起源粒子フラックスの長期変動
(1北大院地・環・研究院・2環境総合テクノス)○渡辺豊1・前田亘宏1・嶋本品文2・乗木新一郎1
- 1B11 東シナ海および南西諸島海域にみられる浅海性堆積物由来の希土類元素の水平供給
(1東京大学海洋研究所)○本郷やよい1・小畑元1・蒲生俊敬1
- 1B12 中性子放射化分析法を用いた海水中のScの定量および太平洋における分布
(1東京都立大・2東工大・3東大海洋研・4首都大東京)○能村美穂1・佐々木一謹2・天川裕史3・大浦泰嗣4・海老原充4
- 1B13 北太平洋における溶存Zr, Hf, Nb, Ta, Wの定量
(1京都大学大学院理学研究科化学専攻・2京都大学化学研究所)○ルトウフィフィルダウス1・則末和宏2・宗林由樹2
- 1B14 SPME法による海洋生物起源物質DMSの長期保存法の確立
(1北大・院・地球環境・2立正大・地球環境)○坂本愛1・仁木拓氏2・渡辺豊1
- 1B15 日本海佐渡沖ポックマーク海域における海洋探査及び地球化学的研究:「淡青丸」KT05-11次研究航海速報
(1富山大理・2東大海洋研・3KT05-11)○張勁1・八田真理子1・佐藤瑠美1・竹内章1・蒲生俊敬2・KT-05-11乗船研究者一同3
- 1B16 海洋中沈降陸起源粒子の粒径分布とLa/Yb、Th/Sc比:陸起源物質の鉛直、水平輸送過程解明のための新しい試み
(1北大院地・環・研究科・2北大院地・環・研究院・3東大海洋)○前田亘宏1・乗木新一郎2・成田尚史3

休憩15分

【生物】

(15:55～16:55)座長:角皆 潤

- 1A14 桿菌SG-1の休眠胞子によるマンガン2価イオンなどの酸化反応速度
(1北大院・2カルフォルニア大学スクリプス海洋研究所)○豊田和弘1・テボブラッドリー2
- 1A15 地球化学的生物環境調節モデルの提案
(東京農工大院)○赤木右
- 1A16 資源獲得を巡る種間競争から生じる環境調節フィードバックモデル
(東京農工大)○瀬戸蘭美・赤木右
- 1A17 Role of fine root in the plant-induced weathering of andesite and basalt for three crop species.
(1東京農工大)○AkterMeheruna1・赤木右1

休憩15分

(16:00～18:00)座長:張 勁

- 1B17 同位体希釈ICPMSIによる海水中の希土類元素の定量_太平洋の希土類元素分布_
(1東工大・2東京都立大・3東大海洋研・4首都大学東京)○佐々木一謹1・能村美穂2・白井直樹2・天川裕史3・海老原充4
- 1B18 個別粒子分析法による海水中懸濁粒子の起源の同定
(東大海洋研)○岩本洋子・成田祥・植松光夫
- 1B19 淀川河口域における河川水-海水中の主成分と希土類元素について
(1神戸大院・2神戸大)○横田雅之1・寺門靖高2
- 1B20 佐渡南西沖ポックマーク海域における海底からのメタン湧出と海水におけるメタン酸化の評価
(1北大院・理・地惑・2東大・海洋研・3富山大理)○三枝俊介1・角皆潤1・中川書子1・蒲生俊敬2・張勁3・竹内章3・KT05-11乗船研究者一同
- 1B21 太平洋における希土類元素同位体比の3次元分布
(東大海洋研)○田副博文・小畑元・天川裕史・蒲生俊敬
- 1B22 海洋中におけるメタン・亜酸化窒素の濃度および同位体比分布とその成因
(1北大院・2東大海洋研・3国環研)○亀山宗彦1・中川書子1・笹川基樹1・角皆潤1・蒲生俊敬2・野尻幸宏3
- 1B23 自航式深海底サンプリングシステムにより採取したコア試料から見積もった前弧域海底からのメタンフラックス
(1北大院・2東大海洋研・3海洋研究開発機構・4東大海洋研)○前川健二1・土岐知弘2・亀山宗彦1・角皆潤1・中川書子1・徐垣3・芦寿一郎4
- 1B24 完新世におけるオホーツク海南西部のアルケノン水温変動
(1独立行政法人海洋研究開発機構・2北海道大学・3高知大学海洋コア総合研究センター)○原田尚美1・坂本竜彦1・阿波根直一2・内田昌男1・池原実3

第1日（9月26日）口頭発表 午後

【C会場】

[課題講演4]

(14:00~15:30)座長:山本順司

1C07 地球内部物質と水素結合の化学
(東京大)○鍵裕之

1C08 (招待講演)超高压地球科学の最近の成果
(1愛媛大地球深部ダイナミクス研究センター)○井上徹1

1C09 (招待講演)A recipe to estimate water content
and geotherm in the upper mantle using electrical
conductivity and seismic P-wave velocity
(1IFREE, JAMSTEC・2ERI, Univ. Tokyo)○Ichiki
Masahiro1・Obayashi Masayuki1・Baba Kiyoshi2・
Utada Hisashi2

休憩15分

(15:45~17:15)座長:鍵 裕之

1C10 (招待講演)地球化学組成データの主成分・独立成分分
析
(東大院)○岩森光

1C11 高压下における珪酸塩メルトへのAr溶解度
(1大阪大院・2東大物性研究所)○宮川千絵1・松田准
一1・丹羽健2・八木健彦2・宮島延吉2

1C12 REE(III)化合物・金属系列の融解反応が示す高温四組効
果と鉱物／メルト間のREE分配
(名大学院)○川邊岩夫

1C13 放射光X線を用いたマントル由来岩石からの白金族元素
含有相の探索
(1海洋研究開発機構・2高輝度光科学研究センター)○
小木曾哲1・鈴木勝彦1・鈴木敏弘1・上杉健太郎2・竹内
晃久2・鈴木芳生2

【D会場】

[地球外物質]

(14:00~15:30)座長:長尾敬介

1D10 炭素質コンドライト中の白金族元素
(1首都大学東京・2東京都立大学)○小岩嘉隆1・白井直樹
2・海老原充1

1D11 月隕石の化学組成からみた月裏側地殻の形成過程
(1東京都立大学・2首都大学東京・3国立極地研・4千葉工
業大学付属研究所)○唐牛譲1・海老原充2,3・山口亮3・武
田弘4

1D12 月裏側高地の岩石の多様性と起源
(1国立極地研・2首都大学東京・3東京都立大学・4千葉工
大・付属研究所)○山口亮1・唐牛譲2・海老原充3・武田弘4

1D13 マーチソン隕石の物理的分離による疎水物質の希ガス同
位体組成
(1阪大院)○松尾行浩1・松田准一1・西村智佳子1

1D14 Constraints on Martian atmospheric Ne by unique
shergottite Dhofar 378
(1 Grad. Sch. of Sci., Univ. of Tokyo,・2 Inst. for Study of
the Earth's Interior, Okayama Univ.)○朴芝鮮・長尾敬介・
日下部実

1D15 水環境教育における惑星物質進化とオルゲイユ隕石の役
割
(1千葉工大学附属総合研究所・2千葉県立中央博物館環
境教育研究科・3千葉工大)○武田弘1・小川かほる2・瀧和
夫3

休憩15分

(15:45~17:45)座長:松田准一

1D16 宇宙塵1粒の非破壊多元素分析法開発
(1東工大院・2立正大学地球環境科学部・3京大院・4青山
学院大理工学部ラジオアイソトープ実験室)○福土裕輔
1,2・福岡孝昭2・田澤雄二3・斎藤裕子4

1D17 メソジデライトの熱履歴:微量元素からの制約
(1国立極地研・2総合研究大学院大学)○海田博司1,2・玉
置美奈子2・三澤啓司1,2・山口亮1,2

1D18 模擬星間物質から粒子線照射により生成した複雑有機物
のキャラクタリゼーション
(1横浜国立大学・2北海道大学)○鈴木宣成1・遠西寿子1・
谷内俊範1・金子竹男1・小林憲正1・高野淑識2

1D19 シャンナイトのRb-Sr, Sm-Nd同位体年代学
(1極地研・南極隕石セ・2 JE-23, ESCG/Jacobs Sverdrup,
Houston, TX, U.S.A.・3 JE-23, ESCG/Muniz Engineering,
Houston, TX, U.S.A.・4 KR, NASA Johnson Space Center,
Houston, TX, U.S.A.・5 U.B.O.-I.U.E.M., place Nicolas
Copernic, F-29280 Plouzané#233; Cedex, France)○三澤
啓司・ShihChi-Yu・ReeseYoung・NyquistLarry・
BarratJean-Alix

1D20 火星隕石中希ガスの起源:地球風化岩石の希ガス組成か
らの考察
(1東大院・2九大院)朴芝鮮1・○長尾敬介1・岡崎隆司2

1D21 Ningqiang炭素質コンドライト中の鉱物、希ガス組成に与え
る実験的水質変質の影響
(1東大院地殻化学実験施設・2九大院地惑・3茨城大理)○
山本征生1・中村智樹2・野口高明3・岡崎隆司2

1D22 惑星形成領域における非磁性シリケート粒子の磁場配向
条件
(大阪大)○高島遼一・阿部敬朗・植田千秋

1D23 白金族元素存在度に基づくHED隕石マグマプロセス解明
への試み
(1海洋研究開発機構, IFREE・2都立大理)○篠塚一典・海
老原充

第1日(9月26日) ポスターセッション(1) 午前/午後

【ポスター会場: 大学会館】

(コアタイム 13:00-14:00 ポスター掲示は9:00から)

[海洋]

- 1P01 現場型超大容量海水ろ過装置を用いた海水中の人工放射性核種の分析法の開発
(放射線医学総合研究所放射線安全研究センター 那珂湊支所)○桜木智史・鄭建・青野辰雄・山田正俊・日下部正志
- 1P02 現場型超大容量海水濾過装置を用いた青森県太平洋沖における放射性核種と粒子の濃度分布について
(放射線医学総合研究所放射線安全研究センター)青野辰雄・○日下部正志・桜木智史・大久保綾子・中西貴宏・鄭建・山田正俊
- 1P03 大気・海洋間における過酸化物の挙動について
(琉球大院)○伊古田博嗣・岡田孝一郎・黒木由貴子・新垣雄光
- 1P04 東部熱帯および亜熱帯太平洋における海水ならびに堆積物中のセレンの挙動
(1近畿大理工学部・2近畿大学院・3北海道東海大工・4東海大学海洋学部)○中口譲1・三橋康伸2・藤田昭紀2・佐久間裕一2・住吉綾子1・南秀樹3・加藤義久4
- 1P05 南極海・南太平洋における ^7Be ・ ^{10}Be 濃度の測定
(日本大学文理学部総合基礎科学研究科)○田熊栄一・斉藤千春・山形武靖・斉藤敬・永井尚生
- 1P06 サンゴ骨格のアスパラギン酸ーサンゴの生物活動のバイオプロキシ
(1産総研・2東京大海洋研)○グプタラン・鈴木淳・川幡穂高
- 1P07 北太平洋亜寒帯域鉄散布実験SEEDS2004における海水中微量金属の動態
(1京大化学研究所・2北大低温科学研究所)○宗林由樹1・中塚清次1・西岡純2
- 1P08 全有機体炭素計を用いた連続フロー型質量分析システムによる海水・陸水溶存有機体炭素の全炭素同位体比定量法の開発
(北大・院・理)○井尻暁・角皆潤・中川書子
- 1P09 間隙水から見積もられた外洋域のSi fluxについて
(産総研)○柴本陽子・原田晃
- 1P10 連続フロー型質量分析計を用いた海洋溶存塩化メチルの炭素安定同位体比定量法の開発
(北大院)○小松大祐・山口潤子・古用啓介・中川書子・亀山宗彦・笹川基樹・角皆潤
- 1P11 単離培養海洋性藻類から放出される非メタン炭化水素の相対組成および炭素同位体組成の定量
(北大・院・理)○井尻暁・小松大祐・山口潤子・河村裕・山口愛果・田村舞子・堀口建雄・中川書子・角皆潤

[地球外物質]

- 1P12 衝撃によるマーチソン隕石中の水素・炭素同位体比の進化
(1名古屋大院・2北大低温科学研究所・3名古屋大院)○三村耕一1・岡本道意1・中塚武2・杉谷健一郎3・阿部理1
- 1P13 紫外線レーザーアブレーション連続フロー酸素同位体比質量分析法の開発と隕石への適用
(岡山大地球物質科学研究セ)○丸山誠史・日下部実
- 1P14 Allende隕石CAI中のペロブスカイトの希土類元素パターンの微細構造について
(1広島大院・2国立科学博物館)○宮崎隆史1・堀江憲路1・日高洋1・米田成一2
- 1P15 SHRIMPによる月隕石Yamato981031の局所U-Pb年代分析
(1広島大院・2東大海洋研)○佐々木悠1・寺田健太郎1・佐野有司2
- 1P16 恒星磁場観測の基礎としての α -SiCおよびグラファイトの磁場整列特性
(大阪大学)○阿部敬朗・藤本隆之・高島遼一・植田千秋
- 1P17 鉄隕石のHf-W年代測定法の開発
(東工大院)○築田千明
- 1P18 深海底堆積物中から選別した球粒試料のSEMによる観察
(1京都大原子炉実験所・2日本大文理・3東京都立大)○関本俊1・小林貴之2・高宮幸一1・海老原充3・柴田誠一1
- 1P19 ユレーライト隕石のCr同位体の研究
(1神戸大理・2ウィスコンシン大学)○上田哲彦1・山下勝行1・木多紀子2
- 1P20 炭素質隕石中高分子状有機物の分子内炭素同位体組成
(岡山大理)○大場 康弘・奈良岡浩

第1日(9月26日) ポスターセッション(2) 午前/午後

【ポスター会場: 大学会館】

(コアタイム 13:00-14:00 ポスター掲示は9:00から)

[課題講演1]

- 1P21 南部マリアナ背弧拡大軸における海底熱水中のメタン
(1東大海洋研海洋化学部門・2北大院・3九州大院・4大阪市立大理)○土岐知弘1・角皆潤2・石橋純一郎3・益田晴恵4・蒲生俊敬1
- 1P22 熱水系の溶存態有機物について
(1九州大学 大学院理学研究院 ・2九州大学 大学院比較社会文化研究院)○北島富美雄1・山中寿朗2
- 1P23 埋積海嶺型沖縄トラフ熱水系における希土類元素の地球化学的挙動について
(1東大海洋研・2北大院・理・3九州大院・理・4海洋研究開発機構)○本郷 やよい1・小畑元1・蒲生俊敬1・角皆潤2・中島美和子3・石橋純一郎3・布浦拓郎4
- 1P24 沖縄トラフ伊平屋凹地北部海丘における熱水活動の変遷
(1岡山大学大学院自然科学研究科・2岡山大学理学部地球科学科)一戸充雄1・○千葉仁2・加瀬克雄2
- 1P25 ラウ海盆ファルファ・リッジの熱水化学組成
(1九州大院・2米国大気海洋局太平洋海洋環境研究所)○濱崎浩1・石橋純一郎1・ラプトンジョン2
- 1P26 鹿児島湾若尊火口における熱水湧出
(1九大院・比文・2九大・理)○山中寿朗1・石橋純一郎2・山下徹2・土居真輔2・坂本文明2・中島美和子2・瀬口真理子2
- 1P27 現場型化学センサによる熱水ブルームの化学的挙動の観測
(1株式会社セレス・2海洋開発研究機構・3東大・4電中研)○小池祐一1・前田義明1・許正憲2・藤井輝夫3・下島公紀4
- [生物]
- 1P28 西オーストラリアピルバラ地域から産出した34億年前の微化石様構造について
(名古屋大院)○杉谷健一郎・三村耕一・南 雅代
- 1P29 真菌由来マンガン酸化酵素と形成されたマンガン酸化物の諸性質
(1静岡県立大学環境科学研究所・2産総研・3国環研)○谷 幸則1・宮田直幸1・圓尾華奈子1・相馬光之1・岩堀恵祐1・津野 宏2・瀬山春彦3
- 1P30 現生浮遊性有孔虫データベースの紹介
(1海洋研究開発機構・2株式会社 マリン・ワーク・ジャパン)○園田朗1・大城美香2・宮城博2・木元克典1・澤野健三郎2・岡別府陽子2・石川潤2・仲村亮2・小松徹史1・設楽文朗1

第2日（9月27日）口頭発表 午前

【A会場】

【大気・降水】

(9:00～10:30)座長:佐竹 洋

2A01 わが国における微量元素の湿性および乾性沈着量
(1静岡県立大学・2国立水俣病総合研究センター・3名古屋大・4電中研)○坂田昌弘1・丸本幸治2・成川正広3・朝倉一雄4

2A02 東京湾における大気海洋間の水銀交換
(1名大太陽地球環境研究所・2静岡県立大学環境科学研究所・3国立水俣病総合研究センター・4電中研)○成川正広1・坂田昌弘2・丸本幸治3・朝倉一雄4

2A03 大気中のCO₂濃度の測定
(武蔵高等学校中学校)○高江洲瑩

2A04 ドームふじ南極氷床コア中金属成分が示す過去32万年のエアロゾル降下量変動
(1山形大学大学院理工学研究科・2国立極地研究所)○鈴木利孝1・伊藤剛史1・藤井理行2

2A05 黄砂現象時における大気エアロゾル粒子の湿性沈着過程
(1北海道大学大学院地球環境科学研究院)○大木淳之1・乗木新一郎1

2A06 亜熱帯島嶼域の森林生態系に流入する大気降下物に関する研究
(琉球大院)○崎濱秀明・渡久山章

休憩15分

(10:45～12:15)座長:坂田昌弘

2A07 富山における降水水中の窒素同位体とその挙動
(1富山大院・2富山大理)○呉佳紅・佐竹洋

2A08 北部北太平洋における化学成分から見た海霧とエアロゾルの相互関係
(1東京大学 海洋研究所)○吉田健太郎・成田祥・Frank Griessbaum・植松光夫

2A09 沖縄島南部・北部における林内・林外降下物の化学成分の比較
(琉球大院)○伊敷牧・渡久山章

2A10 XANES法によるエアロゾル中の硫酸イオン種の粒径別スペシエーション
(1広島大院・2産業技術総合研究所)○高橋嘉夫1・金井豊2・上岡晃2・太田充恒2・鈴木康仁1・清水洋1

2A11 西部北太平洋における大気エアロゾル中微量元素の濃度変動
(海洋科学国際共同研究センター)○近藤雅輝・成田祥・植松光夫

2A12 主要元素から見た札幌におけるエアロゾルの組成と量の季節変動要因
(1北海道大学大学院地球環境科学研究院)○桑山豊・入野智久・南秀樹・小埜恒夫・碓井敏宏・南川雅男

【B会場】

【堆積物】

(9:00～10:30)座長:清水 洋

2B01 ホウ酸塩鉱物合成実験および分子軌道計算によるホウ素同位体交換反応の平衡定数の解析
(上智大学理工学部)○山比羅守・木川田喜一・大井隆夫

2B02 海底堆積物の系統分析における中性子放射化分析法の応用
(上智大理工学部)○早津岳宏・木川田喜一・大井隆夫

2B03 過去2万7千年間における北西太平洋三陸沖の生物生産変動と海洋循環
(1産総研・2東大海洋研・3北大院・4海洋研究開発機構・5国環研)○蓑島佳代1・川幡穂高1,2・入野智久3・池原研1・内田昌男4・柴田康行5

2B04 モンゴル・フスブルグ湖堆積物コアHDP-04コア中の光合成色素
(1静岡県立大学環境科学研究所・2大妻女子大学社会情報学部・3名大院)○谷幸則1・相馬光之1・相馬悠子1・栗原龍1・橋本伸哉1・井上源喜2・河合崇欣3

2B05 カリブ海バハマ沖深海底コアの第四紀の炭素および窒素同位体比の変動
(1九大・2秋田大)○北逸郎1・森茂生2・長谷川英尚2・佐藤時幸2

2B06 中国南部に広く分布する赤色土壌の地球化学的特性
(1理化学研究所・2浙江師範大学・3海洋研究開発機構)○矢吹貞代1・金山晋司1・YeWei2・本多将俊3

休憩15分

(10:45～11:45)座長:北 逸郎

2B07 酸性土壌中の微量・希土類元素の移行挙動とその支配要因
(慶応義塾大学院)○大谷晴啓・鹿園直建・久保田蘭

2B08 海水から堆積物へのReとOsの除去メカニズムの解明
(1広島大院・2理化学研究所)○山下義郎1・高橋嘉夫1・羽場宏光2・榎本秀一2・清水洋1

2B09 高圧環境下でのホウ素同位体分別
(1東京大学大学院総合文化・2上智大学理工学部化学科・3東京工業大学原子炉工学研究所)○武蔵正明1・松尾基之1・大井隆夫2・野村雅夫3

2B10 水温指標の高精度化に向けた現生浮遊性有孔虫殻のMg/Caと安定同位体比
(1独立行政法人海洋研究開発機構(JAMSTEC)・2カリフォルニア大学バークレー校)○木元克典1・氏家由利香2

第2日（9月27日）口頭発表 午前

【C会場】

[環境]

(9:00~10:15)座長:坂元隼雄

- 2C01 アルミナへのカドミウム吸着に及ぼす炭酸水素イオンの影響
(1東工大・2九大)○宮崎あかね1・須藤寛1・横山拓史2

- 2C02 日本における降下物、土壌、河川水、海水、海底土中のSr-90、Cs-137の経年変化及び挙動
(1日本分析センター)○池内嘉宏

- 2C03 表層土壌による水素同位体ガス酸化速度の温度依存性の測定
(1名古屋大学院工学研究科)○太田雅和1・山澤弘実1・森泉純1・迫田あすか1・飯田孝夫1

- 2C04 バクテリア表面への有機スズ化合物の吸着
(1広島大学大学院理学研究科)○北澤健資1・高橋嘉夫1

- 2C05 逐次溶解法を用いた河川堆積物中の元素存在状態の研究
(1産業技術総合研究所 地質調査総合センター)○太田充恒1・今井登1

休憩15分

(10:30~11:45)座長:宮崎あかね

- 2C06 草津白根山西麓陸水のヒ素濃度
(1上智大学大学院理工学研究科化学専攻)○佐野淳子1・川井智1・木川田喜一1・大井隆夫1

- 2C07 腐植物質に対するREEの錯生成定数に基づく水圏でのREEパターンの解釈
(1広島大学大学院理学研究科)○山本祐平1・高橋嘉夫1・清水洋1

- 2C08 XANES法を用いたアンチモンの土壌中における酸化還元状態の特定
(1広島大院)○光延聖1・原田哲平1・星野健一1・高橋嘉夫1

- 2C09 Behavior of Aluminum and DOC in waters of the Gesashi mangrove estuary, Okinawa, Japan
(1琉球大)○Kombo Mohamed1・Bakari Said1・Okada Koichiro1・Fujimura Hiroyuki1・ShinjoRyuichi1・Tokuyama Akira1

- 2C10 硝酸性窒素の挙動とその除去に関する研究
(鹿児島大理)○川越大樹・坂元隼雄・富安卓滋・穴澤活郎

【D会場】

[課題講演4]

(9:30~10:50)座長:羽生 毅

- 2D01 Li, Sr, Nd, He, and Ar isotope systematics of the Indian Ocean MORBs: constraints on the DUPAL anomaly
(1海洋研究開発機構(JAMSTEC) 地球内部変動研究センター(IFREE)・2東京大学 地震研究所・3東京大学 海洋研究所)○西尾嘉朗1・中井俊一2・石井輝秋3・佐野有司3

- 2D02 希ガスおよび固体元素同位体比から推定される地球内部の地球化学的端成分の対比
東京大学地震研究所)○兼岡一郎

- 2D03 Re-Os isotope study of the Ontong Java Plateau lavas: Results from Central Malaita, Solomon Islands
(1IFREE, JAMSTEC, Japan・2SOEST, University of Hawaii, USA)○TejadaM. L. G.1・SuzukiK.1・TatsumiY.1・MahoneyJ.2

- 2D04 ハワイマントルプリームの同位体的端成分の成因に関する地球化学研究
(海洋研究開発機構・地球内部変動研究センター)○任鍾元

休憩15分

(11:05~12:05)座長:松本拓也

- 2D05 IAB鉄隕石のケイ酸塩包有物からわかる固体惑星の起源と進化
(1国立極地研究所・2千葉工業大学)○荒井朋子・武田弘・小島秀康

- 2D06 ミシシッピ川砕屑性ジルコンのウラン-鉛及びルテシウム-ハフニウム同位体組成から読み取る大陸地殻のリサイクル及び成長率
(東工業大院)○飯塚毅・李野修士・小宮剛・平田岳史・丸山茂徳

- 2D07 オーストラリア・ピルバラのヘマタイト化したグリーンストーン: 27.6億年前以前に地球表層環境が酸化であった証拠
(1IFREE, JAMSTEC・2東大・院・工学系・3岡山大・地球物質科学研究センター・4鹿児島大・理・物理・5ペンシルバニア州立大)○鈴木勝彦1・加藤泰浩2・中村謙太郎1・日下部実3・根建心具4・BevacquaDavid C.5・大本洋5

第2日(9月27日) ポスターセッション(1) 午前/午後

【ポスター会場: 大学会館】
(コアタイム 13:00-14:00 ポスター掲示は9:00から)

[大気・降水]

- 2P01 沖縄で採取したエアロゾルの水溶化学成分および光化学生成するOHラジカル
(1琉球大院・2琉球大機器分析セ)○黒木由貴子1・仲真良秀1・棚原朗2・新垣雄光1
- 2P02 静電分級技術とレーザーイオン化TOFMSによるナノ粒子中化学成分の測定方法の開発
(1電中研・2三菱重工業)○田中伸幸1・津崎昌東1・出口祥啓2
- 2P03 平衡装置を用いたマイクロリットルレベルの単一水試料からの水素・酸素同位体比測定
(1情報・システム研究機構国立極地研・2科学技術振興機構 SORST project・3東工大)○植村立1,2・松井洋平2・本山秀明1・吉田尚弘2,3
- 2P04 地下水連続観測システムが帯水層温度と溶存ガスに及ぼす影響
(1東京大学理学系研究科付属地殻化学実験施設)○森本温子1・角森史昭1・野津憲治1
- 2P05 沖縄本島におけるエアロゾル中の炭素成分の測定
(1琉球大院・2琉球大理・3琉球大機器分析セ)○仲真良秀1・當間涼子2・大森保2・新垣雄光2・棚原朗3
- 2P06 2002から2004の東京と八丈島における⁷Be,¹⁰Beフラックス
(1日本大院・2日本大文理・3東大院)○山形武靖1・齊藤敬2・永井尚生2・松崎浩之3
- 2P07 自動車排ガス中一酸化二窒素のアイソトポマー比
(1東工大院・総理工・2科学技術振興機構・3東工大・フロンティア創造セ)○豊田栄1,2・山本誠一郎1・奈良英樹1・吉田尚弘1,2,3
- 2P08 落石岬における自動観測システムにより得られた大気中窒素・酸素比の時系列解析
(1国立環境研究所・2科学技術振興機構SORSTプロジェクト・3地球・人間環境フォーラム)○山岸洋明1,2・遠嶋康德1・向井人史1・野尻幸宏1・ZengJiye3・島野富士雄3
- 2P09 北海道豊似湖の柱状堆積物試料における多環芳香族炭化水素およびバイオマス燃焼由来分子マーカーの鉛直分布
(1東京薬科大・2ITM, Stockholm Univ., Sweden・3東京農工大農)○熊田英峰1・Gustafsson Orjan2・高田秀重3・都筑幹夫1・内田達也1
- 2P10 シベリア森林地帯上空大気中のメタンの発生源とその季節変動について
(1北大院・2国環研・3ロシア大気光学研究所)○中川書子1・佐藤倫実1・小松大祐1・角皆潤1・高橋善幸2・町田敏暢2・Arshinov Mikhail 3・Belan Boris 3
- 2P11 大気中非メタン炭化水素の炭素安定同位体比から推定されるphotochemical ageに関する定量的考察
(1東工大・2科学技術振興機構・3東工大フロンティア創造センター)○奈良英樹1,2・吉田尚弘1,2,3

- 2P12 青森県における降水の水素・酸素同位体比
(1(財)環境科学技術研究所・2東北ニュークリア(株))長谷川英尚1・○佐藤忠広2・赤田尚史1・川端一史1・築地由貴1・古川郁2・西村幸一2・近藤邦男1
- 2P13 大気中クリプトン濃度の見直し
(1国環研・2東大アイソトープ総合セ)○青木伸行1,2・巻出義紘2
- 2P14 青森県内における粒径別エアロゾルに含まれる水溶性成分濃度の季節変動
(1環境科学技術研究所・2東北ニュークリア株式会社)○赤田尚史1・川端一史1・長谷川英尚1・築地由貴1・佐藤忠広2・西村幸一2・古川郁2・近藤邦男1
- 2P15 大気エアロゾル中の植物ワックスの炭素安定同位体比を用いた光合成同位体分別の評価
(1岐阜大流域圏環境セ・2海洋研究開発機構地球環境観測研究セ・3東京薬科大・4産総研)○近藤美由紀1・内田昌男2・熊田英峰3・村山昌平4・小泉博1
- 2P16 連続フロー型質量分析計を用いた一酸化炭素の酸素同位体異常定量法開発
(北海道大院)○川口慎介・石川泰・小松大祐・中川書子・角皆潤

[堆積物]

- 2P17 鹿児島湾並びに島原湾海底堆積物における微量元素の分布と挙動
(1武蔵工大原子力研究所・2武蔵工大工学部)○本多照幸1・佐藤裕介2
- 2P18 沖縄県沿岸の堆積物コアにおける有機スズ化合物の分布と経年変化
(1琉球大院・2琉球大理)○津覇恵子1・野口拓郎1・大森保2
- 2P19 鳥取県青谷海岸の鳴き砂とサイレントサンドの地球化学的要因及び元素の挙動
(慶応大学院)○五十嵐智秋・鹿園直建
- 2P20 河口域堆積物の初期続成における黄鉄鉱の生成
(富山大理)○清棲保弘・勝山一輝・荒清 茜
- 2P21 Sr、Nd同位体による南大洋堆積物中の碎屑粒子の供給源解析
(1名古屋大院・2名古屋大理)○浅原良浩1・竹内ふみ2
- 2P22 Kitty's Gap 堆積岩の窒素同位体比から探る始生代地球表層環境
(大阪大)○杉原昭代・橋爪光

第2日(9月27日) ポスターセッション(2) 午前/午後

【ポスター会場: 大学会館】

(コアタイム 13:00-14:00 ポスター掲示は9:00から)

[堆積物]つづき

- 2P23 中国各地に分布する風成堆積物のOs-Nd-Sr同位体系
(1海洋研究開発機構・2広島大学)○本多将俊1・鈴木勝彦1・清水洋2
- 2P24 琵琶湖の湖底堆積物ならびに流入河川堆積物の炭素同位体から探る堆積環境
(1名古屋大年代測定総合研究セ・2名古屋大理・3琵琶湖研究所)○南雅代1・種紀彦2・小田寛貴1・横田喜一郎3・中村俊夫1

[環境]

- 2P25 福岡県西部、室見川および那珂川流域の地球化学図
(1福岡大学理学部地球圏科学科・2富士ソフトABC株式会社)○柚原雅樹1・伊藤裕之2・古川直道1・小路泰之1・石原与四郎1
- 2P26 堆積赤土砂の除去に関する研究
(沖縄国際大学経済学部地域環境政策学科)○新垣武
- 2P27 日本全国沿岸海域の地球化学図の作成と元素の分布特性
(産総研)○今井登・寺島滋・太田充恒・御子柴真澄・岡井貴司・立花好子・池原研・片山肇・野田篤
- 2P28 沖縄における飲料水中のトリハロメタンの発生
(1琉球大院・2琉球大理・3沖縄県衛生環境研究所)○イモタエマ1・大森保2・宮城俊彦3
- 2P29 Evaluation of heavy metal pollution on the marine environments of Okinawa, Japan.
(1琉球大院・2琉球大理)○ノアナウミ1・大森保2
- 2P30 荒川上流中津川流域の地球化学図
(立正大地球環境科学部)○新藤智子・福岡孝昭・福岡孝昭研究室メンバー
- 2P31 Chemical, mineralogical and quantification of nutrient distribution of the three geological forest soils in Okinawa Island
(琉球大)○Bakari Said・Kombo Mohamed・新城竜一・渡嘉敷義浩・渡久山章
- 2P32 XANES法およびHPLC-ICP-MS法を用いた無機ヨウ素の固液両相での直接スペシエーション
(広島大院)○児玉紗由梨・福川昌宏・○高橋嘉夫

- 2P33 横浜におけるPM2.5の発生源寄与と推定
(1秋田県立大学システム科学技術学部・2大王製紙・3横浜国立大学大学院環境情報学府)○川島洋人1・窪田慎2・笹山一樹1・木村寛1・益永茂樹3
- 2P34 玄武岩ガラスの溶解実験; 二酸化炭素地中貯留への応用
(慶應義塾大学)○原田広康
- 2P35 沖縄本島河川堆積物を用いた環境ホルモンの研究
(1東北大・2東大海洋研・3産総研・4琉球大)○北田幸男1・川幡穂高2・鈴木淳3・大森保4
- 2P36 硬骨海綿の骨格年輪を利用する海洋古環境の研究
(琉球大理)大森保・○廣澤絵里・池田末世・森矛都美
- 2P37 河畔木の年輪同位体比を用いた氷河融解量の経年変動の復元の試み
(1北海道大低温科学研・2名古屋大院・3愛媛大農・4中国科学院植物学研究所)○中塚武1・大西啓子1・坂井亜規子2・小林修3・張齊兵4
- 2P38 地下水の地球化学的解析およびモデル化に関する研究 - 幌延深地層研究計画を例として -
(1核燃料サイクル開発機構・2大成建設株式会社)○國丸貴紀1・濱克宏1・山本肇2
- 2P39 CO₂帯水層貯留における岩石からの微量物質溶出挙動
(1電中研・2地球環境産業技術研究機構)○伊藤由紀1・三戸彩絵子2・大隅多加志1・志田原巧1

[課題講演4]

- 2P40 Li isotopic analysis with MC-ICP-MS and its application to mantle xenoliths from Avacha volcano, the Kamchatka arc
(1Earthquake Research Institute, University of Tokyo・2Dept. of Earth Sciences, Kanazawa University)○KIM Taehoon1・NAKAI Shun'ichi1・ARAI Shoji2
- 2P41 Sao Luiz 産天然ダイヤモンドの分光観察
(1東大院付属地殻化学実験施設・2ノボシビルスク州立地質学・地球物理学・鉱物学連合研究所)○小竹翔子1・鍵裕之1・Zedgenizov Dmitry2
- 2P42 地球惑星物質内の希ガス近傍局所構造解析
(1東工大・2大阪大・3熊本大・4岡山大・5高輝度光科学研究セ)○奥部真樹1,4・松本拓也2・吉朝朗3・伊藤英司4・寺田靖子5
- 2P43 Is Iceland a wetspot, a dampspot or not wet at all?
(1Institute for Research on Earth Evolution (IFREE), Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology (JAMSTEC)・2Dept. of Earth Sciences, University of Camerino, Italy)○Nichols A. R. L.1・Carroll M. R.2

第2日（9月27日）学会賞等受賞・特別講演

【講演会場：法215教室】

2005年度日本地球化学会学会賞等受賞講演・特別講演

(16:00～18:00)

- | | | | |
|------|------|-------|--|
| 2J04 | 奨励賞 | | 酸素同位体やCFCsなどをトレーサーとする寒冷海水の流動に関する研究
(Institute of Ocean Sciences, Canada) 川合美千代 |
| 2J03 | 奨励賞 | 16:00 | 鉄・マンガン水酸化物と海水間の希土類元素の分配に関する研究
(産業技術総合研究所地球科学情報研究部門地球化学研究グループ) 太田充恒 |
| 2J02 | 奨励賞 | 16:20 | リチウム同位体分析手法の確立と地球内部物質循環に関する同位体地球化学的研究
(海洋科学技術センター深海研究部) 西尾嘉朗 |
| 2J01 | 学会賞 | 16:40 | 有機エアロゾルの組成と変質に関する地球化学的研究
(北海道大学低温科学研究所) 河村公隆 |
| 2S01 | 特別講演 | 17:20 | Bio-geochemical processes, elemental cycling and eco-environmental change in karstic catchment
(Chinese Academy of Sciences, Guiyang, China)
Liu CongQiang |

第3日（9月28日）口頭発表 午前

【A会場】

[課題講演3]

(9:00～9:05)趣旨説明:吉村和久

(9:00～10:15)座長:相沢省一

- 3A01 (招待講演)縞状炭酸塩堆積物を用いた古環境情報復元
(1九州大学大学院理学院・2秋吉台科学博物館)○栗崎弘輔1・中村久2・吉村和久1

- 3A02 大分県稲積水中鍾乳洞と阿蘇巨大噴火
(1九大院理・2都立大理・3Mc Master大、カナダ)○吉村和久1・栗崎弘輔1・浦田建作2・Ford Derek3・Schwarcz Henry3

- 3A03 第四系浅海性炭酸塩堆積物における酸素同位体層序の可能性(琉球層群コア試料を例に)(仮題)
(1独立行政法人海洋研究開発機構)○坂井三郎

休憩5分

(10:20～11:50)座長:吉村和久

- 3A04 (招待講演)石灰岩と分配係数から推定した古代海水の希土類元素存在度
(1広島大院・2名大院)○田中万也1・川邊岩夫2

- 3A05 カルサイトのマグネサイト化における炭酸塩と熱水溶液間の希土類元素分配挙動
(名大院)○中野悠・川邊岩夫

- 3A06 炭酸塩岩の鉄同位体生物地球化学
(1海洋研究開発機構 地球内部変動研究センター・2NASA Astrobiology Institute)○山口耕生

- 3A07 沖縄本島三疊紀石灰岩の重金属元素含量
(1群馬大学工学部)○相沢省一・栗原利広

(11:50～12:10)ポスター発表の概要

【B会場】

[岩石・地殻]

(9:00～10:30)座長:日高 洋

- 3B01 沈み込むリソスフェリックマントルの地球化学的特徴を探る
(1京都大学地球熱学研究施設・2東京工業大学地球惑星科学専攻・3海洋研究開発機構・4東京大学地殻化学実験施設・5東京大学地震研究所)○山本順司1・平野直人2・羽生毅3・鍵裕之4・兼岡一郎5

- 3B02 CZ法によるダイオプサイドの合成
(東大RIセンター)○伊藤元雄・森岡正名

- 3B03 長石からの熱ルミネッセンス特性の熱処理条件依存性について
(1新潟大理・2新潟大院)○橋本哲夫1・三田村直樹2

- 3B04 沈み込む古いプレート上で活動する新しいタイプの火山活動—成因に関する地球化学的証拠—
(1東工大・2京大地球熱学研究施設・3東大地震研)○平野直人・山本順司・高橋栄一・兼岡一郎・平田岳史

- 3B05 アフリカ大地溝帯(エチオピア南部)産マントル・かんらん岩捕獲岩の記載岩石学的特徴
(琉球大院)○松村里紗・新城竜一

- 3B06 フィリピン海盆北西部の海底基盤岩の岩石学・地球化学的特徴
(琉球大院)○白橋雅記・新城竜一

休憩15分

(10:45～11:50)座長:橋本哲夫

- 3B07 変質作用に伴うジルコン内での希土類元素の再分配挙動:ガボン共和国フランスビル堆積層の例
(1広島大学大学院理学研究科地球惑星システム学専攻・2宇宙・地球化学的進化に関する同位体(MIRAGE)プロジェクトセンター・3Ecole et Observatoire des Sciences de la Terre, UMR7517-CNRS-ULP, France)○堀江憲路1・日高洋1,2・Gauthier-Lafaye Francois3

- 3B08 エチオピア北西部Bure地域の新生代マグマ活動:ブルーム-リソスフェア相互作用
(1琉球大学 理工学研究科 物質地球科学専攻)○メシェンヤダニエル1・新城竜一1

- 3B09 ウラン鉱物の二次形成に伴う希土類元素の再分配
(1広島大学大学院理学研究科地球惑星システム学専攻)○菊池麻希子1・堀江憲路1・日高洋1

- 3B10 伊豆島弧火山岩試料のBe-10と他の微量元素濃度との相関
(1東京大学地震研究所・2千葉大学大学院自然科学研究科・3東京大学大学院工学系研究科)○後反克典1・中井俊一1・新堀賢志1・津久井雅志2・藤井敏嗣1・中田節也1・松
- 3B11 カルボナドダイヤモンドの高空間分解能分光測定
(1東京大学・2ユニソク)○福良哲史・鍵裕之・中川達央

第3日（9月28日）口頭発表 午前

【C会場】

[温泉・熱水]

(9:00~10:45)座長:新垣 武

- 3C01 ニオス湖および マヌーン湖(カメルーン)の現状と今後
(1岡山大地球物質科学研究センター・2吉田技術士事務所・3東工大火山流体研究センター・4富山大・5カメルーン地質調査所・6シガン大・7アメリカ合衆国地質調査所)○日下部実1・吉田裕2・大場武3・佐竹洋4・タニレケグレッグ5・クリングジョージ6・エバンスウィリアム7

- 3C02 草津白根山山頂火口湖湯釜湖水中のポリチオン酸溶存量の見積
(1上智大学理工学部化学科)○井上綾1・木川田喜一1・城川論子1・福原英城1・大井隆夫1

- 3C03 海底熱水系における熱水変質作用 ―オマーンおよびトルードスオフィオライト―
(1東京大学海洋研究所・2(独)産業技術総合研究所地質情報研究部門)○川幡穂高1,2・野原昌人2

- 3C04 大阪府下の温泉の水質とその起源
(1大阪市立大学大学院理学研究科・2岡山大学固体地球研究センター)○益田晴恵1・梶川由起子1・日下部実2

- 3C05 阪神地域の温泉水の成分の特徴と成因について
(1神戸大学大学院総合人間科学研究科・2神戸大学発達科学部)○小野淳史1・寺門靖高2

- 3C06 日本各地の温泉の塩素同位体比について
(1富山大学理学部)○佐竹洋1・新井和仁1・呉佳紅1

- 3C07 地熱水中のヒ素、アンチモンおよび水銀濃度とその分布
(1鹿児島大学理学部)○坂元隼雄1・小堀晃作1・富安卓滋1・穴澤活郎1

休憩15分

[鉱床]

(11:00~11:30)座長:川幡穂高

- 3C08 カナダ・テマガミ産縞状鉄鉱床の生成機構に関する研究
(1九大院理・2ペンシルベニア州立大)○島田雄樹1・安松愛1・本村慶信1・岡崎隆司1・中村智樹1・大本洋2・岡上吉広1・横山拓史1

- 3C09 レーザーアブレーション-ICP質量分析計による局所鉄同位体分析
(東工大院)○アピンヤータンヘン・平田岳史

【D会場】

[陸水]

(9:00~10:30)座長:太田充恒

- 3D01 Bangladesh中東部、Sonargaon地域におけるヒ素汚染地下水―帯水層構造および地下水の化学的特徴に基づく発生機構―

(1岡山大地球物質科学研究セ・2大阪市立大院・3筑波大院・4ダッカ大学院・5信州大学院)○板井啓明1・益田晴恵2・三田村宗樹2・丸岡照幸3・日下部実1・Dipak Biswas4・Ali Ashraf4・袁輪貴治2・上杉健司5・Ahmed Kazi Matin4

- 3D02 群馬県草津白根山東麓源泉ならびに河川におけるヒ素の物質収支
(1上智大学理工学部)○木川田喜一1・川井智1・佐野淳子1・大井隆夫1

- 3D03 地下水に含まれるバクテリア起源の硫化水素の硫黄同位体組成:温度依存性と季節変動
(1筑波大学・2Istituto Italiano di Speleologia・3大阪大学)○丸岡照幸1・Galdenzi Sandro2・松田准一3

- 3D04 神戸層群・大阪層群地域の河川水・地下水の化学組成:特にREEの挙動
(1神戸大院・2神戸大発達科学部)○藤原正悟・寺門靖高

- 3D05 沖縄島南部地域の地下水に関する化学的研究 -琉球石灰岩地域と泥灰岩地域の比較-
(1琉球大学)○渡久山久美1・渡久山章1

- 3D06 バイオミネラリゼーションのプロープとしての希土類元素パターンの可能性
(1広島大院・2原研・3オタワ大学)○平田多恵子1・高橋嘉夫1・尾崎卓郎2・Fortin Danielle3

休憩15分

[その他]

(10:45~11:45)座長:益田晴恵

- 3D07 北日本における降水量、相対湿度の指標としての(エゾマツ、ミズナラ)2種の樹木年輪セルロースのδ18O
(1北大院・2北大低温科学研究所・3北大北方生物圏フィールド科学センター)○辻寛之1・中塚武2・高木健太郎3

- 3D08 セリウム・ネオジムの同位体分別と安定同位体地球化学への応用
(東工大院)○大野剛・平田岳史

- 3D09 磁場勾配NMR法による粘土懸濁液中での水分子の自己拡散係数決定
(1東工大原子炉工学研究所・2サイクル機構)○高橋貴文1・大窪貴洋2・池田泰久1

- 3D10 同位体分析の最新技術
(サーモエレクトロン)○ヒルカートアンドレアス

第3日（9月28日）口頭発表 午後

【A会場】

[課題講演3]

(14:00～15:30) 座長: 田中万也

- 3A08 (招待講演) サング礁の生物から読み取る高分解能環境情報—シャコガイ殻の成長線と同位体比の例—
(1東北大学大学院理学研究科)○山田努1・邊見紗知1・浅海竜司1・井龍康文1

- 3A09 西太平洋域における18世紀末以降の海洋環境変動—グアム島のサング骨格記録からの復元—
(1東北大院)○浅海竜司1・山田努1・井龍康文1

- 3A10 飼育実験に基づく水温指標としてのサング骨格中の微量元素の再評価
(1東北大学大学院理学研究科・2産業技術総合研究所・3(財)自然環境研究センター・4東京大学海洋研究所)○井上麻夕里1・鈴木淳2・野原昌人2・日比野浩平3・川幡穂高1,2,4

- 3A11 サング骨格のバイオミネラリゼーション—古気候学への応用—
(1北海道大学大学院理学研究科・2フランス国立科学研究所・3パリ大学理学部・4フランス国立科学研究所・5フランス国立科学博物館・6モナコ科学研究所・7東京大学海洋研究所)○渡邊剛・Anne Juillet-Leclerc・Jean-Pierre Cuif・Claire Rollion-Bard・Anders Meibom・Stephanie Reynaud・Yannicke Dauphin・白井厚太郎・佐野有司

休憩10分

(15:40～17:00) 座長: 山田 努

- 3A12 光量指標としてのサング骨格炭素同位体比の有用性
(1北海道大学大学院地球環境科学研究科)○島村道代1・大場忠道1・入野智久1

- 3A13 光強度制御下におけるハマサング骨格の炭素・酸素同位体比変動
(1海洋研究開発機構・2産業技術総合研究所・3神戸大学内海域研究センター・4東京大学海洋研究所・5(株)環境総合テクノス)○小俣珠乃1・鈴木淳2・佐藤崇範5・能丸恵理子3・村上明男3・川幡穂高2,4・丸山正1

- 3A14 水槽実験と野外実験によるサング骨格の酸素・炭素同位体比の速度論的同位体効果の検討
(1産総研・2琉球大・3東大海洋研)○鈴木淳1・森本 直子2・蓑島佳代1・酒井一彦2・長尾正之1・川幡穂高1,3

- 3A15 大気二酸化炭素濃度増大に伴う海水のアラゴナイトに対する飽和度の減少とサング石灰化の応答
(琉球大理)○大出茂・ホセイン エムエムエム

17:00～17:05

まとめ: 大出 茂

【B会場】

[岩石・地殻]

(14:00～15:15) 座長: 中村 昇

- 3B12 岩石標準試料中のタングステン同位体測定
(1東京工業大学)○入澤啓太・平田岳史

- 3B13 摩砕石英粒子からの熱ルミネッセンス(TL)特性の粒径依存性と断層運動のTL年代測定について
(1新潟大理・2東北大院)○竹内昭洋1・長濱裕幸2・橋本哲夫1

- 3B14 U-Pb geochronology and trace element studies of zircon 'micro-vein' in gneissic peralkaline granite, western Ethiopia
(1広島大学大学院理学研究科地球惑星システム学専攻)○Kebede Tesfaye・日高洋・堀江憲路・寺田健太郎

- 3B15 U-Pb 地質年代学に基づく韓国・沃川帯と日本・宇奈月帯の地質学的関係
(1広島大学大学院理学研究科・2独立行政法人国立科学博物館・3School of Earth and Environmental Sciences, Seoul National University)○山下恵1・堀江憲路1・堤之恭2・早坂康隆1・日高洋1・Kim Hyeoncheo3・Cho Moon-sup3

- 3B16 Ce-Nd同位体と希土類元素を用いた、島弧マグマへのマントル不均質とスラブ起源流体の寄与についての考察
(1名大院)○林隆正1

休憩15分

(15:30～16:30) 座長: 平田岳史

- 3B17 Radiometric ages and Nd-Sr isotopic compositions of granitic rocks from the Ulleungdo volcanic island, South Korea
(1Ewha Womans University・2Nagoya University・3University of Tokyo・4Nagoya University・5Fukuoka University・6Kumamoto University・7The Taejon University)○Kim Kyu Han1・Tanaka Tsuyoshi2・Nagao Keisuke3・Nakamura Toshio4・Suzuki Kazuhiro2・Sumino Hirochika3・Asahara Yoshihiro2・Hayashi Takamasa2・Okuno Mitsuru5・Shiihara Miki6・Torii Masayuki6・Jeong Chan Ho7・Park Jisun3・Kim Mi Young1

- 3B18 The carbon and oxygen isotope study of the youngest and oldest carbonatites of the world
(1Earthquake Research Institute, The University of Tokyo・2Ottawa-Carleton Geoscience Centre, Dept. of Earth Sciences, Carleton University・3Institute for Study of the Earth's Interior, Okayama University)○Ali Arshad1・Nakai Shun'ichi1・Bell Keith2・Kusakabe Minoru3

- 3B19 鹿児島県北薩地域の火山岩類の地球化学 —塩素含有量—
(鹿児島大院)○古澤美由紀・根建心具

- 3B20 Nano-SIMSを用いた鉱物試料のU-Pb年代測定
(1東大海洋研・2科学博物館地学研究部)○佐野有司1・高畑直人1・堤之恭2

第3日（9月28日）口頭発表 午後

【C会場】

[有機物]

(14:00～14:45)座長:河村公隆

- 3C10 太古代大気窒素同位体比と窒素循環の推定
(1東大海洋研・2東工大院)○西澤学1・上野雄一郎2・佐野有司1
- 3C11 モンゴル・フブスグル湖の湖底堆積物コア(HDP-04)中の有機成分による東ユーラシアにおける長期環境変動に関する研究
(1大妻女子大・2東京理科大・3静岡県立大・4熊本大・5金沢大・6名古屋大)○井上源喜1・安西葉子1・千ヶ崎瞳1・碓井千穂1・水澤沙織1・中村佳代2・小林智恵子2・寺澤友里恵2・森美輪2・竹村哲雄2・谷幸則3・長谷義隆4・柏谷健二5・河合崇欣6
- 3C12 独立栄養性渦鞭毛藻と従属栄養性渦鞭毛藻のステロール組成の違い
(1北大・院・理・地球惑星・2北大・院・理・生物科学)○天羽美紀・鈴木徳行・山口愛果・河村裕・高野義人・堀口健雄

休憩15分

(15:00～16:00)座長:井上源喜

- 3C13 海洋性植物プランクトン5種における存在形態の異なるステロールの組成特徴と、生育温度による組成変化に関する地球化学的意義について
(東海大学海洋学部)○綱島直哉・西村弥亜・秋山信彦・田中愛・中尾恭子
- 3C14 南フランス下部白亜系海洋無酸素事変層準の黒色頁岩のバイオマーカー組成
(1北海道大・院・理・2静岡大・3IFREE)○岡野和貴1・沢田健1・高嶋礼詩1・岡田尚武1・西弘嗣1・鈴木徳行1・飯島耕一3・坂本竜彦3・加藤憲二2・木村浩之2
- 3C15 中国東北部内陸塩湖の大布蘇(ダブス)湖の堆積物コアにおけるアルケノン古水温解析
(1北大院・2名大院・3吉林大学地球科学院)○沢田健1・半田暢彦2・北川浩之2・井上伸夫2・福岡正春2・TareqS.M.2・HuKe3・JieD.3
- 3C16 海洋および湖沼堆積物における4-Methyl Sterolsの分布特徴とその供給源に関する研究
(東海大学)○長村匡紘・西村弥亜・秋山信彦・松田孝信

第3日(9月28日) ポスターセッション(1) 午前/午後

【ポスター会場: 大学会館】
(コアタイム 13:00-14:00 ポスター掲示は9:00から)

[課題講演3]

- 3P01 タヒチ化石サンゴの地球化学的記録が語る第四紀の海洋環境変遷—IODP Expedition 310 Tahiti Sea Levelの展望—
(1東北大院・2CEREGE/CNRS)○浅海竜司1・山田努1・井龍康文1・Camoin Gilbert2
- 3P02 十勝沖から採取された海底コアにおける有孔虫殻の炭素同位体比異常
(1蚕業技術総合研究所・2海洋研究開発機構・3北海道大・4国環研)○大串健一1・内田昌男2・阿波根直一3・柴田康行4
- 3P03 日本海直江津沖の冷湧水域における自生炭酸塩のウラン放射非平衡分析
(1東大地震研・2東大院・3東大総合研究博物館)○渡邊裕美子1・中井俊一1・松本良2・蛭田明宏2・吉田邦夫3
- 3P04 地球化学および結晶化学的手法に基づく環境性ドロマイトの起源の解明: 北大東島産ドロマイトを例にして
(1東北大院・2群馬大工・3コロラド大学地球科学科)○山田努1・鈴木由香1・井龍康文1・稲垣静枝1・相沢省一2・バッドデビッド3
- 3P05 有孔虫殻の2次元高解像度微量元素マッピング
(1東大院海洋研・2高知大海洋コア総合研究セ・3北大地球環境科学研究科・4カリフォルニア大学パークレー校)○国岡大輔1・佐野有司1・高畑直人1・白井厚太郎1・村山雅史2・佐川拓也3・氏家由利香4
- 3P06 サンゴ骨格中のSr/Ca, Mg/Ca比測定法の評価
(1東大海洋研・2東大院)○織田志保1・高畑直人1・茅根創2・石井輝秋1・白井厚太郎1・佐野有司1
- 3P07 段階加熱法によるサンゴ骨格中の窒素・炭素・酸素同位体比測定
(1東大海洋研・2東大院)○内田麻美1・西澤学1・白井厚太郎1・高畑直人1・佐野有司1・飯島寛子2・茅根創2
- 3P08 石垣島白保におけるサンゴ骨格中の重金属濃度から見た環境水中の鉛の変化
(1慶應義塾大・2産総研)○角田友明1・鹿園直建1・川幡穂高2・鈴木淳2
- 3P11 中国東北部の新生代火山岩に含まれるマントル捕獲岩の希ガス同位体組成
(1東大院附属地殻化学実験施設・2吉林大学地球科学学院)○孫景貴1,2・清水綾1・角野浩史1・長尾敬介1
- 3P12 西南日本外帯・瀬戸内区の中新世珪長質火成岩のホウ素含有量
(1東京経済大・2産総研地質情報研究部門・3東大地震研・4熊本大理・5立正大地球環境科学部・6富士常葉大学環境防災学部)○新正裕尚1・角井朝昭2・折橋裕二3・長谷中利昭4・福岡孝昭5・佐野貴司6
- 3P13 Determination of HFSE concentrations and Nb/Ta, Zr/Hf ratios in volcanic rocks by ICP-MS
(1海洋研究開発機構・地球内部変動研究センター・2京大・地球熱学研究施設)○常青1・柴田知之2・篠塚一典1・巽好幸1
- 3P14 LA/ICP-MSによる黒曜石の微量元素分析
(1立正大地球環境科学部・2明治大学文学部)○新藤智子1・中井弥生1・福岡孝昭1・杉原重夫2
- 3P15 マイクロドリルを使用した斜長石斑晶の局所Sr同位体比分析—東北日本蔵王火山の起源マグマの推定—
(1海洋研究開発機構・2京大院附属地球熱学研究施設・3ウッズホール海洋学研究所)○高橋俊郎1・芳川雅子2・柴田知之2・巽好幸1・清水孚道3
- 3P16 海水中におけるパイライトの酸化溶解試験
(1(財)産業創造研究所)○石井智子1・鈴木覚1・本條秀子1・小堀和雄1・萩沼真一1・鈴木和則1
- 3P17 シリカへの希土類元素の取り込み過程
(広島大院)○村田美穂・高橋嘉夫・清水洋
- 3P18 オーストラリア・ピルバラクラトンのMt. Roe玄武岩の熱水変質過程解明のためのU-Pb同位体研究
(1広島大院・2鹿児島大院)○谷垣賢介1・堀江憲路1・日高洋1・帆足雅通2・根建心具2
- 3P19 同位体希釈法による標準岩石の塩素濃度の定量
(1海技大学校・2神戸大院・3神戸大理)○藤谷達也1,2・中村昇2,3
- 3P20 幌満カンラン岩粉末試料のRe-Os同位体組成(その2): カンラン岩のReの正確な定量に向けて
(1海洋研究開発機構・2北大理院)阿部恭子1・○鈴木勝彦1・本多将俊1・篠塚一典1・新井田清信2・巽好幸1
- 3P21 ハンレイ岩の摩擦溶融実験によるK-Ar年代のリセット
(1JAMSTEC, IFREE・2京都大学)○佐藤佳子1・田村肇1・熊谷英恵1・溝口一生2・川畑博1・嶋本利彦2
- 3P09 沖縄本島北部地域における千枚岩中のウラン非平衡について
(1琉球大院・2琉球大理・3琉球大機器分析セ)○當山洋1・宮里涼子2・新垣雄光2・大森保2・棚原朗3
- 3P10 Evidence of pre-Pan-African crustal components in migmatitic biotite gneiss and granitic orthogneisses of the western Ethiopian Precambrian basements
(広島大院)○Kebede Tesfaye・日高洋・堀江憲路

第3日(9月28日) ポスターセッション(2) 午前/午後

【ポスター会場: 大学会館】
(コアタイム 13:00-14:00 ポスター掲示は9:00から)

[岩石・地殻]つづき

- 3P22 イオンクロマトグラフィーを用いた岩石中のフッ素、塩素の定量分析法
(岡山大地球物質科学研究セ)○清水健二・板井啓明・牧嶋昭夫・中村栄三・日下部実
- 3P23 ^{84}Sr 高濃縮スパイクを用いたSrの定量/同位体比同時分析
(1名古屋大年代測定総合研究セ・2名古屋大院)○南雅代1・林隆正2・田中剛2
- 3P24 ユーラシア大陸東縁部、シホテアリンにおける新生代玄武岩質マグマの起源とその時間変遷
(1海洋研究開発機構・2新潟大学理学部・3ロシア科学アカデミー)○平原由香1・巽好幸1・佐藤佳子1・周藤賢治2・PrihodkoVladimir3

[温泉・熱水]

- 3P25 海底熱水系チムニーの温度勾配と生体有機物の濃集挙動の相関
(1北大院理/産総研地質・2産総研地質・3産総研地質・4東大海洋研・5横国大院工・6横国大院工・7東葉大生命)○高野淑識・丸茂克美・GuptaLallan P.・川幡穂高・伊藤有希・小林憲正・山岸明彦
- 3P26 竹富海底温泉の地球化学的研究
(1琉球大院・2琉球大理)○佐野伸哉1・大森保2・野口拓郎1
- 3P27 シリカの溶解に及ぼす陰イオンの影響
(1九大院理)○白淑琴1・占部真示1・岡上吉広1・横山拓史1
- 3P28 ラウ海盆から採取された熱水チムニーの地球化学的研究
(1琉球大理・2琉球大院・3京都大原子炉実験所・4九州大院)大森保1・○伊藤道裕1・野口拓郎2・高田実弥3・石橋純一郎

[鉱床]

- 3P29 東濃ウラン鉱床周辺堆積岩の地球化学
(慶應義塾大院)○金井孝裕・鹿園直建
- 3P30 東濃ウラン鉱床周辺堆積岩中の炭酸塩の地球化学
(慶應義塾大院)○土橋竜太・鹿園直建
- 3P31 低硫化型浅熱水性金鉱床の生成機構に関する研究
(1九大院工・2九大院理)○米津幸太郎1・横山拓史2・今井亮1・渡辺公一郎1

- 3P32 白金錯イオンのマンガン酸化物への吸着挙動 -マンガングラストへの白金の濃縮機構に関する研究-
(九大院理)○谷口智則・岡上吉広・横山拓史

[有機物]

- 3P33 封緘熱分解法によるアセトアルデヒドの分子内炭素同位体分布の計測
(1東工大院・2科学技術振興機構・3東工大フロンティア創造共同研究セ)○那須徳廣1・山田桂大1,2・吉田尚弘1,2,3
- 3P34 三次元蛍光分光による英虞湾底質に含まれる有機物の分析
(大阪大院)○大塚高弘・中嶋悟
- 3P35 ホパンプリオールから見た南海トラフ付加体の地下生物圏
(北大院)○齋藤裕之・鈴木徳行・沢田健
- 3P36 堆積物試料からのRNA・DNAレベル炭素安定同位体比測定に関する検討
(1海洋研究開発機構地球環境観測研究センター地球温暖化情報観測研究プログラム・2筑波大学環境科学研究科・3筑波大学生命環境科学研究科)○内田昌男1・飯田由起子2・木元克典1・内海真生3
- 3P37 海洋性植物プランクトン3種における存在形態の異なる脂肪酸の組成特徴と、生育温度による組成変化に関する地球化学的意義について。
(東海大海洋)○綱島直哉・西村弥亜・秋山信彦・田中愛・中尾恭子
- 3P38 最終氷期日本海におけるバクテリア由来バイオマーカーの分布と炭素同位体比
(1海洋研究開発機構・2金沢大)○松本公平・塚脇真二・大河内直彦・北里洋
- 3P39 炭素同位体比から計算した秋田・新潟の天然ガスの熱分解起源と生物起源の混合比
(産総研)○猪狩俊一郎
- 3P40 サロベツ湿原表層での炭素循環に関する予察的研究
(北大院)○三橋順・鈴木徳行
- 3P41 市販のフミン酸中で起こる鉄の光化学的挙動
(1琉球大院・2琉球大理)○岡田孝一郎1・斎藤究2・新垣雄光2
- 3P42 曽根干潟表層堆積物中のフミン酸の構造解析と環境との関係
(1九州大理・2九州大院)○大塚倫子1・原田美幸1・豊留和香奈1・坂口真澄1・村江達士2・山内敬明2

第3日(9月28日) ポスターセッション(3) 午前/午後

【ポスター会場: 大学会館】
(コアタイム 13:00-14:00 ポスター掲示は9:00から)

[陸水]

3P43 河川水におけるコロイドを介した元素移動—新潟県金丸地区における予察的検討
(産総研深部地質環境研究セ)○上岡晃・鈴木正哉・関陽児・間中光雄・金井豊

3P44 Influence of seismic activity on chemical parameters in ground water of Japan and thermal water of Slovenia
(1Jozef Stefan Institute, Ljubljana, Slovenia・2University of Tokyo)○Popit Andreja1,2・Todorovski Ljupco1・Dzeroski Saso1・Tsunomori Fumiaki2・Notsu Kenji2

3P45 亜熱帯島嶼(西表島)における物質収支の研究(1)
(1九大院理・2鹿児島大農・3総合地球環境学研)○高嶋温子1・栗崎弘輔1・宮崎貴史1・吉村和久1・井倉洋二2・高相徳志郎3・中野孝教3

3P46 四川盆地(中国)における地下水中の硫黄と窒素の人為的な汚染源
(1大阪市立大院・2岡山大地球物質科学研究セ・3東工大院環境理工学創造専攻)○李曉東1・益田晴恵1・日下部実2・木庭啓介3

3P47 Arsenic in groundwater and deteriorating groundwater quality: unfolding crisis in Lahore and Kasur district, Punjab, Pakistan
(1Graduate School of Science, Osaka City University・2Institute for the Study of the Earths Interior, Okayama University・3Geosciences Laboratory, Geological Survey of Pakistan, Islamabad)○FAROOQI ABIDA1・MASUDA HARUE1・KUSAKABE MINORU2・SIDDIQU REHAN-UL- HAQ3

3P48 塩素同位体を用いた地下水の流動状態の推測
(1核燃料サイクル開発機構 東濃地科学センター・2クインテッサ ジャパン)○岩月輝希1・渡辺雅人1・MetcalfeRichard2・井岡聖一郎1

3P49 方解石中の希土類元素を用いた地下水の化学的環境の推察
(核燃料サイクル開発機構東濃地科学セ)○水野崇・岩月輝希

3P50 新潟金丸地区のボーリング地層水中のウラン系列核種の分布
(産総研地質調査総合セ)○金井豊・関陽児・奥澤康一・上岡晃・渡部芳夫

3P51 誤って取り下げられた「中国の...」
(1大阪市立大院・2岡山大地球物質科学研究セ・3東工大院環境理工学創造専攻)○米田曉東1・益田晴恵1・日下部実2・木庭啓介3

3P52 木曽川水系富田川においてダム湖が溶存成分濃度に及ぼす影響
(名古屋大院)○堀田大貴・杉谷健一郎

[その他]

3P53 ICP-MSによる岩石試料中のU, Th, Pb定量における直接希釈-標準添加法の検討
(1海洋研究開発機構・2東大海洋研)○谷水雅治1・黒田潤一郎2

3P54 電気分解による微量水の酸素安定同位体比測定方法の開発
(海洋研究開発機構)○伊藤雅史

3P55 八丈島における土壌と植生分布の関係
(慶應義塾大学大学院)○久保田蘭

3P56 高精度位相シフト干渉計開発による鉱物の溶解・沈殿挙動の実験的研究
(1三菱マテリアル(株)・2東北大学)○加藤耕一1・上田真三1・上田晃1・佐藤久夫2・西村良浩2・塚本勝男2

3P57 沿岸域地下水の水質形成解析: 位相シフト干渉計による方解石の溶解・沈殿挙動の実験的研究
(1(財)産業創造研究所・2三菱マテリアル(株))石井智子1・小堀和雄1・萩沼真之1・鈴木和則1・○加藤耕一2・下田紗音子2・上田晃2

3P58 カルシウム高精度同位体分析法の開発
(東工大院)○菅彰信・平田岳史

日本地球惑星科学 連合ニュース

No. 01 (創刊号)

(2005 年 7 月)

- [1] 日本地球惑星科学連合の設立について
- [2] 2005 年合同大会を終えて
- [3] 2006 年合同大会のお知らせ
- [4] 日本地球惑星科学連合設立準備会議事録(第 2 回～第 5 回)
- [5] 第 31 回地球惑星科学関連学会連絡会議事録(案)
- [6] 新しい日本学術会議の体制について
- [7] アジア・大洋州地球科学会(AOGS)第2回年会報告

2005 年 5 月 25 日、日本地球惑星科学連合が設立され、本号は、No.31 まで続いた地球惑星科学関連学会連絡会ニュースを引き継いだ日本地球惑星科学連合ニュースの創刊号(No.1)となります。本号では、はじめに、日本地球惑星科学連合設立についてお伝えします。次に、2005 年合同大会の報告と来年の合同大会の予定をお知らせします。引き続き、第 2 回～第5回の日本地球惑星科学連合設立準備会議事録、第 31 回地球惑星科学関連学会連絡会議事録(案)を掲載します。また、日本学術会議は平成17年10月から新体制で再出発することになっており、これに関する記事を掲載しております。最後に、アジア・大洋州地球科学会(AOGS)第2回年会報告を掲載しました。

[1] 日本地球惑星科学連合の設立について

1. 概要

2005 年 5 月 25 日、日本地球惑星科学連合が設立されました。連合設立の目的は、「我が国の地球惑星科学コミュニティを代表し、国際連携及び社会への情報発信・教育、関連分野の研究発表、情報交換を通じて、学術の発展に寄与すること」(規約第2条)です。7 月 5 日現在、地球惑星科学関連の 25 学会が加盟し、その規模は今後とも拡大していくことが期待されています。設立に至った経緯や連合の機能等の詳細については、「2. 設立の挨拶」や「[4] 議事録」などをご参照下さい。連合の設立は、設立当日に記者発表を行い、新聞各紙に掲載されたほか、6 月 20 日～24 日にシンガポールで行われた AOGS(Asia Oceania Geosciences Society)の 2nd Annual Meeting にブースを出展し、世界へ向けてアナウンスされました。7

月末には、次期学習指導要領の改訂に向けた高等学校教科「理科」での新科目創設に関する提言書を、連合名で文部科学省へ提出する予定です。日本学術会議への対応など、連合の活動は今後さらにその重要性を増すものと考えられます。

2. 設立の挨拶

●地球惑星科学連合の設立に当たって

連合評議会議長 廣田 勇(京都大学名誉教授)

このたび、長年に亘る議論の成果が実って、関連 24 学会の合意のもと「地球惑星科学連合」が正式に発足したことは、この学問分野の発展にとって極めて意義深いことと思います。ここに至るまでの関係各位のご理解とご協力に対し、まずは深謝の意を表する次第です。

わが国において、たとえば米国の AGU や欧州の EGU に対応する連合組織を作ろうという機運はすでに古くからありました。私の出身分野である地球物理学を例にとれば、地震学、測地学、気象学、海洋学、地球電磁気学、等々に細分されていた研究分野が戦後の数十年に夫々独立に発展してきた中で、単一の研究領域や学会の枠を超えた新しいテーマが次々と芽生え、世界的に評価される高いレベルの研究成果が生まれてきました。その結果、従来は隣人に過ぎなかった異分野の研究者間の交流も活発になり、狭義の「境界領域」ではなく、新分野としての「地球惑星科学」が立派な市民権を得るようになったと言えます。それらの具体例をここで逐一述べるまでもありませんが、象徴的な事例として、太陽系惑星の飛翔体観測により、光学望遠鏡のみに頼っていた従前の惑星観測とは全く違った新しい展開がもたらされ、惑星流体力学が地球の大気大循環論・海洋大循環論を包括するような枠組みを与えたこと、惑星の形成論が固体・流体・電磁場を含めた地球そのものの歴史の理解に繋がったこと、などを想起していただければ十分でしょう。

このような学問の進展を背景にした具体的な動きのひとつが、1990 年から開催されてきた合同大会であり、その成功を契機として、ほぼ十年前から「地球惑星科学関連学会長等懇談会」の名のもとに非公式ながら関連学会相互の情報交換を行なってきました。この懇談会の発足にあたっては、当時の地球電磁気・地球惑星圏学会会長であった河野長氏がリーダーシップをとり、気象学会理事長の松野太郎氏や地震学会会長の石田瑞穂氏らとともに連合発足にむけての第一歩を踏み出しました。以後この懇談会では、世話役を各学会長の持ち回りで年に2回程度の頻度で会合を重ね、相互の情報交換のみならず日本学術会議の研究連絡会との接点を強化するなどの機能を発揮してきました。また、その間に合同大会や関連学会長等懇談会に新しく参加する学会も増えてきました。

連合の理念は、上記の学問論を基盤とした研究者同士の切磋琢磨あるいは地球惑星科学分野のインフラストラクチャー確立であることは言うまでもありませんが、もうひとつの重要な使命としては、社会一般をも含めた学会外部への働きかけの必要性が浮かび上が

ってきたことです。

数年前、内閣府の総合科学技術会議が発表した重要課題のひとつに地球環境問題がありましたが、そのキーワードに示された内容・方針は科学の精神とはほど遠く、二酸化炭素排出規制などのゴミ処理政策の域を出るものではありませんでした。これでは困る。文化国家としての日本の学術振興政策はもっと高い次元を目指すべきである、という点で懇談会の意見は一致しましたが、その要望・提言を対外的に発信する母体としては、公式な組織体がなく、やむを得ず関連学会長有志の連名という弱い形しか取り得ませんでした。

同様な事情は、本年に組織改革が予定されている日本学術会議における我々の立場にもあります。従来のバラバラの研連の寄り合い所帯から脱皮して、物理、化学、生命科学といった大きな学問分野と対等な立場から発言力を強化するためには、それに合った公式の組織体が必要です。これが今回の連合設立の直接的な動機でした。その意味で今後この連合組織の果たすべき対外的責務は重大です。

もちろんこの他にも連合設立の意義はたくさんあります。上記の学問論に立脚した研究後継者育成の問題、初等中等教育における理科(特に地学)教育の問題、地球環境変動に関する一般社会むけの啓蒙啓発活動等々、すでに合同大会の特別セッションでも取り上げられている課題が山積しています。

これらを含め、今回の連合設立が、中堅若手の次世代研究者諸氏にとって、大きな刺激となり研究の発展に繋がることを強く期待しています。

●地球惑星科学の進展をめざして

日本地球惑星科学連合運営会議議長 浜野洋三(東京大学教授)
この度、惑星科学関連のほとんどの学会が加盟する連合組織(7月5日現在の加盟学会は25学会)として「日本地球惑星科学連合」が設立されました。この組織は、地球物理学、地質学、鉱物学、地理学等に関する学会を網羅する、世界でも類を見ない総合的な連合組織です。本組織は、我が国における地球惑星科学コミュニティの相互理解、意見集約や合意形成をはかると同時に、対外的な窓口組織として国や一般社会に対して提言や情報発信を行っていくことを意図しています。対外対応として、日本学術会議との連携や国際プロジェクト等への対応、我が国の科学技術政策への提言、初等・中等教育における地学教育や理科教育問題への対応、報道機関を通じた研究成果等の情報発信、一般市民を対象とした教育・啓蒙・アウトリーチ活動等を積極的に行っていく計画です。しかし、連合がこのような機能を果たすために、皆様の連合への積極的な関与が必須です。それも「連合」に使われるのではなく、「連合」を使って地球惑星科学を取り囲む環境をより良いものに変革していこうとする意欲を持ち、主体的に連合の活動に加わって下さる人々が必要です。連合の事業を推進していくための組織は、運営会議とその下に設け

た総務委員会、財務委員会、企画委員会、広報・アウトリーチ委員会、大会運営委員会、教育問題検討委員会、国際委員会の7つの委員会です。是非、皆様にはこの委員会に加わっていただき、地球惑星科学の進展のために働いていただけることを希望します。

1990年から開催されてきた「地球惑星科学関連学会合同大会」は、地球物理学系のいくつかの学会が集まり毎年春の研究発表集会を合同で行うことからスタートし、現在では、地質学・鉱物学・地理学分野まで含め20以上の学会が参加する大きな大会に発展してきました。合同大会の継続は、1990年東京工業大学から始まり、2000年九州大学までの各大学の大会組織委員会、2001年以降の合同大会運営機構に参加して活動して下さった皆様、そして合同大会開催のために学会間の連絡にあたる地球惑星科学関連学会連絡会の委員の皆様方の努力によるものです。また、この間、地球惑星科学関連学会連絡会や地球物理関連学会学会長等懇談会等では、学会間の連携をさらに発展させるための方策が検討されてきました。これらの努力の積み重ねとして今回の連合の設立があります。

日本地球惑星科学連合の設立の直接のきっかけは、この10月に予定されている日本学術会議の改革に対応して、これまで多数の分野に分かれていた地球惑星科学関連の学会をひとつに束ねた対外的窓口組織をつくるべきであるということが、地球物理学関連学会学会長等懇談会で決議されたことです。これを受けて、地球物理学関連学会及び地質学・鉱物学関連学会が集まり、地球惑星科学分野の「連携の在り方に関する検討ワーキンググループ」が2004年6月に立ち上げられ、10月まで3回にわたって議論・検討が行われました。このワーキンググループに参加するすべての学会では、「地球惑星科学の総合的発展を目的とし、関連加盟学会の総意の下に創設される地球惑星科学の連携組織」を設立することの合意が得られました。その後、「地球惑星科学連合設立準備会」が立ち上げられ、2004年10月から2005年5月まで5回にわたって連合の詳細に関する議論・検討が行われ、地理学分野までを含む25学会(会員数合計約37,000名)の合意のもとに、2005年5月25日に行われた、「拡大評議会」において承認され、正式に発足しました。

今後、本連合では下記の示すような活動を行なっていくことを検討しています。

* 地球惑星科学コミュニティにおける活動

- 地球惑星科学コミュニティにおける諸問題の検討、意見調整・集約
- 国際学協会との連携及び国際プロジェクトへの対応
- 年次研究発表集会(連合大会)を実施
- シンポジウム、その他の研究発表集会を企画・運営
- ニュースレター誌等の発行

* 国や一般社会に対する活動

- 日本学術会議や総合科学技術会議に対する発言や提言
- 初等・中等教育における地学教育や理科教育に関する発言や提言

- 報道機関に対する広報活動
 - インターネットを用いた地球惑星科学の啓蒙普及活動
 - 一般向けの公開講演会の企画・実施
 - 出前授業やマルチメディア授業などの教育活動
 - その他、地球惑星科学に関する情報発信及びアウトリーチ活動
- 是非皆様が連合に参加し、決して順境とは言えない地球惑星科学の今後の進展をめざしていただくことを希望します。

3. 日本地球惑星科学連合の規約

日本地球惑星科学連合規約

平成 17 年 5 月 25 日制定

平成 17 年 7 月 5 日改訂

第1章 総則

(名称)

第1条 本団体は、日本地球惑星科学連合(Japan Geoscience Union)と称する。

第2章 目的及び事業

(目的)

第2条 本団体は、我が国の地球惑星科学コミュニティを代表し、国際連携及び社会への情報発信、関連分野の研究発表、情報交換を通じて、学術の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 本団体は、前条の目的を達成するために次のことを行う。

- (1)地球惑星科学コミュニティに対する国及び社会一般からの諸要請への対応
- (2)地球惑星科学コミュニティの意見集約、対外的情報発信、教育及びアウトリーチ
- (3)地球惑星科学に関わる国際学協会との連携及び国際プロジェクトへの対応
- (4)地球惑星科学に関わる年次研究発表集会の開催及び国際会議等の企画・開催
- (5)地球惑星科学コミュニティに共通する諸問題についての検討と提言
- (6)その他、地球惑星科学の総合的発展を図るために必要な諸活動

第3章 加盟学協会

(加盟学協会の要件)

第4条 本団体に加盟する学協会は、以下の要件を満たさなければならない。

- (1)地球惑星科学に関連する学術団体であること。
- (2)本団体の設立趣旨に賛同する学術団体であること。

(加盟学協会の義務)

第5条 本団体に加盟する学協会は、以下の義務を負う。

- (1)本団体を運営する上で必要とされる人材の派遣及び情報の提供
- (2)本団体を存続させるために評議会が必要と認めた応分の経済的負担

(加盟)

第6条 本団体に加盟するためには、評議会の承認を得なければならない。

(脱退)

第7条 本団体を脱退するためには、評議会に申し入れなければならない。

第4章 組織と役員

(組織)

第8条 本団体を運営するために、評議会、運営会議、及び事務局を設ける。

(評議会)

第9条 評議会は、本団体の運営方針について審議し、事業内容について監査する。

第10条 評議会は、各加盟学協会の長からなる評議員と、運営会議議長及び副議長をもって構成する。

第11条 評議会の議長は評議員の互選により選出する。

第12条 議長の任期は1年とし、再任を認めない。

第13条 議長は評議会を招集する。

第14条 評議会の議決、運営に関する事項については別に定める。

(運営会議)

第15条 運営会議は、本団体の事業を推進し、運営を統括する。

第16条 運営会議は、議長、副議長、及び議員によって構成される。

第17条 運営会議の議長は、本団体を代表し、運営全般を総理する。

第18条 副議長は議長を補佐する。

第19条 議員は、担当する各委員会の委員長、副委員長、及び事務局長として、運営の実務を行う。

第20条 議長、副議長の任期は2年とし、再任を認めない。

第21条 議員の任期は2年とし、再任を妨げない。

第22条 議長、副議長、議員の候補者の選考は運営会議で行い、評議会の承認を得る。

第23条 議長は運営会議を招集する。

第24条 運営会議の議決、運営に関する事項については別に定める。

(各委員会)

第25条 運営会議の下に、運営の実務を行う次の常置委員会を置

く。

- (1)総務委員会
- (2)財務委員会
- (3)企画委員会
- (4)広報・アウトリーチ委員会
- (5)大会運営委員会
- (6)教育問題検討委員会
- (7)国際委員会

第26条 各委員会の業務内容については別に定める。

第27条 各委員会は、委員長、副委員長、及び委員によって構成される。

第28条 各委員会の委員長、副委員長は、運営会議が選任する。

第29条 各委員会の委員長、副委員長、及び委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

第30条 各委員会の委員は、加盟学協会からの情報提供に基づき、運営会議が選任する。

(事務局)

第31条 本団体に事務局を置く。

第32条 事務局は、本団体の運営全般に関わる事務を行う。

第33条 事務局に事務局長を置く。

第34条 事務局長は、運営会議が選任する。

第5章 会計

(経理)

第35条 本団体の運営経費は、第2章第3条に掲げる事業によって生じる収入をもってあてる。

第36条 本団体の収支決算は、運営会議議長のもとで作成し、評議会に報告して承認を得なければならない。

第6章 規約の変更

第37条 本規約の変更は、運営会議が提案し、評議会の承認を得て発効する。

附則

1 この規約は、平成17年5月25日から施行する。

2 第22条及び第30条の規定に関わらず、本団体発足時の運営会議議長、副議長、各委員会委員長、副委員長及び委員については、日本地球惑星科学連合設立準備会において選考し、発足時に開催される評議会において承認を得るものとする。

3 発足時(平成17年5月25日)の加盟学協会は次の通りである。

(50音順、但し日本を除く)

日本応用地質学会	日本海洋学会
日本火山学会	日本岩石鉱物鉱床学会

日本気象学会	日本鉱物学会
日本古生物学会	資源地質学会
日本情報地質学会	日本地震学会
日本水文科学学会	水文・水資源学会
日本雪氷学会	日本測地学会
日本第四紀学会	日本地学教育学会
日本地下水学会	日本地球化学学会
地球電磁気・地球惑星圏学会	日本地質学会
日本地理学会	日本粘土学会
日本陸水学会	日本惑星科学学会

4 平成17年7月5日現在の加盟学協会は次の通りである。

(50音順、但し日本を除く)

日本応用地質学会	日本海洋学会
日本火山学会	日本岩石鉱物鉱床学会
日本気象学会	日本鉱物学会
日本古生物学会	資源地質学会
日本情報地質学会	日本地震学会
日本水文科学学会	水文・水資源学会
日本雪氷学会	日本測地学会
日本堆積学会	日本第四紀学会
日本地学教育学会	日本地下水学会
日本地球化学学会	地球電磁気・地球惑星圏学会
日本地質学会	日本地理学会
日本粘土学会	日本陸水学会
日本惑星科学学会	

(以上)

4. 日本地球惑星科学連合の組織

●評議会

加盟学会の長(学会長や理事長等)及び運営会議の議長及び副議長からなり、連合の運営方針について審議し、事業内容について監査する。

評議会

議長: 廣田 勇 (日本気象学会理事長・京都大学名誉教授)

●運営会議

連合の事業を推進し、運営を統括する。運営会議の下に、運営の実務を行う常置委員会として、総務委員会、財務委員会、企画委員会、広報・アウトリーチ委員会、大会運営委員会、教育問題検討委員会、国際委員会の7つを置く。

運営会議

議長: 浜野洋三 (東京大学)

副議長: 木村 学 (東京大学)

・総務委員会

委員長: 中村正人 (宇宙航空研究開発機構)

副委員長: 吉田武義 (東北大学)

・財務委員会

委員長: 川幡穂高 (産業技術総合研究所)

副委員長: 小原隆博 (情報通信研究機構)

・企画委員会

委員長: 大村善治 (京都大学生存圏研究所)

副委員長: 吉田真吾 (東京大学地震研究所)

・広報・アウトリーチ委員会

委員長: 田近英一 (東京大学)

副委員長: 原 辰彦 (建築研究所)

・大会運営委員会

委員長: 津田敏隆 (京都大学生存圏研究所)

副委員長: 高橋幸弘 (東北大学)

・地学教育問題検討委員会

委員長: 阿部国広 (川崎市立有馬小学校)

副委員長: 根本泰雄 (大阪市立大学)

・国際委員会

(委員長, 副委員長は未定)

●連合事務局

連合の運営全般に関わる事務を行う。

事務局長: 岩上直幹 (東京大学)

チーフ: 谷上美穂子

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学理学部 1 号館 719 号室

TEL: 03-5841-4291 FAX: 03-5841-1364

Email: office@jpgu.org

[2] 2005 年合同大会を終えて

1. 総括

2005 年合同大会実行委員長 渡辺 秀文

地球惑星科学関連学会 2005 年合同大会は、昨年と同じ5日間の日程で開催されましたが、昨年より5学会増えて25学会の共催・協賛により、昨を上回る3400名あまりの参加と2336件の発表があり、活発な議論が繰り広げられました。また、大会の裾野を広げ、より充実・確固たる大会へ発展させるために、47団体に後援していただきました。参加された皆様、関連学会、後援団体及び関連分野の情報発信のための展示をしていただいた団体の方々に厚くお礼申し上げます。

今大会の特色の一つとして、一般向けのアウトリーチ講演が拡充されたことがあります。大会初日には、昨年に引き続き開催された

「新しい地学教育の試みー2. 学習指導要領を考える」に加えて、5つの特別公開セッションが開催され、エキサイティングな最先端の研究やそれらの社会との結びつきについて、第一線の研究者に分かりやすく講演していただきました。合同大会参加学会員を含む多数の参加があり、熱心な質疑応答がかわされ、予想以上の盛り上がりとなりました。また新たな試みとして、海外からの研究者も参加しやすくするために、インターナショナルセッションも開催されました。各会場では熱い議論が交わされ、会場に入りきれず、通路に人が溢れている会場もありました。講演・ポスター会場とも収容限界に近く、来年の合同大会では、会場の確保やレギュラーセッションの見直しも含めて、さらに踏み込んだ企画調整が必要であるように思いました。

また、地球惑星科学分野でかねてから切望されていた関連学会の連携組織として、「日本地球惑星科学連合」が発足したことは、大会期間中の大変重要なエポックでした。今後は、「連合」を主体として、これまで以上に確固とした体制のもと、合同大会が開催されることとなります。日本の科学や教育を取り巻く大きな変動の中で、地球惑星科学関連分野の研究交流の場および情報発信の場として、本合同大会は、ますます重要な役割を果たすことになると思います。今後とも、より多くの皆様に、引き続き積極的なご参加をお願いし、お礼の挨拶と代えさせていただきます。

[大会概要]

会期 : 2005 年 5 月 22 日(日) - 26 日(木)

会場 : 千葉幕張メッセ 国際会議場

● 共催・協賛学会数 25 学会

● 後援団体 47 団体

● 参加者数 3403 名

事前参加登録者数 2222 名

(一般 1352 名, 学生 610 名, 一日券 260 名)

当日参加登録者数 898 名

(一般 262 名, 学生 169 名, 一日券 467 名)

見学学部生 246 名, シニア(70 歳以上) 37 名

● 論文投稿数 2336 件

● セッション数 110 件(ユニオン: 2, レギュラー: 63, スペシャル: 39, 特別公開: 6)

● 会場数 12

● アルバイト延べ 211 名 地元ボランティア 延べ 27 名

● 団体展示 22 団体(24 ブース)

COE: 京都大学 COE: 東京大学 COE: 名古屋大学

COE: 東京工業大学 COE: 東北大学

朝日航洋(株) 愛媛大学 沿岸環境科学研究センター

応用地質(株) / 応用地震計測(株)

統合国際深海掘削計画(IODP) / 海洋研究開発機構
地球深部探査センター

(独)海洋研究開発機構 地球内部変動研究センター
 (株)勝島製作所 (株)建設技術研究所 地質センター
 国土交通省国土地理院
 (独)産業技術総合研究所 地質調査総合センター
 ジクー・データシステムズ(株)
 (独)情報通信研究機構 (宇宙天気分野リモートセンシング分野)
 総合研究大学院大学 複合科学研究科 極域科学専攻/
 情報・システム研究機構 国立極地研究所
 (株)地球科学総合研究所 地熱エンジニアリング(株)
 東京大学 海洋研究所 白山工業(株)
 日本ニューメリカルアルゴリズムズグループ(株)

- 書籍・出版団体展示 15 団体(16 ブース)
- (株)朝倉書店 インフォトレーダー(株)
- (株)ケンブリッジ・ユニバーシティプレス
- ユナイテッドパブリッシャーズサービス(株)
- イースタン・ブック・サービス(株)
- 有限会社海猫屋 エルゼビア・ジャパン(株)
- 海洋出版(株) 京都大学学術出版会
- 共立出版(株) 古今書院
- (株)テラハウス テラバブ
- (財)東京大学出版会 日本地質学会
- 会合 51 会合
- 取材プレス数 21 社

2. 企画局報告

2005 年担当責任者 高橋 幸弘
 副責任者 大村 善治 田近 英一

「特別公開セッション」では、これまでの地学教育問題に加え、中学・高校生及び一般市民を対象としたアウトリーチセッションを大々的に企画した。ユニオンセッションでは、初めて男女共同参画を取り上げた。また新たな試みとして、英語による発表を行うインターナショナルセッションを認めることとし、積極的な提案を呼びかけた。「団体展示」の企画・広報、関連団体へ合同大会「後援」依頼は昨年引き続き積極的に行い、新たに宇宙工学関連の学会などからも後援を得た。

●後援

4 年目を迎える企画で、大会の裾野を広げ、より充実し確固たる大会への発展を目的としている。「後援」依頼の内容は、①経済的負担は求めない、②後援者としてポスター・プログラム・ホームページに団体名の記載、③(可能な限りで)団体展示への出展依頼、の3点である。地球惑星科学関連の機関への依頼の他に、2005 年大会では、日本航空宇宙学会など航空宇宙関連に関連する工学系3学会の後援を新たに依頼した。その結果、昨年より8 団体多い、47 団体より後援をとりつけることができた。

[後援団体一覧]

文部科学省	日本学術会議
気象庁気象研究所	気象庁地磁気観測所

国土交通省海上保安庁海洋情報部
 国土交通省国土地理院
 大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構
 大学共同利用機関法人自然科学研究機構国立天文台
 大学共同利用機関法人情報・システム研究機構国立極地研究所
 大学共同利用機関法人情報・システム研究機構統計数理研究所
 公設試験研究機関北海道立地質研究所
 国立教育政策研究所
 (独)宇宙航空研究開発機構 (独)海洋研究開発機構
 (独)建築研究所 (独)国立科学博物館
 (独)国立環境研究所 (独)産業技術総合研究所
 (独)情報通信研究機構 (独)森林総合研究所
 (独)石油天然ガス・金属鉱物資源機構
 (独)土木研究所 (独)農業環境技術研究所
 (独)農業工学研究所 (独)物質・材料研究機構
 (独)北海道開発土木研究所 (独)防災科学技術研究所
 (独)理化学研究所
 (特)核燃料サイクル開発機構東濃地科学センター
 (財)宇宙環境利用推進センター (財)資源・環境観測解析センター
 (財)資源探査用観測システム研究開発機構
 (財)地震予知総合研究振興会 (財)地球科学技術総合推進機構
 (財)地球環境産業技術研究機構 (財)電力中央研究所
 (財)日本宇宙フォーラム (財)日本地図センター
 (財)深田地質研究所
 (社)全国地質調査業協会連合会 (社)東京都地質調査業協会
 (社)日本建設機械化協会 (社)日本測量協会
 (社)日本分析機器工業会 (社)電子情報通信学会
 (社)日本機械学会 (社)日本航空宇宙学会

●団体展示

大会開催中、全期間を通じて利用できる展示ブースで、この研究分野にまつわる包括的情報発信の場を目指している。出展数は 22 団体 24 ブースであった。これまで同様、会場のメイン 2F の中央ロビーで開催できたため、多くの人がブースを訪れた。昨年に引き続き地球惑星科学関連の“21 世紀COEプログラム”に関する展示をはじめとする各大学・研究機関のブースが多数並んだ。こうした展示は、学部生にとって大学院選択における貴重な情報源として機能していると思われる。

[出展者一覧]

COE: 京都大学	COE: 東京大学	COE: 名古屋大学
COE: 東京工業大学	COE: 東北大学	
朝日航洋(株)	愛媛大学	沿岸環境科学研究センター
応用地質(株)	応用地震計測(株)	

統合国際深海掘削計画(IODP)/海洋研究開発機構
 地球深部探査センター

(独)海洋研究開発機構 地球内部変動研究センター
 (株)勝島製作所 (株)建設技術研究所 地質センター
 国土交通省国土地理院
 (独)産業技術総合研究所 地質調査総合センター
 ジクー・データシステムズ(株)
 (独)情報通信研究機構 (宇宙天気分野リモートセンシング分野)
 総合研究大学院大学 複合科学研究科 極域科学専攻/

情報・システム研究機構 国立極地研究所

(株)地球科学総合研究所 地熱エンジニアリング(株)
東京大学 海洋研究所 白山工業(株)
日本ニューメリカルアルゴリズムズグループ(株)

●特別公開セッション

2005 年大会の特別公開セッションでは、これまでの地学教育の議論を進める「新しい地学教育の試み-2 学習指導要領を考える」に加え、中学・高校生を中心とした一般市民に対する啓蒙・普及に重点をおいたアウトリーチセッションの充実に力を入れた。全ての特別公開セッションは大会初日の 5 月 22 日（日曜日）に開催された。

[アウトリーチセッション]

以下に、アウトリーチセッションの一覧を示す。このなかで、「地球・惑星科学トップセミナー」は各学会に講師の推薦を依頼して作られたプログラムで、それ以外は企画局および企画局の依頼したコンピーナによる構成となっている。合わせて 20 名以上の講師の方にご協力いただいた。全体の構成・時間帯など必ずしも全てに満足のいく企画ができなかった点は反省として残る。しかし、遠くは福島県の高校から多くの生徒さんや市民の方に足を運んでいただき、地球惑星科学研究の先端に触れてもらうことができたことは、初年度として一定の成果があったと言えると考えている。来年以降、これをより発展させ、中身のあるものに育てることが大きな課題であると認識している。

・「超小型衛星による地球惑星圏科学への挑戦」

10:00-12:15（国際会議室）

・「地球・惑星科学トップセミナー」

10:00-12:15 / 14:00-17:45（201A）

・「スマトラ沖大地震とインド洋大津波」

13:00-14:00（コンベンションホール B）

・「近未来地球大予測」

14:00-18:00（コンベンションホール B）

・「キッチン」からみた地球・惑星」

14:00-18:00（201B）

「新しい地学教育の試み-2 学習指導要領を考える」では、昨年に引き続き、学会・分野を越えた教育・研究者の間で活発な議論が交わされた。2004 年大会以降議論を発展させ、大会後に新規参加した 2 学会を含む地球惑星科学関連学会 22 学会は、中央教育審議会等に提出した提言「社会の持続的発展を促す地学教育のための提言」の中で、地学教育の重要性を説き、現状の問題点を指摘し、改善への要望を述べた。2005 年大会は、提言が歌い上げた「地学」の存在意義を、教育内容の面でより具体的に示すことを目標に、意見交換が行われた。特に、改訂が間近に迫った学習指導要領に提言の趣旨を色濃く反映させることを、近詰の課題として取り上げた。こうした動きは日本地球惑星科学連合およびその下に設置される委員会に引

き継がれることとなった。

● ユニオンセッション

今大会では、「映像でみる地球惑星科学 一竹内均先生追悼特別セッション」および「地球惑星科学における男女共同参画」の 2 つのユニオンセッションが開催され、ともに非常に盛況であった。男女共同参画は近年の社会状況の中で、広い分野における共通の課題として認識されてきており、セッションには地球惑星科学分野以外の研究者の参加もあるなど強い関心を集めた。男女共同参画の動きは、ジェンダーの問題だけに留まらず、ポストドクの置かれている環境など、男女が共通して抱える問題についての取り組みとしても、改めて位置づけられた格好になった。

● インターナショナルセッション

日本に滞在中の外国人も含め、多くの外国の研究者に日本の高い研究アクティビティを知っていただき、合わせて合同大会のさらなる活性化を目的として、今大会より英語による口頭発表セッション（スペシャルセッション）を認め、積極的な提案をお願いした。その結果、4 セッション（口頭：72、ポスター：13）の講演が行われ、英語での活発な議論が展開された。今大会のインターナショナルセッションでの講演は、EPS 誌の特集号の論文として近日中の出版を予定している。

● 広報活動

1. ポスター作成・配布：大会および特別公開セッション用の 2 つのポスターを一般公募のデザインによって作成し、広く配布した。今大会は印刷枚数を昨年比 1100 部増で印刷し、A2 サイズ 1500 部で作成した。配布先は、関連専攻のある大学・研究機関(238)、教育センター・研究所等(180)、博物館(200)等へである。特に、特別公開セッション用のポスターは、教育機関などを中心に約 1425 カ所に配布した。

2. アウトリーチセッションのリーフレットの作成・配布：特別公開セッションで 2005 年大会で新たに企画された「アウトリーチ」関連のセッションの内容を、講師の方の顔写真とともにまとめたリーフレットを 5000 部作成した。ポスターと伴に関連機関などに広く配布すると同時に、プログラムに同封して大会参加者全員に送った。

3. マスコミによる広報：主要な新聞、放送局などのマスメディアに対し、本大会およびその中のアウトリーチセッションの事前告知の協力をお願いした。その結果、新聞・テレビなどで記事や番組中のお知らせとして取り上げていただいた。

4. 当日の取材記者への対応：基本的に前大会通りで、「取材方法指示書」を準備して、1F 受付カウンターで記名、プレス用名札着用の上入場してもらい、原則として大会企画担当委員が概要の説明を行った。来場は 21 社、37 名であった。日本地球惑星科学連合発足なども含め、読売新聞、朝日新聞、毎日新聞をはじめ多くのマスコミ、雑誌で記事として取り上げていただいた。

● 日本地球惑星科学連発足記念パーティ及び懇親会

日本地球惑星科学連合の発足を記念して、5 月 25 日 19 時-21 時

に会場一階レストランにてパーティーを開催した。連合加盟各学会の代表・役員をはじめ大会参加者の中から 95 名余りの参加者があり、連合発足を祝うと共に、お互いの親睦を深めることができた。

また、5 月 23 日 18 時 30 分～20 時には、一階ラウンジにて、参加費 1000 円の懇親会(ビアパーティー)を開催した。若手を中心に、約 188 名の参加があり、分野を越えた交流の芽が生まれた。

3. プログラム局報告

2005 年プログラム委員長 篠原 育

2005 年大会は総セッション数 110(特別公開セッションを含む、1 コマ 90 分のコマ数にして 235 コマ)、総投稿数 2336(2004 年大会では 2021)となり、昨年より 15%程参加人数が増加しました。このため、2004 年大会から会期が 1 日延びて 5 日間になっていたものの、現状の会場規模・日数ではほぼ目一杯の状態になりました。プログラム編成に際しては、セッションの統廃合、口頭発表講演数の調整、時間割の調整などで各セッションコンピーナー、プログラム委員の皆様にも多大なるご協力をいただきました。本来のご希望を満たすことができない点も多々あったかと思いますが、非常に窮屈な境界条件の中ではベストに近いプログラム編成ができたのではないかと思います。セッションコンピーナー、プログラム委員、そして大会に参加された皆様のご協力とご理解に厚くお礼を申し上げます。

2005 年大会でもここ数年の大会を踏襲し、セッション区分としてレギュラー、スペシャル、ユニオンの 3 つの区分を設けました。ユニオンセッションとしては「映像でみる地球惑星科学」、「男女共同参画」の 2 セッションを開催しました。また、特別公開セッションとして「新しい地学教育の試み」、「近未来地球大予測」、「地球・惑星科学トップセミナー」、「超小型衛星による地球惑星圏科学への挑戦」、「キッチンからみた地球・惑星」、「特別企画・スマトラ沖大地震とインド洋大津波」の 5 つのセッションを大会初日の日曜日に開催し、一般の方々が参加しやすいように配慮しました。2005 年大会からの新しい試みとしては、インターナショナル・セッションをスペシャルセッション提案のオプションとして設け、セッションの公用語を英語として国

外からの研究者の参加を促進することをを行いました。「初期地球惑星誌」、「極域熱圏下部ロケット観測」、「スプライト宇宙地上観測」、「非線形プロセス」の 4 セッションがインターナショナルセッションとして開催され、これらのセッションでは 21 件の講演が国外の研究者を主著者として発表されました。次回大会以降も合同大会の活動を広く海外にも知ってもらえるようにこのような取り組みを支援していきたいと考えています。また、3 月には福岡西方沖地震が発生したため関連報告のご提案をいただきました。プログラム編成終了後ではありましたが、その緊急性を考慮して急遽ポスターセッションを編成して対応しました。大会規模が大きくなっても、このような緊急の場合にも柔軟に対応できるように、多少はゆとりをもった大会運営ができるようにと思います。今回大会では参加者が大幅に増加しましたが、再びオーラル発表数が制限されることとなってしまったことは

大変残念でした。

ポスターセッションの扱いについてはプログラム編成時に若干混乱させてしまいました。今回の大会では一昨年の大会のやり方に戻して、ポスターの掲示時間を朝から夕方コアタイムまでとし、夕方にコアタイムを設けました。当初、最終日にはポスターセッションを設けない方針で調整を進めましたが、4 日間開催では会場のポスター掲示数の都合から「口頭セッションとポスターセッションはできるだけ同日に開催したい」、「最終日のポスターセッションはさけて欲しい」という 2 つの要望を十分に満たすポスターセッションの日程を組むことができませんでした。最終的には、できり限り「口頭とポスターは同日」に開催することを原則に、最終日もポスターセッションを開催し、最終日のポスターセッションについては変則的に昼休みをコアタイムとして指定してもよい、ということに落ち着きました。結果的には、いくつかのセッションに無理なお願いをすることになってしまいました。本意でないにもかかわらず調整を快くうけいれただいたセッションの方々にはお詫びとお礼を申し上げます。参加者の皆様にもご理解・ご協力いただき大変感謝しております。ポスターセッションの日程の扱いについては、今後も工夫を重ねてよりよい解を見つけていきたいと思います。

2006 年大会も今回の経験を基にして、他局と協力し、よりよい大会の実現を図りたいと考えております。今後も皆様のご理解とご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

4. 情報局報告

2005 年担当責任者 綿田 辰吾

昨年度に比べ、本年度は予稿投稿システムに問題が発生したため、利用者の皆様にご迷惑をおかけしました。お詫び申し上げます。昨年導入された web 上でのクレジットカードによるお支払いは、支払い手続きを完了せずとも参加登録・投稿が可能であったため、未払い金回収のため多大な事務作業負担が発生しました。今年度は基本的に支払い手続きをクレジットカードで完了または機関払い登録が完了してから参加登録・投稿手続きが完了するシステムに変更しました。投稿開始当日 1 月 11 日にクレジットカード決済が異常終了する不具合が発生し、翌日復旧しました。投稿完了・個人情報登録完了通知メールが、一部利用者側のメールゲートウェイのセキュリティ強化により受信拒否され 1 月 24 日頃まで通知メールが届きませんでした。早期投稿割引締切日 2 月 14 日と最終締切日 2 月 21 日には、一部利用者により予稿投稿システムからの反応がなくなる障害が発生し、プログラム局と協議して最終締切日を 1 日延長しました。日本語が読めない参加者のための英文によるシステム利用は実現しませんでした。歴代情報局・プログラム局で改良され各セッションのコンピーナに使用いただいたプログラム編成システムや、参加者全員にご利用いただいた個人情報管理システムは安定して稼働できました。昨年度の試行を経て本年度から参加者の便宜のため会場 1 階と 2 階の一部で運営機構による無線 LAN サービス開始しました。

大会プログラム編成後に開発・運用委託先の JCOM(株)に投稿システムの不安定の原因について説明を求めましたが満足のいく説明はありません。来年度は安定稼働にむけてシステムの改良と投稿開始から締切日までの間にシステム再起動を定期的の実施する予定です。予稿に特殊記号・文字を入れることができないこと、投稿システムに利用者からの動作(ボタンを押すなど)が 20 分以上ないと強制ログオフとなることが周知されず原稿を入力中にログオフ状態となったために原稿が消えてしまったこと、クレジットカードを所持していない利用者がいたこと、クレジット決済は JCOM を通じて委託しているクレジット会社の画面に遷移して実行されることの周知がなされておらず不安に思われたことなどの利用者からの苦情がありました。提供するサービスを明確にしつつシステムの安定稼働と英文による利用可能なシステム構築が来年度への課題となりました。

5. 財務局報告

2005 年担当責任者 中村 正人

本大会は地球惑星科学関連学会合同大会として最後の年であった。来年度からは日本地球惑星科学連合合同大会として新たなスタートを切る。財務に関しても合同大会のみに関するものではなく、連合全体の会計の一部となる。これを機会に会計年度を従来の 7 月－6 月ではなく 10 月－9 月に改めさせていただくことが連合の方針として決まっている。主な理由は校費の振込みが役所の年度始め事務開始の遅れに伴い 6 月には終了しないからである。新会計年度では年度末には校費の振込みが終了していることを予想している。経過措置として、本会計年度は 2004 年 7 月－2005 年 9 月となる。この変則措置があるため、今年度の赤字黒字を議論することは意味がないが、おおよそ 6 月時点までの収支を報告したい。

まず、参加者数の増加に伴い投稿料は前年度に比べ 60 万円、参加費は 370 万円程増加した。また団体展示も 50 万円増えたため約 480 万円程度の増収となっている。また、JCOM への業務委託費も 220 万円圧縮された。これに対し、大会規模の拡大に伴う会場使用料が 175 万円、運営機構の経費が事務局給与アップ、備品の購入などにより 230 万円程度支出が増えている。これらを勘案すると、収入と支出はおおよそバランスしており、細かく言えば約 300 万円の黒字となっている。昨年度最終的に約 100 万円の赤字を出した状況と較べると若干の改善を見ているといえよう。但し、全体の大会会計規模が 4000 万円程度であり、それに較べると一桁小さな数字である。全体として収入と支出がバランスしているということは参加費、投稿料などが適切に設定されているものと自負している。

前述のように会計年度を閉めるのが例年と違い数ヶ月先となるため、恒例としている収支報告は今回公表しない。10 月に連合の財務委員会から正式な報告があるものと考えている。

今年度から完全なクレジットのみの決済に踏み切ったが、効果は絶大であった。未回収金に関わる事務局の作業は激減した。参加される方の中には不満を述べられた方もいらしたが、前回の財務局

説明によりほぼ理解を得られたものと感謝している。また、昨年の報告で事務局の待遇改善を訴えさせていただいた。これに関しても、状況は良い方向に向かっていると思う。今後とも参加者の皆様のご理解を請うものである。

中村は長年にわたって財務局責任者を勤めさせていただいたが、連合の発足に伴い、財務を去ることになった。今後は川幡財務委員長、小原副委員長をはじめとする財務委員会の皆さんに仕事をお任せすることになる。長い間の皆様のご協力、ご理解、また運営機構事務局の努力に心から感謝したい。

6. 総務局報告

2005 年担当責任者 岩上 直幹

メッセでの大会も今年で 3 回目となり、予想外のトラブルは発生しなかった。会期中のトラブルの多くは PC プロジェクト関係であり、切替器関連のトラブルも多かった。これはまだ参加者に理解がいきわたっていないためと思われ、参加者の慣れと会場係アルバイトへの情報徹底で減少していくものと思われる。会場での統計の結果、OHP プロジェクトの必要だった会場は 10%程度しかなかったことが解かったため、来年より標準装備から OHP をはずして PC プロジェクトのみとし、OHP はリクエストがあった場合にのみ対応することにする。

会場数の少なさ・小ささは 3 年前からすでに潜在的問題だったが、ますます顕在化しつつある。前列が空いたまま入口が詰まってしまう現象は、椅子配置の工夫で一部では軽減されたが、今年も多発した。座長による詰め合わせ勧告をさらに徹底すべきであろう。来年には 1 階食堂の一部が講演会場として使える予定で、不足している 150 人部屋が一つは増えるが、さしあたってこれから数年は、部屋不足には会期の延長などで対処するしかない。ポスター会場も繁盛時には狭いとの意見があり、展示会場(恐竜展をやるところだが費用増)の使用およびコンベンション B の転用(部屋が大きすぎ、講演用には低効率)も検討している。

合同大会はボランティアで成り立っています。

あなたが主役、あなたが裏方です。

[3] 2006 年合同大会のお知らせ

1. 概要

●会期: 2006 年 5 月 14 日(日)－18 日(木)

●会場: 幕張メッセ国際会議場

●費用: 投稿料、参加費

基本的に 2005 年大会に準ずる。

詳細別途公開 (但し見学学部生、70 歳以上無料)

●各種登録開始・締切日(予定)

講演投稿 開始:2006 年 1 月 10 日(火)
締切:2006 年 2 月 10 日頃
事前参加登録 開始:2006 年 1 月 10 日(火)
締切:2006 年 4 月 10 日頃

2. 「セッション提案」のお知らせ

2006 年大会プログラム委員長 北 和之

2006 年大会プログラム委員長を務めることになりました茨城大学理学部の北 和之と申します。ご存知の通り、今年から連合がスタートし、プログラム局も連合の大会運営委員会の中に位置づけられることとなりました。しかし、これまでの大会運営に携わってきた方々の様々な経験から、セッション区分やプログラム編成スケジュールはほぼ固まっておりますので、2006 年度も基本的にはその手順を踏襲し、蓄積を活かして運営を進めたいと考えております。とはいえ、私自身は合同大会のプログラム編成についてこれから勉強を始めるといった状況ですが、他のプログラム局員、大会スタッフをはじめとする皆様によるご指導などいただき議論を重ねながら、より充実したプログラムを目指していきたく思っております。より活発で充実した大会となりますよう、皆様からの新しいご提案を歓迎いたします。

【1】プログラム委員会の構成と役割

プログラム委員会についてご説明致します。

- (1) プログラム委員会は、各共催学会選出の委員と連合大会運営委員会プログラム局員から構成されます。
- (2) プログラム委員会は、提案されたセッションの採択、プログラム日程案の作成を行います(具体的なスケジュールは後述)。
- (3) プログラム委員会は、(2)の作業を行いますが、最終的な全体調整はプログラム局幹事会(後述)が中立的な立場から責任を持って行います。

大会運営委員会プログラム局員と学会選出プログラム委員は兼任可能ですが、プログラム局幹事会は中立的な立場を保つため、兼任は不可です。プログラム局幹事会は、2006 年プログラム委員長、前年度・次年度のプログラム委員長に分野のバランスを考えた数名の幹事を加えて構成します。プログラム編成に関する検討事項はプログラム局幹事会で案を立て、プログラム委員会で検討致します。

【2】2006 年大会のセッション区分(案)

2006 年大会でもこれまでの大会と同様に、R(レギュラー)、S(スペシャル)、U(ユニオン)の 3 区分を設けて、プログラム編成を行います。その他にも、前回同様に、一般の方々や教育関係者も対象とする特別公開セッションや海外の研究者による発表を多数招き英語で行う国際セッションなどのご提案もお待ちしております。

[R セッション]

5 年間程度セッション名を固定するレギュラーセッションです。

2001 年大会で各学会から提案していただいたセッションの他に、レギュラー化を希望され、過去の実績からレギュラー化が適当であるとプログラム委員会が判断したセッションがあります。2001 年に提案されたレギュラーセッションについては、5 年が経過したということで見直しを行うことになっております。その間の学問の進展等により、レギュラーセッションの統廃合あるいは新設を行い、更なる活性化に結びつけたいというご提案がありましたら、プログラム委員会で積極的に検討させていただきます。また、新規参加の学会に対しても、レギュラーセッションをご提案頂く、もしくは合同大会への参加実績を重ねた上でレギュラー化をご検討いただくなどの対応を考えております。

[S セッション]

旬の研究テーマを学会横断的に議論するセッションとして、これまで同様に一般から公募します。

[U セッション]

全学会に関係する話題を取り上げるセッションです。運営機構提案や公募などによって、2002 年は 3 セッション、2003 年は 1 セッション、2004 年と 2005 年は 2 セッションを 1 日ずつ行いました。2006 年大会も同様な方針を考えておりますので、皆さまからの積極的なご提案をお待ちしております。

【3】2006 年大会プログラム編成スケジュール(案)

2006 年大会のプログラム編成日程案を以下に示します。

8 月初旬	プログラム委員会再編開始
9 月初旬	R セッション決定(レギュラー化を希望されたセッションの検討を含む)
9 月中旬～	U/S セッション公募開始
10 月下旬	U セッション決定
11 月初旬	S セッション公募締切
11 月中旬	S セッション採択
1 月 10 日ころ	投稿受付開始
2 月初旬	早期締切
2 月 10 日ころ	投稿締切
2 月中旬	セッション日程等の編成
3 月初旬	投稿者へ日程時間割通知
3 月中旬	プログラム最終調整と編成終了
5 月 14～18 日	2006 年大会

上記のセッション区分案、プログラム編成スケジュール案などはプログラム委員会で検討し、決定する予定です。結果につきましては、プログラム委員および合同大会のウェブサイトを通して、皆様にお知らせいたします。2006 年の大会に向けて、どうぞよろしくお願い致します。

[4] 日本地球惑星科学連合設立準備会議事録 (第2回～第5回)

1. 日本地球惑星科学連合設立準備会第2回会合議事録

日時:平成16年12月4日(土)13:30～17:00

場所:東京大学理学部3号館326号室

出席者(敬称略)

日比谷紀之(日本海洋学会), 中川光弘(日本火山学会), 神山孝吉(日本雪氷学会), 小寺浩二(日本陸水学会), 近藤豊(日本気象学会), 長谷見晶子(日本地震学会), 中村正人(地球電磁気・地球惑星圏学会), 加藤照之(日本測地学会), 田近英一(日本惑星科学会), 大谷栄治(日本岩石鉱物鉱床学会), 川幡穂高(日本地球化学会), 塚本尚義(日本鉱物学会), 奥村晃史(日本第四紀学会), 木村 学(日本地質学会), 渡邊寧(資源地質学会), 安原正也(日本水文科学会), 近藤昭彦(水文・水資源学会), 丸井敦尚(日本地下水学会), 北里洋(日本古生物学会), 宮本英昭(日本応用地質学会), 井上厚行(日本粘土学会), 平林順一(地球物理学関連学会会長等懇談会), 渡辺秀文(地球惑星科学関連学会連絡会), 浜野洋三(準備会委員長), 西田篤弘(日本学術会議), 山中高光(日本学術会議), 町田洋(日本学術会議), 野上道男(日本学術会議), 松浦充宏(地球物理学研連), 井内美郎(地質学研連), 藤野清志(鉱物学研連)

(決定事項)

1. 地球惑星科学を代表する新しい日本学術会議会員の候補者グループとして, 下記の9名(五十音順)を選出した.

石田瑞穂(防災科学技術研究所・研究主監)
岡田尚武(北海道大学大学院理学研究科・教授)
河野 長(岡山大学固体地球研究センター・教授)
平 朝彦(海洋研究開発機構地球内部探査センター・センター長)
永原裕子(東京大学大学院理学系研究科・教授)
藤井敏嗣(東京大学地震研究所・教授)
水谷 仁(宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部・教授)
山形俊男(東京大学大学院理学系研究科・教授)
山中高光(大阪大学大学院理学研究科・教授)

(審議事項)

1. 日本粘土学会より準備会参加の意思表示がなされ, 参加が承認された. これにより準備会参加学会は下記の21学会となった.

(参加学会)

日本海洋学会, 日本火山学会, 日本雪氷学会, 日本陸水学会, 日本気象学会, 日本地震学会, 地球電磁気・地球惑星圏学会, 日本測地学会, 日本惑星科学会, 日本岩石鉱物鉱床学会, 日本水文科学会, 水文・水資源学会, 日本地下水学会, 日本地球化学会, 日本鉱物学会, 資源地質学会, 日本第四紀学会, 日本地質学会, 日本古生物学会, 日本応用地質学会, 日本粘土学会

2. 浜野準備会委員長から, 平成17年度中に日本地球惑星科学連合を設立するためには, 春の各学会総会で連合加盟の承認を得る必要があり, 準備会の作業は来年3月半ばまでに終えなければいけないことが説明された.

3. 地球惑星科学を代表する学術会議会員候補者グループの選出について

各学会から地球惑星科学の広がりをカバーすることを考慮して推薦された候補者(各5名以内, 全41名)について, 一人一人推薦理由が述べられた.

続いて, 準備会として地球惑星科学全体を代表する候補者を6～7名にしぼるために, 便宜的に科研費の地球惑星科学分科の細目並びに現学術会議関連研連を参考に設定した下記の7分野に関して, それぞれ最適な候補者1名以内を, 推薦された候補者から選ぶ事とした.

- ・固体地球物理学 測地, 地震, 火山
- ・気象・海洋物理・陸水学
- ・超高層物理学 地球電磁気学 極地
- ・地質学
- ・層位・古生物学・環境地質学, 第四紀学
- ・岩石・鉱物・鉱床学
- ・惑星科学・地球宇宙化学

最適候補者の選出にあたっては, 数物系(数学, 物理, 天文, プラズマ, 地球惑星科学, 地理学)の他分野に対しても競争力がある候補者であることを重視した. 分野毎の検討等を経て, 最終的に, 岡田, 河野, 平, 藤井, 水谷, 山形及び山中の7名に絞られたが, さらに各学会の候補者情報提供に関わる制約条件を考慮して, 上記7名に加え, 石田, 永原の2名を選出した.

なお, 日本学術会議会員の選出にあたっては, 上記7分野が考慮されるわけではなく, 地球惑星科学分野全体として適切な方々が数名(おそらく5名程度)選出されることになると考えられる. したがって, これらの最適候補者グループは, 上記7分野のそれぞれの代表者としてではなく, 地球惑星科学全体を代表する会員候補者として, 地球惑星科学関連の21学会が参加している地球惑星科学連合設立準備会において選出されたとみなすべきものである.

各参加学会は, 準備会で選出された9名の最適候補者グループを尊重し, この中から各学会の情報提供者数の3分の1程度を情報提供する候補者に含めることが取り決められた. 但し, 情報提供者数が4名以下の学会と前もって申し出られた学会については, 各学会の事情に配慮することとした. 各学会が情報提供する際に含めるべき最適候補者の具体的な数は, 下記の通りである.

情報提供者数	5, 6名	最適候補者記載数	1～2名以上
情報提供者数	7, 8, 9名	最適候補者記載数	2～3名以上
情報提供者数	10, 11名	最適候補者記載数	3～4名以上
情報提供者数	17名	最適候補者記載数	5～6名以上

4. 連合設立の準備状況について

連合の名称、目的、機能、構成、設立時期などについて、現在の提案(連携WG第2回会合報告参照)に対し、各学会においてほぼ同意が得られている。2月末までに最低2回準備会を開き、次回(1月の準備会)で案を議論し、次々回(2月の準備会)で決定したい。これを各学会では来年3月以降の総会で連合設立及び連合加盟の是非を審議頂けるようにする。なお、連合の財政に関しては、これまでの議論によって連合は各加盟学会には分担金を求めないことになっているが、分担金に関してはいくつかの学会から意見が提出されている。

5. 次回は1月10日(月曜日)13時30分から開催する。

2. 日本地球惑星科学連合設立準備会第3回会合議事録

日時:平成17年1月10日(月)13:30~17:00

場所:東京大学理学部3号館326号室

出席者(敬称略)

日比谷紀之(日本海洋学会)、中川光弘(日本火山学会)、西尾文彦(日本雪氷学会)、小寺浩二(日本陸水学会)、近藤豊(日本気象学会)、平原和朗(日本地震学会)、中村正人(地球電磁気・地球惑星圏学会)、加藤照之(日本測地学会)、田近英一(日本惑星科学会)、大谷栄治(日本岩石鉱物鉱床学会)、中井俊一(日本地球化学会)、赤荻正樹(日本鉱物学会)、奥村晃史(日本第四紀学会)、木村学(日本地質学会)、渡邊寧(資源地質学会)、安原正也(日本水文科学会)、近藤昭彦(水文・水資源学会)、丸井敦尚(日本地下水学会)、棚部一成(日本古生物学会)、山崎淳司(日本粘土学会)、小口高(日本地理学会)、平林順一(地球物理学関連学会会長等懇談会)、渡辺秀文(地球惑星科学関連学会連絡会)、浜野洋三(準備会委員長)、松浦充宏(地球物理学研連)

1. 新規参加学会

日本地理学会から参加の意思表示があり、これを承認した、これによって準備会参加学会は22学会となった。

2. 今後のスケジュールについて

* 準備会として、本年度の地球惑星科学関連学会合同大会の開催時(5月22日~26日)に日本地球惑星科学連合(以下連合と記す)を設立する予定で、準備会の作業を進めることで合意が得られた。

* 合同大会以前に今年度の総会が開催される学会は10学会程度であるが、各参加学会の状況を伺ったところ、各学会では、理事会・評議会等で、連合への加盟を事実上決定できるとの報告であった。

* 各学会で加盟を決定頂くために必要な連合の規約については、3月半ばまでに確定することとする。このため次回準備会(2月5日)において、準備会として規約の最終案をまとめ、その後各学会での

検討を経て確定する。

* 連合発足時の連合の構成メンバーについては、合同大会以前に準備会において選出し、発足時に開催予定の評議会において承認を受ける。

* このため、合同大会期間中に連合の拡大評議会(各加盟学会の代表者、準備会委員及び関係者)及び発足記念パーティーを開催することとした。

3. 日本地球惑星科学連合の運営に関わる検討内容

* 日本地球惑星科学連合の規約案および組織図案に基づき議論を行った。

* 日本地球惑星科学連合の運営は評議会(各加盟学会の代表者を委員とする)、運営会議、及び運営会議の下に設ける各委員会によって行う。

* 連合の財政基盤に関しては、長時間にわたり議論を行った。加盟学会から分担金を徴収することのみで連合運営に必要な経費がまかなえないことは全ての参加学会で共通に認識されている。一部の加盟学会が多額の分担金を負担したとしてもすべての必要経費をまかなえるわけでもなく、むしろ、そのことで学会間の不平等が生じることも望ましくない。一方で、多くの学会に無理がないと考えられる分担金額(2万円程度)を集め、連合運営のための費用の一部を分担金でカバーする案も議論されたが、分担金をとることが、今後加盟しようとする学会に対して高いハードルとなり、その結果、連合の発展を阻害する要因にもなりかねないと危惧する意見があった。このような検討の結果、連合の主たる財源の基盤として、連合大会開催に関わる参加費、投稿料、展示料等をあてることとした。

* 但し、加盟学会が連合を支えていることを明確に示すため、加盟学会の義務として、「連合に経済的破綻が生じる恐れがあるときは、評議会の議決に基づき、各学会が応分の負担をすることを担保する」ことを、規約に付け加えることとした。

4. 日本地球惑星科学連合の組織に関わる検討内容

* 評議会は、連合運営の基本方針を定め、連合の運営をチェックする機能を果たす。また、連合の構成員、規約、加盟学会の入退会等について、審議して承認を与える役割をもつ。

* 評議会は、各加盟学会の代表者及び運営会議の議長、副議長から構成される。

* また、必要に応じて日本学術会議会員をオブザーバーとして加えることとする。

* 運営会議は連合の運営に責任を持ち、運営に関わる意思決定を行う。

* 運営会議は議長、副議長と、各委員会の委員長から構成される。

* 日本地球惑星科学連合の代表は、運営会議議長をもってあてる。

* 議長、副議長の任期は2年とする。

* 副議長は任期満了後議長となる。

* 運営会議に、国際、教育・アウトリーチ(含、男女共同参画)、大会運営、財務、企画、広報・情報、総務の7委員会を置く方向で検討する。

* 各委員会は委員長、副委員長及び委員から構成される。

* 委員の任期は2年とし、再任は妨げない。

* 副委員長は次期の委員長となる。

* 各委員会の任務については、早急に具体的に検討する。

* 委員は、加盟学会からの情報提供等に基づいて運営会議で選出し、評議会で承認を受ける。

* 国際及び教育・アウトリーチ委員会委員については、各学会に担当の委員がいるので、それらの担当者から構成することが、一案として考えられる。

* 運営会議のメンバー(議長、副議長、各委員会の委員長)についても同様に、評議会で承認を受ける。

* 連合の発足時には、運営会議の議長、副議長、各委員会の委員長、副委員長、委員について、準備会で原案を作り、発足時に開催予定の評議会において承認をうける。

* このため、委員等の候補者について、各学会から2名程度の情報提供を頂き、準備会において検討する。

* これまでの地球惑星科学関連学会連絡会と合同大会運営機構の組織は、発展的に解消して、日本地球惑星科学連合になったものと位置づける。

* 今後は、連合との連絡(定期活動報告や重要案件に関する依頼等)のために、各加盟学会の内部に窓口となる連合担当役員を置いて頂く。また、ニュースレター(年6回程度発行予定)等の刊行物は、連合として発行する。

* 合同大会運営機構の組織については、大会実施に直接関わるプログラム局、情報局、総務局は大会運営委員会としてまとめられ、財務、企画、広報に関しては、連合運営会議の各委員会にうつる。

* 運営機構事務局については、連合の事務局に統合する。

* 運営機構及び連絡会の資産については、連合に移管する。

5. 次回準備会は2月5日10時から東京大学理学部3号館326号室において開催する。

3. 日本地球惑星科学連合設立準備会第4回会合議事録

日時:平成17年2月5日(土)10:00~12:30

場所:東京大学理学部3号館326号室

出席者(敬称略)

日比谷紀之(日本海洋学会)、中川光弘(日本火山学会)、西尾文彦(日本雪氷学会)、小寺浩二(日本陸水学会)、近藤豊(日本気象学会)、平原和朗(日本地震学会)、中村正人(地球電磁気・地球惑星圏学会)、加藤照之(日本測地学会)、田近英一(日本惑星科学会)、大谷栄治(日本岩石鉱物鉱床学会)、川端穂高(日本地球化学会)、赤荻正樹(日本鉱物学会)、奥村晃史(日本第四紀学会)、安原正也(日

本水文科学会)、近藤昭彦(水文・水資源学会)、丸井敦尚(日本地下水学会)、棚部一成(日本古生物学会)、山崎淳司(日本粘土学会)、小口高(日本地理学会)、宮本英昭(日本応用地質学会)、渡辺秀文(地球惑星科学関連学会連絡会)、浜野洋三(準備会委員長)、松浦充宏(地球物理学研連)

(決定事項)

日本地球惑星科学連合規約について、設立準備会としての最終案を確定した。各学会には、この規約案に基づき、本年5月に開催予定の合同大会までに日本地球惑星科学連合への加盟の可否を決定していただく

(規約案の変更点)

第1条 英語名称を Japanese Union of Earth and Planetary Sciences (JUEPS) とする

第11条 加盟学会の代表者 → 各加盟学会の長

第13条 議長任期は2年 → 1年

第23条 議長、副議長、議員の選出は運営会議で行い → 議長、副議長、議員の候補者の選出は運営会議で行い

第26条 委員会を置く → 常置委員会を置く

広報委員会 → 広報・アウトリーチ委員会

教育・アウトリーチ委員会 → 教育問題検討委員会

第36条 本文 → 本団体の運営経費は第2章第4条に掲げる事業によって生じる収入をもってあてる

(1)-(3)を削除

附則2 運営会議議長、副議長、各委員会委員長及び副委員長については → 運営会議議長、副議長、各委員会委員長、副委員長及び委員については

(委員会組織に関する検討内容)

1. 運営会議に下記の7常置委員会を置くこととした。これ以外の委員会については、必要となったときに設ける。

(1) 総務委員会

(2) 財務委員会

(3) 企画委員会

(4) 広報・アウトリーチ委員会

(5) 大会運営委員会

(6) 教育問題検討委員会

(7) 国際委員会

2. 教育問題検討委員会及び国際委員会の委員は、多くの学会にすでに担当の委員または役員がおられることから、これらの担当者を委員会の委員とすることとした。また、担当委員がおられない学会については、できるだけ担当委員をお願いいただけるようにおねがいすることとした。

3. 本年開催の合同大会の際に連合を発足させる予定であるため、それまでに連合のメンバーを確定して、合同大会の際に開催される予定の評議会で承認いただくことが必要である。このため、総務委員会、財務委員会、企画委員会、広報・アウトリーチ委員会、大会運営委員会については、各学会から2名程度の候補者を情報提供いただき、連合発足時のメンバーの原案を作成し、4月半ばをめどに開催予定の次回準備会でメンバーを確定する方針で、進めることとした。

4. 日本地球惑星科学連合設立準備会第5回会合議事録

日時:平成 17 年 5 月 14 日(土) 13:30-16:00

場所:東京大学理学部 3 号館 326 号室

出席者(敬称略)

宮本英昭(日本応用地質学会)、岩坂直人(日本海洋学会)、渡辺秀文(日本火山学会、地球惑星科学関連学会連絡会)、藤部文昭(日本気象学会)、渡辺寧(資源地質学会)、平原和朗(日本地震学会)、鈴木啓助(日本水文科学学会)、近藤昭彦(水文・水資源学会)、西尾文彦(日本雪氷学会)、加藤照之(日本測地学会)、奥村晃史(日本第四紀学会)、川幡穂高(日本地球化学会)、中村正人(地球電磁気・地球惑星圏学会)、脇田浩二(日本地質学会)、小口 高(日本地理学会)、田近英一(日本惑星科学学会)、平林順一(地球物理学関連学会会長等懇談会)、浜野洋三(合同大会運営機構)、松浦充宏(地球物理学研連)、南島正重(日本地学教育学会)、牛尾知雄(日本大気電気学会)、塩野清治(日本情報地質学会)、松本良、白井正明(日本堆積学会)
以上23名

1. 連合発足時加盟学会の確認

日本地学教育学会および日本情報地質学会から加盟の意思表示があり、これを承認した。これによって5月25日に予定される連合発足時の加盟学会は24学会、述べ会員数は約4万人となる見込み。このほか、日本大気電気学会と日本堆積学会が将来的な加盟の検討を行う予定。

2. 日本地球惑星科学連合規約の修正、確認

* 各学会で検討していただき、その意見を考慮して、微修正を行った。

* 連合発足時はこのままの規約でよいが、発足後も柔軟に改訂していくべきであるという意見が出た。

3. 連合発足時の委員構成の審議、決定

* 浜野準備会委員長より、叩き台となる原案が出された。

* 各委員会の委員長・副委員長候補者には、浜野準備会委員長より打診することとした。

* 女性メンバーがほとんどいないので、増やすべきであるとの意見が出された。

* 各委員会の委員は、必要に応じて随時追加できることとした。

* 評議会の議長は、5月25日に予定されている拡大評議会の場において、評議員の互選によって決めることを確認した。

* 教育問題検討委員会については、現在連絡会におかれている「地学教育」委員会の活動および委員の継続性を考慮しつつ、「地学教育」委員会は解散し、新しい連合のもと教育問題検討委員会を立ち上げる、という方向で調整することとなった。

* 教育問題は重要なので、連合加盟学会以外の学会や個人の立場での参加も認めることとした。

* 国際委員会については、新生学術会議の対応組織が確定していない段階なので、まだ組織を固めず、しばらく様子を見ることとした。

4. 設立手順の確認

* 拡大評議会を、5月25日(水)12:15-13:45に幕張メッセ国際会議場1階レストランNOAA内会議室で開催し、評議会議長の選出、日本地球惑星科学連合規約の承認、運営会議委員の承認、今後の運営方針の承認を行う。これによって、日本地球惑星科学連合が設立される予定。この拡大評議会には、連合評議会委員(加盟学会の長)および設立準備会委員が出席する。出席者名を5月20日までに事務局へ連絡する。

* 日本地球惑星科学連合設立記念パーティを、5月25日(水)19:00-21:00に幕張メッセ国際会議場1階レストランNOAA内会議室で開催する。会費は3000円。各学会に4-5名程度の参加者を要請する。参加予定人数を5月20日までに事務局に連絡する。

5. 連合発足後の活動について

* 連合設立の周知するために、早急に広報活動(ニュースレターの発行及びホームページの立ち上げなど)を行う。

* 6月末のAOGSでは展示ブースを出し、広報活動を行う。

6. その他

* 地球惑星科学関連学会連絡会は、5月26日に予定されている拡大連絡会をもって解散する。

* 地球物理学関連学会学会会長等懇談会も、連合評議会へ移行する見通し。

* 地球惑星科学連合設立準備会は、5月25日の拡大評議会をもって解散する。

[5] 第 31 回地球惑星科学関連学会連絡会議事録(案)

日時:2005 年 5 月 26 日(木)15:30-17:00

場所:幕張メッセ国際会議場 101A

出席者:雨宮秀雄(日本測地学会)、安藤寿男(運営機構)、岩坂直人(日本海洋学会)、牛尾知雄(日本大気電気学会)、大谷栄治(日本岩

石鉱物鉱床学会), 大村善治(運営機構), 岡元太郎(日本地震学会), 奥村晃史(日本第四紀学会), 金子隆之(日本火山学会), 川幡穂高(日本地球化学会), 北和之(運営機構), 北里洋(日本古生物学会), 小暮敏博(日本鉱物学会), 近藤昭彦(水文・水資源学会), 近藤忠(日本岩石鉱物鉱床学会), 佐藤智美(日本地震学会), 嶋田純(日本地下水学会), 鈴木啓助(日本水文科学会), 関陽児(資源地質学会), 高橋幸弘(地球電磁気・地球惑星圏学会), 武井康子(日本地震学会), 竹本修三(日本測地学会), 田近英一(日本惑星科学会), 田中剛(日本地球化学会), 津田敏隆(日本気象学会), 中井仁(「地学教育」委員会世話人), 中村正人(運営機構), 七山太(日本地質学会), 西尾文彦(日本雪氷学会), 根本泰雄(「地学教育」委員会世話人), 浜野洋三(運営機構), 原辰彦(運営機構), 外田智千(日本岩石鉱物鉱床学会), 諸井孝文(日本地震学会), 山野誠(日本地震学会), 綿田辰吾(運営機構), 渡辺秀文(日本火山学会)

以上 37 名

配布資料:

1. 議事次第
2. 第 30 回地球惑星科学関連学会連絡会議議事録(案)
3. 地球惑星科学関連学会 2005 年合同大会に関する資料
4. 日本地球惑星科学連合の設立に関する資料
5. 「地学教育」委員会, 教育課程部会報告および要望・協力依頼

議事:

1. 前回議事録の承認(連絡会会長: 渡辺)
第 30 回地球惑星科学関連学会連絡会(2004 年 10 月 12 日)議事録について, 案の通り承認された。
2. 2005 年合同大会報告(運営機構: 濱野, 中村)
5 月 22 日～26 日に渡って, 千葉幕張メッセ国際会議場において 2005 年合同大会が開かれた。共催・協賛学会数 25 学会, 後援団体 47 団体, 参加者 3300 名(25 日現在), 論文投稿数 2339 件であった。日曜日(22 日)に行われたアウトリーチ関係のセッションが好評であった。会計については, 大会最終日の時点で, 支出合計 12,547,850 円, 来年度への繰越金は 25,941,691 円と見込まれ, ほぼ計画通りとなる予定である。
3. 2006 年大会について(運営機構: 濱野)
2006 年大会については, 名称は今回の日本地球惑星科学連合への移行に伴って変更される可能性もあるが, 他は今年度と変わりなく行われる予定である(5 月 14 日～18 日を予定)。
4. 日本地球惑星科学連合について(運営機構: 濱野, 中村)
地球惑星科学分野は, これまで多数の学会に分かれて個別に活動を行ってきたが, 今年秋の日本学術会議の改革に伴い, 従来の

体制では, 国や社会に対する発言や情報発信, 理科教育や科学政策に対する提言が効果的にできなくなることが危惧された。そのため, 地球惑星科学関連の学会をひとつに束ねた対外的窓口組織である「地球惑星科学連合」を設立することとなった。今大会中の 5 月 25 日に「拡大評議会」において本件が承認され, 正式に発足の運びとなった。発足時点で参加学会は 24 学会, 会員数のべ約 37000 人である。連合の目的, 機能としては, 国・社会からの要請への対応, コミュニティーの意見集約と対外発信・アウトリーチ, 国際学会・国際プロジェクトへの対応, 年次研究集会の開催などがある。組織は, 評議会(連合の運営方針の審議・事業内容の監査を行う)と, 運営会議(連合の事業の推進・運営の統括を行う)から構成され, 運営会議の下に, 運営の実務を行う 7 つの常置委員会(総務, 財務, 企画, 広報・アウトリーチ, 大会運営, 教育問題検討, 国際)を置く。また, 連合の運営全般に関する事務を行うための事務局を置く。評議会の議長として, 気象学会の廣田勇理事長が選ばれた。

運営会議, 各委員会との連絡を円滑に行うため, 各学会に窓口委員をつくることとなった(5 月 26 日の段階でほとんどの委員は決定済み)。窓口委員は連合の各委員会からの連絡事項を各学会に伝える。

教育問題については, これまでの「地学教育」委員会の活動等を踏まえ, 今回設立される教育問題検討委員会の下に, 作業部会的な役割を行う小委員会を置くことが提案された。教育問題検討委員会は, 各学会の若干名の代表者から構成され, 各学会一票の議決権をもつこととした(人選にあたってはこの点に留意)。小委員会は, これまで教育関係の要望書・提言作成の実務を担ってきた「地学教育」委員会およびその部会である教育課程部会のメンバーを中心に構成することとし, 連合の正式な作業部会として認知し, 出張費等も出せるようにとの要望があった。また, 文科省の学習指導要領改訂に間に合うように提言を出す必要があるため, 早急に教育問題検討委員会を立ち上げる必要があることが報告された。この件に関しては, 総務委員会と「地学教育」委員会の世話人が近日中に相談し, 教育問題検討委員会を開催するための準備をすることとなった。

5. 「地学教育」委員会報告(「地学教育」委員会: 大村, 根本, 中井)
“平成 18 年度以降の大学入試センター試験「地学」出題方法(「理科」内でのグループ分け)に関する要望書”, “社会の持続的発展を促す地学教育のための提言”を文科省他に提出した。現在, カリキュラムの枠組みを具体的に記した提言を策定中である。文科省の学習指導要領改訂のスケジュールを考えると, 7 月末までに本提言を提出する必要がある。

本委員会および教育課程部会から, 連合に対し, 1) 7 月末までにカリキュラムに関する提言を連合名で提出すること, および提出時に記者会見を行うこと, 2) 日本理科教育学会, 日本科学教育学会の連合への参加依頼を行うこと, が要望として出された。いずれも承認されたが, 2)に関しては, 連合への参加ではなく合同大会の協

賛を依頼することになった。

6. その他(運営機構:濱野, 中村, 連絡会会長:渡辺)

これまでの連絡会ニュースと同様な、各学会の印刷物等に入れる連絡のニュースレターに加え、EOS的なニュースレターを出すことを検討している。第1号は、連合発足の案内と各学会の活動状況を紹介する内容になる見込みである。原稿については、広報委員会から、各学会へ、窓口委員を通じて、依頼が行われる予定である。

連絡会は今回をもって活動を終了するが、来年度からは、各学会の窓口委員が合同学会中に会合をもつなど、「直接情報交換をする場」を設けることが必要との認識が確認された。

[6] 新しい日本学術会議の体制について

第19期会員 西田篤弘 (総合研究大学院大学)

日本学術会議は平成17年10月1日から新しい体制に移行する。新体制の詳細は新期(第20期)の学術会議で審議・決定されるものであるが、それに先立ち、会長のもとに「日本学術会議の新しい体制の在り方に関する懇談会」がおかれ、素案の検討を行ってきた。懇談会の最終報告はまだ公表されていないものの、その大筋は中間まとめや配布資料によって見る事ができると思われるので、抜粋して紹介する。

- 連携会員 2000人程度。在任可能機関は原則として通算18年。
- 常置委員会 期(3年)の最初に設置され原則としてその期の間存続することを原則とする委員会。機能別委員会(総称)と分野別委員会とがある。
- 機能別委員会(総称) 企画、科学者(行動規範、男女共同参画、講演会企画、等)にかかわる、提言、国際、選考(会員および連携会員)の各委員会を置く。機能別委員会は会員のみで組織する。但し、国際対応等必要な場合には、連携会員を委員とすることも可とする。
- 国際委員会 機能別委員会の一つである国際委員会には、分科会として、「国際会議主催等検討」、「アジア学術会議」、「国際学術団体」等を置く。
- 国際委員会の下に置く「国際学術団体分科会(総称)」は、分野別委員会またはその下に置かれる分科会と兼ねることが可能とする。
- 分野別委員会 「地球科学委員会」を含む計30の委員会を置く。各委員会に所属する会員及び連携会員については、各部からの推薦をもとに、会長が委嘱する。
- 学術研究団体との協力 常時協力すべき学術研究団体を特定し、「日本学術会議協力学術団体(総称)」とする。協力の内容には、会員及び連携会員の選考等に当てる人材情報の提供が含まれる。

- 学術研究団体の連合体との協力 個々の学術研究団体間の情報交換等の活性化に資することから、個別の学術団体との協力に加えて、より一層密な協力を学術研究団体の連合体と行うこととする。

[7] アジア・大洋州地球科学会(AOGS) 第2回年会報告

産業技術総合研究所 佐竹健治

アジア・大洋州地域は世界最大の人口を持ち、急速に発展中です。また、昨年末のスマトラ島沖地震・津波に代表されるように、地域特有の地球科学的現象を多く抱えています。一方で、地域内の格差(経済・科学)が大きく、欧米の基準をそのまま持ち込むことはできません。このような特色を持つアジア・大洋州において、アジア・大洋州の研究者による、アジア・大洋州のための学会を作ろうというのが、AOGSの理念です。

AOGSの準備は数年前から始まり、昨年(2004年)夏には第1回の年会が開かれました。第2回年会は今年の6月20-24日に、シンガポールで開かれました。

●参加者

第2回年会では956件の論文が発表され、参加者は796名でした。事前には1428件の論文が投稿されており、実際に参加・発表したのは投稿数の約3分の2に留まりましたが、第1回年会(755名)に比べて参加者はわずかながら増加しました。

国別の内訳は日本234名(約29%)、米国99名(12%)、インド73名(9%)、韓国73名(9%)、中国57名(7%)、台湾40名(5%)の順でした。

セッション別では、超高層(Solar and Terrestrials)が24%、惑星科学(Planetary Science)が22%、固体地球(Solid Earth)及び気象・海洋(Ocean and Atmosphere)がそれぞれ19%、陸水(Hydrological Science)が13%の順でした。

●口頭及びポスター発表

会期中は18の講演会場に別れて口頭発表が行われました。平行セッションが多すぎるという意見が多かったため、来年度は講演会場数を減らす予定です。

固体地球で特に注目を浴びたのは、2004年12月と2005年3月のスマトラ沖地震についてのセッションでしょう。インドの研究者から、アンダマン・ニコバル諸島でのGPSや現地調査の結果や検潮記録上の津波波形の析結果など、興味深い結果が報告されました。

会場3階のロビーに、ポスターと展示会場が設けられました。今年は、大きなコンコースを利用し、午前・午後の休憩時間にはコーヒー・紅茶も提供したため、休憩時間には人ごみができました。ただ、ポスターの配列が先着順であったなど、反省材料は残りました。

●特別講演

会期中、毎日午後4時から特別講演が行われました。20日は開会式も兼ね、シンガポール環境・水資源大臣によるスピーチのあと、佐竹がスマトラ島沖地震と津波について、中国の Xu 氏が重力の時間変化について講演しました。火曜日には西田篤弘氏が磁気圏の対流について、水曜・木曜は Ramanathan 氏(米国)が Hagfors(ドイツ)氏がそれぞれ大気科学、電離層研究についての講演を行いました。

●一般向け講演

研究発表の他に Public Lectures として一般向け講演が月曜～木曜の毎日開かれました。月曜はスマトラ地震と津波、火曜は太陽と惑星、水曜日は地球、木曜はシンガポールが共通のテーマとして選ばれ、毎日4～5件の講演(各45分)が行われました。スマトラ地震と津波では、日本(北大 谷岡勇市郎氏)、インドネシア、インド、中国からの参加者が講演を行いました。地元(シンガポール)の中高生が団体で参加し、聴衆は約200名でした。

●総会と AOGS の組織

初日の特別講演の後に総会が開催され、会則の改正、役員の選挙の公示などが行なわれました。

会則について最も重要な点は、AOGS の年会に一度参加し登録料を払うと、以後3年間は自動的に会員となる点です。昨年に引き続いて参加した人には、会員カードが配布されました。

会期中に行なわれた役員の選挙の結果、副会長(2006年からの会長)として、西田篤弘氏が選出されました。来年までの役員は以下の通りです。

会長	Wing-Huen Ip (台湾国立中央大)
副会長	西田 篤弘 (総合研究大学院大)
庶務	佐竹 健治 (産業技術総合研究所)
庶務補佐	齋藤 義文 (宇宙航空研究開発機構)
会計	Shie-Yui Liong (シンガポール国立大)
会計補佐	Edmond Lo (シンガポール南洋理工大)
陸水(HS)部会長	Yong-Nam Yoon (韓国 高麗大)
大気海洋(AO)部会長	Satish R Shetye (インド国立海洋研究所)
惑星(PS)部会長	齋藤 義文
固体地球(SE)部会長	Yuntai Chen (中国地震局 地球物理研究所)
超高層(ST)部会長	Iver Cairns (豪 シドニー大)

●第3回年会へむけて

第3回年会は同じくシンガポール Suntec 会議場で2006年7月10～14日に開催される予定です。セッション公募の締切は10月1日、予稿の締切は2006年2月1日の予定です。

日本地球惑星科学連合会員の皆様には、積極的に参加し、アジアの地球惑星科学を盛り上げて頂きたいと存じます。

AOGSに関するすべての情報は以下のウェブサイトにあります。

AOGS ウェブサイト <http://www.asiaoceania.org/>

AOGS 年会 <http://www.asiaoceania-conference.org>

日本地球惑星科学連合ニュース 第1号

2005年7月27日発行

発行: 日本地球惑星科学連合

運営会議議長

浜野洋三

編集: 広報・アウトリーチ委員会

連合ニュース担当

佐藤智美